



PRESENTED BY
鏡裕之
イラスト
牡丹

探ませよ
の
正義
ジャスティス
6

Rina
Pink-police



Lucrezia

Demonia-Nurse



6

PRESENTED BY
鏡裕之
イラスト
牡丹

揉ませてよ
オレの正義

ぷちぱら文庫
creative

デモニア救星団 第〇八一基地

本星の領土を守る為に、地球に設置された八十一番目の基地。ベルゼリアを筆頭に基地を守る。



ベルゼリア
戦闘局長。デモニアでも特別な存在である、純血のヴァンパイア。



アイゼナハ
庸の才能を見抜き、乳揉み係にすることでパワーアップを図る。



インフィニア
〇八一基地の女暗黒騎士。庸の活躍で、最強部隊の座を取り戻す。

目次

- 第一章 歓喜の聖母教会
- 第二章 ベルゼリア帰還
- 第三章 ポールシフトは起こさせない
- 第四章 電話
- 第五章 葛藤
- 第六章 目撃
- 第七章 上級生のパイズリ
- 第八章 出撃
- 第九章 デモニア急襲
- 第十章 首輪
- 第十一章 敗北
- 第十二章 儀式
- 終章 暗黒騎士

グローバル国際学院

学校への寄付金や生徒の能力によって、特別生、優待生、一般生、修道生のヒエラルキーが存在する。

濁川 庸

一年ブロンズ組の修道生。学院では未だに底辺の扱いだが、救星団では躍進を続けている。

クラリッサ・ローズウェル

一年ブロンズ組の特別生。クラスの最上位に位置するお嬢様。



ピンクポリス

人気アイドルの秋元理奈のエージェント姿。力を失っていたが復活する。



ローズスコラ

庸の同級生、聖ルミナが変身した姿。中学から一緒だった庸を慕っている。



ブルーゴージャス

プライドの高い、学院の特別生・真王寺詩鶴が変身する弓使いのエージェント。



デモニア救星団壊滅を狙う正義の味方達。聖母教会を拠点にし、〇八一基地への攻撃をしかける。

セイント・エージェント

第一章	歓喜の聖母教会
第二章	ベルゼリア帰還
第三章	ポールシフトは起こさせない
第四章	電話
第五章	葛藤
第六章	目撃
第七章	上級生のパイズリ
第八章	出撃
第九章	デモニア急襲
第十章	首輪
第十一章	敗北
第十二章	儀式
終章	暗黒騎士

深夜でも光の絶えぬ東京――。

白く冷たい街灯と道路を走る車の赤いテールランプが、一面の夜闇の中に見える。照明的に東京が緘黙することはない。夜の一時は、まだまだ多くの人が活動する時間帯だ。

八階建ての高層ビルの屋上に、隣のビルの屋上から四人の人影が超人的な跳躍を見せて飛び下りた。暗い屋上には大型の室外機がいくつも並び、少し離れて貯水倉庫が影の中に沈んでいる。

四人は貯水倉庫の脇を通って小屋に辿り着いた。小屋には、ドアノブの上の方に数字のボタンが並んだ頑丈な扉がついていた。先頭の女がナンバーを押す。解錠の音が鳴り、扉が開いた。扉をくぐって、階段を下りる。再び暗証番号錠のついた扉が姿を見せた。先頭の女がナンバーを押すと、ロックは解除された。

扉が開いた先に待っていたのは、聖母教会第二教会の白い玄関だった。マンションとは思えないほど、広い玄関である。明るい照明が、四人の帰還者を照らした。

三人の女と一人の男だった。何かのイベントの帰りなのか、四人とも蝶眼鏡を着けて派手なコスプレ衣装を着ていた。

先頭の一人目は弓矢を携え、高く盛り上がった巨乳の上から青いボディコンドレスを着ていた。あまりの乳房の突き出し具合に、ボディコンドレスの胸がツンと尖っている。胸の真ん中にハート形のホールが開いて、深い谷間が覗いている。豊かな谷間である。乳房はGカップぐらいありそうだ。

その次の二人目は、ピンク色のかてかのマイクロトップに若々しい爆乳を包み、同じくピンク色のかてかのミニスカートを穿いて、コルトパイソンを握り締めていた。まるでピンクバージョンのミニスカポリスである。それも

爆乳のミニスカボリスだ。胸は優にHカップある。

次の三人目は、白いタイフロン・シャツ——身体の前で裾を結び合わせた丈の短いシャツ——に、はちきれそうな爆乳を包み、赤いチェックのミニスカートを穿いてハンズオンを携行していた。胸は一メートルオーバー、Iカップぐらいありそう。非常に高く立体的に突き出している。三人の女性の中では一番の爆乳である。

そして最後の四人目は、一八〇センチ近くの細身の長身を白いジャケットで覆い、白いズボンを穿いていた。唯一の男である。

先頭から順番にブルーゴージャス、ピンクボリス、ローズスコラ、ホワイトグラス——。悪の組織デモニア救星団と戦う正義の味方、セイント・エージェントのメンバーだった。四人とも、グローバル国際学院高等部に通う高校生である。

(ついに勝った……)

とブルーゴージャスこと真王寺詩鶴は、武者震いを覚えた。

一日前までは、自分たち正義の味方は窮地に立たされていた。デモニア救星団に勝利するどころか、またメンバーを倒されてしまうかもしれない——そこまで追い込まれていたのだ。

だが——。

(わたしたち、勝ったんだ……！)

ようやくデモニア救星団の基地の破壊に成功したのだ。四人で確認した。基地があったところが陥没していたのも自分の目で見てきた。第〇八一基地は、地球上にあまたあるデモニアの基地の一つに違いないが、それでも大きな収穫である。四人が普通の人間からセイント・エージェントになって、初めて挙げた大勝利、大金星だ。

「勝利の雄叫び、うぇーい！」

ピンクボリスが声を上げ、ホワイトグラスもローズスコラも、詩鶴も輪に入った。ローズスコラと両手でハイタッチを交わして抱き合う。Gカップの美球とIカップの豊球とが合わさり、ひしゃげる。

「ありがとう！」

思わず詩鶴は感謝の言葉を叫んだ。上辺ではなく、心の底から自然と感謝の言葉が洩れる。

「ううん、真王寺さんこそありがとう……！ 凄かったよ！」

「夢中で……！」

ローズスコラに褒められて、詩鶴は思わず照れてしまった。自分でも信じられないくらい、敵戦闘員との戦闘では身体が動いた。暗黒騎士たちの攻撃も完全に見切れた。すべては強力な乳揉み係、濁川庸のおかげだ。

「いえ……！」

突然ピンクボリスがハイタッチを要求してきた。詩鶴は身体を向けてハイタッチ、抱き合った。Hカップのアイドル乳とGカップの美乳とが密着し、互いにひしゃげる。

「ブルー、がんばったよ。勝ったの、ブルーのおかげだよ」

「ううん、あなたの作戦のおかげよ」

と詩鶴もピンクボリスを褒め返す。

「ブルーががんばって胸を揉まれたからだよ。庸クンの力、凄いでしょ？」

ピンクボリスの言葉に、思わず詩鶴は赤面した。そのことはしばらく忘れていたのに……。

「ブルー！」

ホワイトグラスが声を掛けた。詩鶴はホワイトグラスに身体を向けて、勢いよくハイタッチした。思わず高揚の中で抱き合ってしまった。

相手は男の子なのにな？

別に彼氏じゃないのに？

テンションが絶好調で、ついハイタッチの勢いでハグし合ってしまった。あっと思った時にはもう遅い。超隆起乳首の三弾ロケットのGカップ乳が、戦闘コスチュームの中でたわみ、ひしゃげた。豊満な弾力をホワイトグラスにまき散らす。ホワイトグラスがゾクツと身体をふるわせた。自分のオッパイに反応したに違いない。詩鶴は咄嗟にハグを解いた。

「す……凄かったよ……別人みたいだった……」

とホワイトグラスが、カラカラの喉でつぶやいた。

「あなたが食い止めてくれたおかげよ……」

と詩鶴は答えた。自分と彼のどちらがリーダーをするのかでずいぶんと揉めて、一時期二人の間は険悪になったが、それも今となつてはよき思い出だ。

「そんなこと……ないよ……おれ、一番役立たずだったし」

ホワイトグラスが赤面して口籠もる。すかさず、ピンクボリスが、

「胸揉まれてないもんね」

とからかいの言葉を向ける。

「男が男に胸を揉まれてたまるか！」

ホワイトグラスの大声に笑いが起きる。

「みんな、よくやったわ」

廊下からエージェントたちの親玉、エージェントAが姿を見せた。サングラスを掛け、パールホワイトの大きな襟の半袖ブラウスを着て、紺色のデニムのストレートパンツを穿いている。胸は、重さ八キロのスイカを詰め込んだみたいに凄い勢いでパールホワイトの半袖ブラウスを突き上げている。爆乳ではなく超乳である。きつとバストは一一〇センチ近くあるに違いない。Gカップの詩鶴でも、自分が貧乳に思えてしまうほど規格外の大きさである。

「ずっと見ていたわ。素敵だったわ。あなたたち、最高」

とエージェントAがべた褒めする。詩鶴も、他の三人のエージェントたちも、顧問の先生に褒められた部員たちのように顔をほころばせた。皆、エージェントAに勧誘されて、正義の味方になったのだ。

「まずはシャワーを浴びて、少し休憩して。連中は奪還に来るでしょうけど、防ぐ手はあるわ」

そうだ、と詩鶴は我に返った。

反撃だ。

基地は崩壊したが、デモニア星人たちが全滅したわけではない。きつと態勢を立て直して濁川庸を奪還に来るはずだ。

でも、どうやって？

自分たちにも学校がある。そして学校には、濁川の味方だった者がいる。二十四時間、完全に濁川をガードしきれない。

「安心して。敵が奪還しても、もうボールシフトできないようにすればいいんだから」

とエージェントAが微笑んだ。

「そんなこと、できるの？」

とピンクポリスが聞き返す。

「ええ。でも、その話は後で。あなたたち、働きすぎよ。

戦士にも少しの休息は必要なのよ。さ、早く」

エージェントAの言葉に、真っ先にホワイトグラスが動いた。奥のシャワールームへ消える。

「シャワーは濁川のところにもあるから、急いでいる子は濁川のところを使って」

濁川と言われて、詩鶴の胸の奥が疼いた。

自分が強くなったのは、濁川庸に胸を揉まれたからだ。

でも、好きでもない相手に何度も胸だけでイカされてしまった。執拗に乳首を責められてイカされて、オッパイを吸われてイカされて……。

気持ちよかったけど、相手は好きではない男。むしろ、軽蔑するべき相手。自分はグローバル国際学院の最上層。

相手は最下層。最下層の男に胸を自由にされてしまったという、屋敷の主人が奴隷にイカされてしまったみたいな複雑な気持ちが残っている。

今でも、濁川を軽蔑している？

いや。

軽蔑の気持ちはない。ただ、複雑なのだ。

「わたしは……ホワイトを待ちます」

と詩鶴は答えた。

本来なら、濁川に礼を言うべきなのかもしれない。でも、さんざん胸でイカされただけに、会うのは気恥ずかしい。

相手は、学園では最下層の男なのだ。最上層の自分が、自分をイカせた最下層の男に会うのは、やっぱり恥ずかしい。

「じゃあ、わたしは庸クンのシャワーを」

とピンクボリスが言い出し、
「わ、わたしも……」

と赤面しながらローズスコラがつづいた。二人はすぐに
玄関から奥の部屋へ向かった。

きつと濁川に会いに行くのだ、と詩鶴は思った。ローズ
スコラは濁川が好き。そして、どうやらグラビアアイドル
のピンクボリスは濁川と肉体関係があるらしい。

不潔？

そう唾棄できない。蛇蝎の如く濁川を嫌うというのも無理だ。自分たちが勝利したのは、他ならぬ濁川のおかげなのだ。濁川が女の子たち全員の胸をさわったから、女性エージェントは皆パワーアップした。おかげで手強いデモニア星人の暗黒騎士たちを打ち破り、基地を破壊することができたのだ。濁川の援助なくして、勝利はない。戦ったのは自分たちエージェントだが、一番の立役者は濁川庸——一年の修道生、グロバリア国際学院の最底辺なのだ。濁川庸は、自分たちエージェントの中では新入りの裏方だったが、ただの裏方でも脇役でもなかった。むしろ主役だった。今後も勝利を重ねるためには、濁川庸の協力が必要になる。

（やっぱり、わたしもお礼をしなきゃだめよね……）

2

ピンクボリスこと秋元理奈は、真っ先に玄関に上がった。

気分はこれまでになく高揚していた。なんといっても、永遠の宿敵だったデモニア救星団を倒したのだ。連中の基地の破壊に、ついに成功したのだ。グラビアアイドルとしてデビューが決まった時と同じくらい、理奈は興奮していた。

ああ、正義の味方って、なんて素敵！

超気持ちいい！

正義の味方って最高！

これも全部、クラスメイトの庸クンのおかげだ。自分も

ローズスコラもブルーゴージャスも庸クンに胸を揉まれて
パワーアップした。おかげで敵の暗黒騎士を打ち破って、
基地に侵入することができたのだ。

（やっばり、庸クン、凄い……！）

庸クンは自分たちセイント・エージェントの宝物だ。庸
クンがいれば、どんな敵も打ち倒せる。もう敗北の言葉
は、自分たちにはない。

（庸クンにお返ししなきゃ……！）

いっぱい気持ちいいことをしてあげよう、と理奈は思っ
た。

どんなことを？

オッパイを押しつけちゃう？

もちろん。

でも、そんなの序の口。フェラだってしてあげたいし、
バイズリだってしてあげたいし、庸クンを思い切りイカせ
て感じさせまくりたい。

あれこれ妄想しながら廊下を先へと急ぐ中、

「濁川くんに会おうの……？」

と後ろからローズスコラこと聖ルミナが背後から声を掛
けてきた。同じグローバル国際学院高等部の一年ブロンズ
組の一般生である。自分は優待生——一つ上のランクだ。
学園での階級は違うが、同じクラスメイトである。

「ローズも来るの？」

理奈が尋ねると、

「うん……」

と答えて、聖ルミナは表情を曇らせた。

「基地のこと、どうする？ 正直に言う？」

少し暗い声でルミナに聞かれて、理奈は沈黙した。

エージェント専用の乳揉み係にされた今でも、庸はデモ
ニア救星団に肩入れしている。その気持ちは、理奈にはよ
くわかる。

庸は、学校では今もなお最底辺だ。用務員のようなださ
い灰色の服を着せられて、学校の最下層、修道生として毎
日午前七時半に登校して教室を清掃している。そして自分
の学費や生活費を出してくれている特別生を毎朝毎晩、お

出迎えとお見送りをくり返している。不幸な苦労人だ。親に学費を出してもらっている一般生の中には、修道生を馬鹿にする者も少なくない。

デモニア救星団は、庸を初めて認め、初めて評価し、初めて上の役職へと引き上げたところだった。基地でも最底辺の奉仕局員として働いていた庸を戦闘員に引き上げたのは、デモニア救星団である。作戦隊長に任じたのもまた、デモニア救星団だ。それだけに、庸はデモニア救星団を自分の心の故郷のように感じている。

基地が全壊したと正直に言えば、きっと庸は落ち込んでしまいに違いない。せっかくオッパイでお礼をしようとしても、気分が乗らないから……と庸に断られてしまうだろう。

「言うわけ……いけないよね」

と理奈は答えた。

「でも、きつと聞いてくると思う……」

とルミナはためらいながら自分の意見を述べた。ためらいながら、というところが引つ込み思案のルミナっぽい。彼女の言う通りである。

「誤魔化すしかないよ」

「誤魔化したら、バレちゃう」

と珍しくすぐにルミナが反論した。理奈も言い返した。

「正直に言ったら落ち込むよ」

「うん……」

とルミナが口籠もる。ルミナにも妙案はないのだ。突っ込んでくる者のほとんどは、対案があつて言うわけではない。ただ、おかしいと思つて言うだけなのだ。

ルミナに対案を期待する？

無理。

ルミナはいつも待つだけの女だ。だからきつと中学生の時だって好きな庸クンを見るだけで何の進展もなかったんだろうし、今だってそうなのだ——庸クンをポールシフトさせるために自らパイズリを名乗り出たのは、正直びっくりしたけど——。

ともあれ、自分で考えるしかない。

「ぎりぎりまで追い込んだけど、あと少しで失敗しちゃったってことにしよう。ブルーもローズもみんな活躍できたけど、ぎりぎり基地は死守されたって。でも、今までで一番がんばれたから、お礼をするっていうのでどう？」

理奈は新案を披露した。

「それで誤魔化せるかな？」

「誤魔化せるよ」

理奈は衣装部屋に入った。今回はどんな服を着て、庸クンをびつくりさせよう。庸クンはどんな服をよろこぶだろうか？

遅れて聖ルミナが入ってきた。戦闘では違うが、学校ではルミナは地味でおとなしい。男の子を自分から誘惑するなんてできないだろうし、そもそもまだ処女だ。

（またわたしが選ばなきゃなんないの……？）

面倒だなと少しイラッとしたところで、

「濁川くん、どんな服を着たら喜ぶかな？」

とルミナが尋ねてきた。

「エッチなのを着れば、喜ぶんじゃない？」

と理奈は投げ槍に答えた。その意味は、『自分で選んで』である。

「このままじゃ、だめかな？」

とルミナが問いかけてきた。

「このまま？」

理奈はルミナの戦闘コスチュームを見た。そして、自分の戦闘コスチュームを見た。

二十畳近くある広い寝室だった。その寝室の半分近くはプールである。外に向かって足元から大きく開かれた窓があり、そのすぐそばにプールがある。窓際から部屋の入口方向までプールを泳ぐと、上がって左手にアイボリー色のL字型のソファァーがあり、プールの奥に広いキングサイズのベッドがある。壁は薄いブルーだが、地味に豪華である。

だが、庸の心はまったく豪華な気分にはなれなかった。幅広いベッドに寝転がっていても、心は落ち着かない。理奈やルミナたちがいないうちに逃げようとしてエージェントAに捕まって、いっぱいパイズリをされて、この部屋に引き戻されてからずっとそうだった。

悔しい。

無力な自分が悔しい。

心はデモニアなのに、デモニアの味方になれない自分が悔しい。

ドアに鍵は掛かっていないが、たぶん、また逃げて同じだと庸は思った。エージェントAとしては《逃げようとしても簡単に捕まえられるわよ》ということなのだろう。

(もう帰って来たのかな)

と、ふと庸は思った。さきほど、ドア越しに大きな声が上がっていた。きっと四人のエージェントたちが帰って来たのだ。気炎を上げていたということは、勝ったのだ。

暗黒騎士のアイゼナハは？ インフィニアは？ クラリッサは？ ナースのルクレツィアは？ 仲間の戦闘員たちは？ 基地は大丈夫なのだろうか。

(もし破壊されていたら……)

と庸はたまらなく不安になった。自分が三人の女たちをパワーアップしたことで基地が破壊されたとしたら、基地を破壊したのは自分だ。みんなに迷惑を掛けたくないのに、みんなにひどいことをしたくないのに、おれは――。

突然扉が開いて、

「ただいまあ〜♪」

と甘ったるい声とともに理奈が飛び込んできた。ピンク色のアメリカの婦人警察官っぽい帽子をかぶって、エッチなボリスよろしくピンク色のマイクロトップで乳房の半分だけを覆っている。白い乳房が波打っている。贅肉のないお腹とお臍は剥き出しだった。その下はピンク色の短いミニスカートである。

理奈の戦闘コスチューム——セイント・エージェントの時の姿である。自分が理奈を捕まえ、倒した時の思い出の衣装だ。あの時、夢中で理奈のオッパイを揉みまくった。

その時の記憶が蘇って、ムラツとする。

理奈の後ろからはルミナも姿を見せていた。理奈と同じく戦闘コスチュームだった。乳房の下三分の一は、タイフロント・シャツに収まりきらずに盛大にはみ出している。はみ出した部分からしても、立体感のある、非常に高く突き出したバストである。日本人には珍しく、乳腺質のバストだ。おまけに赤いチェックのミニスカートからは、瑞々しい太腿が剥き出しになっている。

「庸ク〜ン♪」

と叫ぶと理奈が突然抱きついてきた。

庸は面食らった。少し土っぽい香り、埃っぽい香りがする。デモニア基地で戦闘してきたのだ。

（みんなボコボコにされた？）

途端に不安が増す。安堵が駆逐されて、心の領地が不安に侵食されていく。

「基地、破壊できなかつた〜！ 中には入れたんだけど、凄いい分厚い防壁ができて、ローズの無重力弾でも壊せなかつた〜！」

と理奈は甘えて泣き言を叫んできた。

（よかった……！ 基地は平気だったんだ！）

不安が安堵に押し返され、

「アイゼナハとインフィニアは？」

庸が尋ねると、甘えた声で理奈が答えた。

「聞いて。ばつちり互角に戦えたの！ 庸クンのおかげだよ！ でも、基地の奥に逃げられちゃった〜」

さらに安堵が不安を押し返して、庸の心の領地を取り戻す。

「みんなは？ 戦闘員と奉仕局員は？」

「居住区に入れなかつたから、奉仕局員はわかんない。戦闘員は倒したけど、きつともう基地の中に運び込まれてると思う」

理奈の返事に、

（よかった……！）

庸はようやく安堵の息をついた。不安は駆逐され、安堵が心の領地を完全に取り戻した。安堵が緑色、不安が赤色

ならば、心のマップは赤色からすべて緑色に変色したのだ。

「みんな、凄い戦えたんだよ。ブルーもピンクも凄かったし。でも、一番凄かったのはわたし♪ だから、お・れ・い♪」

そう理奈は言うのと、一旦身体を離して、今度は庸の顔面にオッパイを押しつけてきた。四枚のDVDを出している現役アイドルの九十四センチのHカップ乳が、むっちりと庸の顔を塞いだ。高校生らしい、張りのある瑞々しいふくらみがパチパチの弾力とともに弾けて心地よく顔を圧する。

（理奈ちゃんのオッパイ……!）

グラビアアイドルに爆乳を押しつけられる歓喜に、庸は思わず理奈の背中に腕を回して、さらにオッパイを味わった。元々サイン会に並ぶほど、庸は秋元理奈のファンだったのだ。

「あん、庸クン♪」

庸の後頭部をつかんで、理奈がさらにHカップ乳に庸の顔をこすりつけた。なめらかな乳肌が顔に密着する。庸は猛烈に興奮した。今人気上昇中のグラビアアイドルが、庸にオッパイを押しつけてエッチなサービスをしてくれるのだ。

（さわりたい……!）

思わず股間が盛り上がった。

（でも、さわったら、またパワーアップしちゃう?）

一瞬、心にブレイキが掛かる。

（けど、もう今日さわってるから、またさわってもこれ以上パワーアップすることはないか……）

なら、さわっちゃえ。

庸はわざと首を横に振った。顔面でアイドルのHカップ乳を味わいながら、鼻でオッパイをほじくる。

「あん、庸クンったら」

「理奈ちゃんが胸を押しつけるから」

と興奮しながら答える。理奈が笑う気配がした。

「さわりたい? バイズリしたい?」

と誘う。

（両方したい……！）

誘惑の言葉に興奮する。

「まだダメだよ。ローズもお礼したいって」（聖も？）

理奈が離れた。戦闘コスチュームを着たローズスコラ——同じグロバリア国際学園一年ブロンズ組の聖ルミナが、もじもじしながら庸の近くに立っていた。白と赤のタイフロン・シャツの下からは、むっちりと高く盛り上がった立体的な豊球が突き出している。百センチ超の、クラスナンバーワンの爆乳である。

顔は地味だが、何度見ても凄いオッパイだった。隆起具合とオッパイの丸いふくらみ具合が半端ではない。中学の時から凄かったが、高校に入ってからさらに大きくなった。今や、一〇一センチのIカップだ。

「ほら、ローズ。早く」

理奈に急かされて、ルミナはたどたどしい足どりで庸に近づいた。移動時の上下動は決して激しくないのに、高く隆起した双球が赤と白の戦闘コスチュームの下でゆさ、ゆさと揺れる。庸の顔に近づきながら、双つの下乳が弾む。

（す、凄い……！）

乳房が迫り、興奮が急上昇する中で、ルミナがはにかみながら庸の後頭部に手を回した。理奈と違って、手つきは自然でも大胆でもない。ためらいがちである。それでも庸の頭をつかみ、ゆっくりと乳房に押しつけた。

乳腺質のバスト特有の、ばちゅんと弾ける弾力感拔群の質感が顔面に炸裂した。猛烈な乳圧とともにバストが顔を押し、庸の顔を弾く。と同時にむっちりしたふくらみが広がり、顔に吸着していく。

弾力感もポリウムも、理奈以上だった。どんなに理奈が人気上昇中のグラビアアイドルでも、バストの大きさと立体感ルミナに敵わない。

（たままない……！ やっぱり聖のオッパイ、凄い……！）

同級生の爆乳に欲情しながら、庸はルミナの背中に腕を回した。逃げないようにルミナの背中を抱き寄せて、さら

にバストに顔をうずめる。

双つの豊球が弾力感を増して顔面でひしゃげ、ムチムチの快感と弾力とを炸裂させた。女性の身体の中で最も弾力とやわらかさに富む胸のふくらみが庸の顔を圧しながら、優しく、そしていやらしく、庸の顔を受け止めていく。下三分の一ほど剥き出しになった下乳の部分が、庸の顔の一部にこすれた。むっちりしたふくらみが、顔に吸着する。

(もっとさわりたい……!)

ルミナは、中学時代からずっとオッパイをさわりたいと思っていた相手である。セーラー服を押し上げる爆乳に、体操服から突き出そうな豊乳に、何度欲情したことか。そのオッパイが、今、自分の顔に密着しているのだ。

欲望を抑えきれなくなつて、庸は両手を戦闘コスチュームの下に滑り込ませた。じかに生乳を揉みしだく。パチパチの弾力と一メートルオーバーのポリウレタンが両手に弾ける。

「あん、よ、庸くん……!」

ルミナが慌てる。

(ほんと聖の胸、でかい……!)

庸はさらに力を込めて両乳を揉みしだいた。たつぷりと握力と欲望をぶつけて、十指で豊球をぐにぐにと握り潰していく。弾力たつぷりのIカップのふくらみが手の中で弾んだ。指の狭搾を受けて張りのある双球が歪に変形し、手の中で充満していく。両手にムチムチの弾力ともっちりした乳肌が吸着して、気持ちよくてたまらない。同級生のバストを揉みしだいているだけで、射精しそうなくらい気持ちよくなってしまう。

庸は人差し指と中指で乳首を挟んだ。上下にすり動かして、上半身最大の性感帯をこすり、刺激してやる。

「ひあっ……よ、庸くんっ……!」

乳首を齧られて、ルミナの肢体がピクンピクンと小さく跳ねる。

庸は激しい興奮を覚えた。

相手はエージェントの戦闘コスチューム。デモニアの戦闘員として戦っていた時の記憶と感覚が蘇る。自分はポー

ルシフトで正義の味方にされて、エージェントの隠れ家に
幽閉されているのに、まだデモニアの戦闘員で正義の味方
と対峙しているような気がしてくる。



（エージェントのオッパイを倒してやる……！）

庸は目の前のエージェントを——すなわち、双つの胸の尖塔を——指で何度もこすり合わせた。ぶにぶにの突起が硬度を増しながら何度もたわみ、なぎ倒される。あつ、あつ、あつとルミナが短い間隔で嬌声を上げた。デモニア基地の敷地内で、ルミナを——ローズスコラを倒してオッパイを揉みしだいたことが思い出されて、さらに興奮する。

（エージェントを倒す……！）

庸は戦闘コスチュームをめくった。立体的にまあるく盛り上がった見事なIカップ球が躍りだす。すぐさま庸はバストにしゃぶりついた。

「ああっ！ 庸くん、だめえ……！」

ルミナの肢体がまたビクンと跳ねた。吸引を逃れようと、少し身をよじる。でも、逃さない。ちゅーつ、ちゅーつと淫乱な吸引音を立てて一〇センチのバストを吸い込み、同級生のパツンパツンのオッパイを食っていく。

「ずるいんだ、ローズにだけそんなことして」

と軽い嫉妬の台詞とともに理奈が庸の背中に乳房を押しつけてきた。両手を庸の胸に回して、服の上から指先で庸の乳首をほじくる。

（んあっ……！）

むず痒い、甘い疼きが胸に走った。男も乳首は感じるのである。

「わたしのオッパイはしゃぶってくれないの？」

と理奈が誘惑する。

（しゃぶりたい……！）

でも、目の前のルミナのオッパイもしゃぶりたい。だが、顔は一つ、口も一つである。

（このままルミナのオッパイをしゃぶっちゃう？ それとも、理奈ちゃんのオッパイにしゃぶりついちゃう？）
迷う。

「パイズリしたい？」

と理奈が畳みかけてきた。

パイズリはしたい。理奈ちゃんとも、ルミナとも。でも、どっちとする？

また迷う。

迷っている中、さらに理奈が誘惑の台詞を耳元に囁いてきた。

「それとも——二人としたい？ オッパイ吸いながらパイズリされたい？」

庸は思わず、ルミナへの乳吸いを中断した。

（オッパイを吸いながら……？）

4

庸はキングサイズのベッドの上に、仰向けに寝転がっていた。だが、寝室の天井は見えない。天井を遮る形で庸に覆いかぶさっていたのは、戦闘服姿のルミナだった。剥き出しになった弾力たっぶりの一〇センチのIカップ乳が、庸の顔を塞いでいる。庸はAV男優も絶賛しそうな弾力とボリュームに呻きながら、ルミナのオッパイをしゃぶっていた。そして庸の下半身の方では、理奈がコスチュームを着たまま、庸の両脚の間に正座して割って入っていた。庸の腰と太腿を自分の太腿に引き上げ、庸のペニスを九十四センチHカップの胸に挟んでゆさゆさと揺らしている。俗にスタンダードパイズリと言われるパイズリの体位である。

庸はルミナのオッパイを吸いながら、理奈にパイズリされていた。セイント・エージェントのオッパイを攻めながらエージェントにパイズリで攻められていたのだ。攻めながら攻められる「攻め受け」の快感がたまらない。オッパイを攻めているのに、オッパイに攻められているのだ。

「ローズがイク前にイッちゃだめだよ。もうパイズリしてあげない」

なんてことを言いながら、理奈がやわらかいHカップ乳を弾ませる。何千人もの男たちがDVDを見ながら乳揉みやパイズリを妄想した爆乳で、理奈が庸のペニスをこすり立ててくる。速すぎ遅すぎ、たつぷりと乳肌をペニス

に密着させて、豊乳で肉棒を摩擦してくる。



正直、もうイキそうだった。オッパイを吸うだけでも気持ちいいのに、その上パイズリをされたら気持ちいいなんてものではなかった。気持ちいいものが二つも重なっているのだ。

理奈は微笑みながらHカップ乳を揺さぶっていた。理奈にはわかっていいるのだ。どんな密着具合でどんな挟み具合でどんなスピードでこすれば庸がイクのかを――。

「ンフ。もうイキそうになってる。戦闘員β、パイズリに弱いよ♪」

と理奈が言葉でもいじる。戦闘員βは、庸がデモニアの秘密基地で働いていた時のコードネームである。

「こうしたら、どうなっちゃうかな♪」

戦闘コスチュームを着たまま、理奈がHカップ乳をぎゅっと寄せて、ばいんばいと弾ませてきた。乳房の上下動が激しくなり、摩擦具合が増加する。射精へ向けてギアをシフトしてきたのだ。射精の耐久テストでもするかのように、十秒、二十秒と連続で乳房を揺さぶり、同級生のベニスをしごいてくる。

（ああ、理奈ちゃん……）

チンポがとけそうになって、庸は腰を左右に振った。

「逃げてもだるめ♪ 戦闘員β、もう捕まえちゃったもんね♪ ポールシフトして味方にしちゃう♪」

もう味方になっているのに、理奈がエージェントと戦闘員とのバトルごっこをしながら、さらにパイズリストロークを加速させる。

（んあっ……！）

「庸くん……」

イキそうになったところで、ルミナが乳房を押しつけてきた。

（んぐぐ！）

もがきながら、ルミナのムチムチ乳を両方吸いまくる。両手で揉みしだきながら、ちゅーっ、ちゅーっといやらしい音を立てて双つの乳首を吸引する。ぶりぶりの乳首が庸の乳首に弾かれて、ルミナが戦闘コスチュームを着たまま、ピクピクと身体をふるわせる。

「庸くん、それ、だめえ……」

シートに手を突いたまま、ルミナの両腕がふるえる。

（聖のオッパイ、美味しい……！ やっぱり凄いオッパイ……！）

理奈にパイズリされてイキそうになっているのに、同級生のIカップ乳に猛烈に興奮して、自ずと性感が高まっていく。弾力たっぷりのオッパイを吸うたびに、庸自身が気持ちよくなってしまう。攻めと受けのダブルの快感に、チンポが爆発しそうになってしまうのだ。

「あ、これはイッちゃうかな〜♪」

理奈がパイズリストロークを加速させた。アイドルの爆乳がより密着し、摩擦スピードが上がる。庸のペニスが、エッチなアメリカンボリスのような戦闘コスチュームの中で爆乳にこすり立てられる。チンポがさらにとけそうになった。

（だめ、イク……！）

射精へつながる快感にもがきながら、庸はルミナの爆乳を吸った。ルミナがピクピクと身体をふるわせながら甘い声を上げる。

「庸くん、ほんとにだめえ……舌、動かしたらだめえ……」

ルミナが垂らした乳房を揺さぶる。逃すまいと余計にしゃぶりつく。ルミナが悶える。ムチムチの質感と甘い乳房の味わいに、興奮は増してもう射精寸前だ。

（聖のオッパイ、美味ひい……チンポ、気持ちいい……もうイッちゃう……）

「まだローズ、イッてないよ。先に庸くんがイッたら、もう二度とパイズリしてあげないから」

と言葉でいじめながら、理奈が凶暴なスピードでバストを揺さぶった。さらに摩擦度が上がった。グラビアアイドルのオッパイにしごかれて、ペニスがとろけそうになる。庸は呻きながら、たつぷり吸われて火照ったルミナのバストに顔を押しつけ、双球を吸引した。吸引すると同時にオッパイの質感と弾力感が押し寄せて、さらにペニスがとけて爆発しそうになる。

ルミナがさらに乳房を押しつけてきた。同級生のIカッ

ブに圧迫されて、興奮する。イキそうになりながら、庸は夢中で貪り吸った。吸うことでまた興奮する。その興奮に、パイズリが重なった。理奈のパイズリが、さらに加速する。もう我慢の限界だった。気持ちよすぎてペニスの感覚が消失した。

(聖い……理奈ちゃんっ……!!)

庸はルミナのバストに顔をうずめながら、激しく腰をふるわせた。エージェントの戦闘コスチュームの中で、どろどろの白い濁液が噴射した。悪を取り締まる正義の味方、悪を取り締まる婦人警察官の衣装の中で、庸の精液が高くほとばしっていく。

「うわっ、凄いい！ イッた♪」

理奈が歓喜の声を上げながら、つづけてバストを揺さぶる。射精して敏感になったペニスをしごかれて、さらに精液が噴射する。

「理奈ちゃん、それ、だめ……!」

「これ？」

と理奈がつづけてバストを揺さぶり、ペニスを責め立てる。

「それ、だめえ……またイクぅ……」

「いいよ、イッて♪ 腰が立てなくなるまでパイズリしちゃうから♪」

と理奈がさらにHカップ乳でペニスをこすり立てる。庸は寝転がったまま、左右に腰を振った。右に左に身をよじるが、逃げられない。肉棒は完全にエッチな婦人警察官のコスチュームの中、乳房の間である。さらに、乳房はペニスに密着して両側から肉棒を挟み込んだまま、激しくエッチなバウンドをくり返している。そして顔には、ルミナのオッパイ――。

庸は悶絶しながら射精した。グラビアアイドルにパイズリで搾られているのだ。しかも、そのアイドルは正義の味方セイント・エージェント。自分は正義の味方にパイズリされてイキまくっている――。

その状況に、いつそう勃起してまた射精してしまう。気持ちよすぎてオッパイを吸えなかった。それでも、ルミナ

はおねだりをするようにIカップ球を押しつけてくる。
むっちりした乳房の張りと質感とが心地よく顔に密着して
また勃起する。

（聖のオッパイ、気持ちいい、理奈ちゃんのオッパイ、気
持ちいい……！）

ルミナの爆乳に圧迫されて昇天しそうになりながら、理
奈のバイズリで庸は何度も射精した。

（おれ、死ぬ……）

快感に悶えながら庸は、正義の味方のバストに精液を連
射した。理奈がくすつと笑って、乳房を寄せたり、離した
りする。ねちゃっ、ねちゃっ、と精液の音が聞こえてきそう
である。

「じゃあ、交替ね。次、ローズ」

と理奈が言い、二人がポジション・チェンジする。今度
は理奈が乳房を吸わせて、ルミナがバイズリする番であ
る。タオルできっちり胸の精液を拭うと、

「はい♪」

と理奈が胸元を開いて、生乳を押しつけてきた。正義の
味方のオッパイが押しつけられる。ミニスカボリスのよう
な服を着ているだけに、余計に「正義の味方のオッパイ」
である。

（理奈ちゃんのオッパイ……！）

また興奮して、庸は理奈のHカップ乳にしゃぶりつい
た。相手は現役のグラビアアイドルなのだ。誰もが見たい
と願っている生乳を、今、庸は押しつけられているのだ。
庸は乳輪ごとバストを咥え込んで、吸い込んだ。女子高生
グラビアアイドルが、あぁんとエッチな声を上げる。

ふいに庸の腰が正座したルミナの太腿に引き上げられ、
弾力いっぱいIカップ乳に挟み込まれた。下垂を知らな
い突出度抜群の豊球が、凄い乳圧とともにペニスを包み込
む。その瞬間、

（やばっ……）

庸は早くも射精の予感に襲われた。一〇センチのバス
トは、完全に庸のペニスを挟み込んでいた。弾力はパツン
パツンなのに、肌は瑞々しくピチピチしている。その瑞々

しい乳肌が吸着した途端、イキそうな感じがしてしまったのだ。

すぐにルミナが両乳を同時に揺さぶりはじめた。双つの乳房が同時にバウンドする。女子高生らしい潤いたつぶりの豊潤な肌が、これでもかとはかりに庸のペニスにこすりつけられる。とろけそうな肌の感触と凄い乳圧とに、庸は思わず呻いた。もうチンポがとけそうだ。

「あ。感じてる。戦闘員のくせに、エロいの♪」

と理奈が庸の顔面に乳房を押しつけてきた。

「ほら、吸って♪ アイドルのオッパイを吸って♪」

理奈の言葉に、思い切り興奮して両手で九十四センチのバストをつかんでしゃぶりつく。尖った乳首をぺろぺろと舐め、いっそう乳首を突き立たせてから甲高い音を立てて吸引する。吸うたびに、乳房が伸ばされて口腔で尖る。ちゅばちゅばと響くいやらしい吸引音に、あっ、あっ、あっ、と理奈の嬌声が重なる。

（理奈ちゃんのオッパイ、美味しい……！）

アイドルのオッパイを吸ってるんだという快感に、否応なしにペニスは勃起して硬さを増していく。そのペニスは、一メートルオーバーの同級生のオッパイに、こすられていた。ばいんばいんと音がしそうなほどの迫力で、ルミナのIカップ球が庸のペニスをしごいている。

初めてルミナにバイズリされた時もそうだったが、庸は気持ちよくてすぐにイッてしまった。そして今味わうバイズリも、やっぱり気持ちよくて射精しそうになっていた。ルミナは庸がイキそうなのを知っているのか知らないのか、ばるんばるんとダイナミックに爆乳を弾ませて同級生の肉棒をしごいてくる。

（聖、それやばいって……）

射精が近づく感覚にじつとしていられなくて、庸は右に左に腰を振った。理奈のオッパイをしゃぶりながら、下半身を右に倒し、次に左に倒してバイズリ責めから逃れようとする。

「ローズ、一気にやっちゃって♪ 庸くん、もうイキかけてる♪」

理奈の言葉に、ルミナがパイズリストロークを加速させた。片乳二キロのオッパイが凄い勢いでバウンドをくり返して、ピチピチの乳肌でペニスを摩擦する。豊潤な乳肌がペニスに密着したまま、摩擦度が上がった。庸のペニスが、何度も激しくこすられる。

さらにペニスがとけそうになって、庸は悶えた。だが、庸の口はアイドルのHカップ乳に塞がれている。

「ほら、吸って、吸って、ちゅばちゅばして♪」

爆乳アイドルがおねだりする。

（オッパイ吸うと、余計に感じちゃう……!）

わかっていながら、庸は理奈のオッパイを吸った。ちゅば、ちゅばと音を立てて、乳房を吸引しては口を離し、吸引しては口を離すをくり返す。そのたびに、理奈が甘い声を放って、ピクピク身体をふるわせる。

（理奈ちゃん、感じてる……!）

攻めの興奮に、ルミナのパイズリの快感が爆発的に重なった。ルミナが突然、左右互い違いにバストを揺さぶりはじめたのだ。揺さぶりパイズリである。両乳を同時に弾ませるパイズリよりも、こすれ具合が段違いに激しい。一気に摩擦度合いが急上昇した。両乳を同時に弾まされるだけでもイキそうになっていたのに、左右互い違いにバストを揺さぶられて、庸は呻き声を上げた。抑えられない勢いで、絶頂がペニスを駆け上がった。我慢しようとしたが、無理だった。右に左に腰をひねりだしたところで、庸は精液を噴射していた。

（聖い……!）

アイドルのオッパイに顔を塞がれたまま、派手に腰をバウンドさせる。自分でもびっくりするくらい腰が跳ねて、精液が噴射していく。そしてその精液は、中学時代からの同級生の爆乳に飛び散っていく。

「ローズ、もっと……!」

理奈の言葉に、ルミナはさらに乳房を交互に揺さぶった。左右の淫乳が互い違いに庸のペニスを摩擦し、精液を搾り出す。次の射精を我慢しようとしたが、無理だった。庸はまた腰をバウンドさせて、同級生の爆乳に精液を噴射

した。

「す、凄い……」

射精に感嘆しながら、つづけてルミナがバストを揺さぶる。

（聖、だめえ、イクう……!!）

ルミナの揺さぶりパイズリに、庸はまた呻きながら射精した。三連続の射精だった。一度射精すれば次の射精までチャージの時間が必要なのに、同級生のパイズリで立て続けに射精してしまったのだ。

恍惚の目で、庸は囚われの部屋の天井を見た。

（もつとパイズリでいじめられたい……。もつとパイズリで射精したい……）

ルミナの胸の谷間に濁液を飛び散らせながら、同時に庸は、叶わぬもう一つの願いを——反実仮想を——思い浮かべた。

（ここが、デモニアの基地だったら……）

やわらかな飴色の照明が、上品なアイボリーの壁を照らしだしていた。二十畳ほどの広大な部屋には、二人で寝転がっても余裕のあるキングサイズのベッド――。ベッドのそばには、四方をガラスで囲まれたジャグジーがある。ベッドからまっすぐ壁に視線を向けると、壁に埋め込まれた六十五インチの液晶テレビにぶつかる。

ベッドに腰掛けている部屋の主は、誇り高くツンと尖った鼻尖の持ち主だった。細く際立った美しい鼻筋の両側には、青い双眸。セミロングの金髪が、ヨーロッパブランドの白いガウンに掛かっている。ガウンの前は開いていて、九十八センチHカップの胸の谷間が覗いている。

クラリッサ・ローズウェル――グロバリア国際学院に通う、富豪のお嬢様である。同時に、デモニア第〇八一基地の臨時戦闘員でもあった。崩壊する基地から逃げ出して、ようやく部屋に戻ってジャグジーで身体を温めたところだった。

気分は晴れなかった。

デモニアの基地は自分たち地球人のもではなく、異星人のものだから、潰れても痛みはない？

そんなことはなかった。

基地崩壊には、自分にも責任がある。本当なら、今頃、この部屋に庸がいるはずだったのだ。そして朝には、庸は基地で暗黒騎士昇格の儀式を受けていたはずなのだ。

自分が守りきれなかったから――いっしょにリムジンに乗りながら、庸を守ってあげられなかったから――庸はポールシフトされ、セイント・エージェントの味方になってしまった。そして、それが敵――エージェントを力づけた。庸にチャージされたエージェントの力は凄かった。自分もエージェントと対戦したからわかっている。自分なりに考えてエージェントを迎撃したつもりだったが、相手の能力に上回られた。エージェントたちは、スーパーマン化

していた。

自分たちがちゃんと庸を守っていれば――。

どうしてもifを、たればを、考えてしまう。

基地の者はどうなっただろうか。アイゼナハのことが気にかかる。アイゼナハは、自分たちに真っ先に避難命令を出してくれたのだ。

《クラリツサ、すぐに全奉仕局員を連れて基地から退避しなさい！ エージェントに破壊される前に逃げなさい！》

驚愕に胸を突き刺される思いを味わった。自分たちに退避命令を出すなんて、思ってもみなかったのだ。

アイゼナハの命令は英断だった。自分たちが基地から退避した後にエージェントたちが雪崩れ込んできて、基地は崩壊したのだ。退避命令がなければ、崩壊に巻き込まれていたに違いない。

クラリツサにとって、デモニア星人は仲間でもなければ尊敬する相手でもなかった。仕方なく自分が仕えている上司。仕方なく従っている相手。人間社会ではトツブクラスのクラリツサに対してマウントする、気に入らない相手――。でも、そう思っていた相手が、自分たちを真っ先に逃がしてくれたのだ。

アイゼナハは無事でいるのだろうか？ 基地の崩壊には巻き込まれずに済んだのだろうか？

心配になる。

庸は？ 庸はどうしているのだろうか。美人のエージェントたちに取り囲まれて、ウハウハな生活を送っている？ まさか。庸はいいや協力させられているに違いない。エージェントたちをパワーアップしたのも、きつと意に反してのことに違いない。庸が進んで自分たちに不利なことをするはずがないのだ。

自分が助けてあげられれば、とクラリツサは思った。現実のこの社会のことならば何とかしてあげられるのだが、デモニアとエージェントのこととなると無力を味わうことしかない。

ふと、庸にメールしようかと思った。メールして励ます？

だが、すぐに重要なことに気づいた。庸の持ち物はエージェントたちが管理しているはずなのだ。自分がメールすれば、きつとエージェントたちに見られる。自分がデモニアの臨時戦闘員であることもバレてしまうに違いない。

突然ノックが鳴った。すでに時計は二時を回っている。

「パパだ。入るぞ」

言って、ドアが開いた。面長の顔に太い眉、思慮深げな視線に実力者の顔だち――。髭はない。クラリツサの父だった。

リムジンの運転手から、父親に説明が行っているはずだった。変な怪奇事件に巻き込まれて、リムジンが真つ二つになった。警察には届けない。そう説明しているはずだ。

父は、きりつとクラリツサを見た。いつものように優しさがあるが、瞳の奥に厳しさがある。

「事情は運転手から聞いた。おまえはパパにちゃんと説明すべきだと思う。違うか？」

2

乳輪寺の広大な敷地は、林の真ん中が陥没していた。深夜の暗闇の中で、闇より深い陥没の闇が林の中で地獄の底のように口を開いている。かつてデモニアの第〇八一基地があった場所である。跡地にはまるで人の気配がない。

基地は死んでしまったのだろうか？ デモニア星人も死んでしまったのだろうか？

地表より百メートル以上地下、デモニア星人だけが搭乗を許されるエレベーターで下った先に、とてつもない高さの空間が広がっていた。エレベーターを降りて見えるのは、幅の広い四車線の直線路。その先にレクリエーションルームが、さらにその向こうに居住エリアが見える。

直線路には、四人の女たちが集まっていた。

一人目は、眼鏡の女だった。きりつと締まった表情はいつもより険しい。黒いセミロングの髪には泥がついている。豊かな白い乳房を覆う逆V字のマイクロトップにも、

ハイレグのボトムにも、土がついている。暗黒騎士のアイゼナハである。

二人目は、燃えるような赤いショートヘアから一對の角を覗かせた鬼娘だった。野性的な双眸は疲れ切っている。凹凸の激しい褐色のグラマラスボディを包み込んだ、胸元に龍を描いた黒い戦闘スーツは、やはり土がついている。暗黒騎士のインフィニアである。

三人目は、派手な水色のミディアムヘアの女だった。美人秘書のように艶つぼさと清楚さの入り交じった色っぽい美人顔をしている。肩とこぼれそうなほど豊かなバスト、そして太腿から足首までを、赤い鎧で覆っている。暗黒騎士のゼルシアである。

四人目は、紫色のロングヘアの女だった。きりつと厳しい顔だちである。肩を大きく露出させて、首から腰まで斜めにまっすぐ伸びた青いビチビチのボディースーツを着て、膝上から足まで青いハイソックスを穿いて、青いハイヒールを履いている。いささか爆乳のスケバンという雰囲気である。暗黒騎士のゾシアだった。

アイゼナハとインフィニアは崩壊する基地から逃れて、なんとか深部地下の居住エリアに辿り着いたところだった。デモニア星人の戦闘員たちは、医療センターで看護婦のルクレツィアの診察と手当てを受けているはずだ。

本来なら、ゾシアとゼルシアが二人を助けに行くはずだったのだが、セイント・エージェントの動きが早すぎて間に合わなかったのだ。基地が崩壊したのは、まさにゾシアがエレベーターに乗り込もうとした時だった。

「わたしの責任だわ……わたしが食い止められていれば……」

とうつぶわいたまま、アイゼナハは悔しそうに言葉を絞り出した。無念さがこもっている。庸は、アイゼナハがかわいがっていた乳揉み係であり、なおかつ作戦隊長だった。

「おまえのせいではない。我々二人が遅かったのだ。おまえに相談を受けた時に、部下を率いようとせずにおまえといっしょに基地へ上がっていればよかったのだ」

と紫色のロングヘアのゾシアが慰める。水色のミディア

ムヘアのゼルシアは黙っていたが、ゾシアと同じ気持ちなのだろう。

インフィニアも黙っていた。気持ちはアイゼナハと同じだった。無念でならない。だが——パワーアップした三人のエージェントを前に、食い止めるのは難しかったのだ。

これから、ますます戦況は厳しくなるだろう。三人のエージェントが庸によってチャージされ、パワーアップしたということは、今後自分たちデモニア人が圧倒されるということだ。他の基地も潰される可能性が高い。

「とにかく全暗黒騎士の力を結集してβを取り戻すしかない。今は休め」

とゾシアが慰安の言葉をかけた。

「休んだらおしまいよ！ きつとエージェントは——」

アイゼナハが言い返そうとした時だった。アイゼナハとインフィニアの後方で、ふいにエレベーターが開く音が聞こえた。ゾシアとゼルシアが視線をやり、顔色を変えた。気配に気づいて、インフィニアも振り返って戦いた。一番遅れてアイゼナハが振り返り、言葉を失った。

エレベーターから降り立ったのは、足元まで垂れる裾の長い真紅のパーティードレスを羽織った美女だった。胸元をボタン一つで留めたドレスが、4Lサイズのスイカを双つ詰め込んだような巨大なバストを包み込んでいる。エージェントAに匹敵するほどの大きさである。胸も凄かったが、背中はずっと凄かった。鍵爪のある翼が背中から伸びていたのだ。



暗黒騎士のベルゼリア——出張に出掛けていた第〇八一基地の戦闘局長だった。デモニア基地のデモニア星人の中では最強の存在、基地の実質的なナンバーワンである。その彼女が、帰って来たのだ。

「ベルゼリア様……」

とゾシアがつぶやいた。アイゼナハ相手には「おまえ」と呼んでいたが、ベルゼリアには「様」づけであった。相手が偉い証拠である。

「わたしがいないうちに大変なことが起きたようだね」

とベルゼリアは低い声で言った。ずいぶんと落ち着いた口調だったが、威圧感がある。かつて基地内で暴れまわっていた巨漢の暗黒騎士バランカも、ベルゼリアには敵わなかった。ベルゼリアの怒りを買って、一撃で壁にめり込まれている。

「申し訳ございません……いかなる処置も——」

とアイゼナハが低頭して謝罪を言い出した途端、ベルゼリアは部下の言葉を遮った。

「状況を説明せよ。叱責及び懲罰処分は一切行わない。その代わり、何一つ隠すことなく、すべてわたしに話せ」

都内の八階建てのビルの最上階――。

第二聖母教会のリビングルームで、エージェントAはローズスコラとピンクボリスがシャワーから戻ってくるのを待っているところだった。すでに、ホワイトグラスとブルーゴージャスはシャワーを浴びて、再び戦闘コスチューム姿になっている。

(すばらしいわ……)

エージェントAは、庸の凄さに感嘆していた。

乳揉み係を手に入れば逆転できる。そう確信していたが、こうも簡単に、鮮やかに勝利を収められるとは予想していなかった。元戦闘員βこと濁川庸に胸を揉まれた三人のエージェントは、暗黒騎士アイゼナハとインフィニアを圧倒して基地を崩壊させたのである。

大殊勲、大金星だった。最大の功労者は庸――デモニアの元乳揉み係だった。乳揉み係は、デモニア救星団側についている時は、乳揉みによってデモニア側の暗黒騎士をパワーアップさせる。だが、正義の味方側につけば、今度はエージェントをパワーアップさせる。庸が二人のエージェントの胸しか揉んでいない段階でも、エージェントたちは第〇八一基地陥落まで肉迫した。庸が三人のエージェントの胸を揉むと、もはや第〇八一基地側に防戦の力は残っていないかった。基地は敢えなく陥落したのだ。ゲリラ戦的な襲撃をくり返して徹々たる成果を手に戻還するのが日課だった過去が、嘘に思えるほどである。

自分たちが濁川庸を抱える限り、自分たちの勝利は揺るがない。庸の心はまだデモニアにあるが、女体の魅力に抗いつづけられる男など、この世にはいない。地球人にしてモデモニア星人にしても、同じことだ。

今は攻勢をかけて、新たに女のエージェントをスカウトすべき時だ。女のエージェントが三人から四人になれば、自分たちの支部は最強になる。五人になれば伝説となる

う。

だが、その前に——庸を奪われないことだ。基地を破壊したといっても、連中はまだ地下深部で生きつづけているはずだ。必ず庸を取り戻しに来る。奪い返されれば、また劣勢の毎日が始まってしまう。

庸を決して奪われないこと。奪ってもポールシフトできないように固定化すること。それが今の自分たちにとって一番必要なことだ。

二人のエージェントは勇気を奮い起こせるだろうか？とエージェントAは考えた。ローズスコラは、恐らくうんと答えるだろう。問題はブルーゴージャスである。胸をさわらせることだけでも、ずいぶんと抵抗していたのだ。今回も抵抗する可能性は高い。

だが、承諾してもらう以外ない。

そう思っ、エージェントAはブルーゴージャスに視線を向けた。

2

真王寺詩鶴はすでにシャワーを終えて、リビングルームに戻っていた。土埃も土の匂いも消して、気分はすっきりだった。大勝利の後だけに、すっきり感はおさざである。そして高揚感も、まだつづいている。

部屋の中は、詩鶴とホワイトグラス、そしてエージェントAの三人だけだった。ローズスコラとピンクボリスは戻っていないようだ。

濁川庸のところ？

たぶん。

自分も行くべきだったのだろうか、と詩鶴は思った。自分たちが基地を破壊できたのは、間違いなく濁川のおかげなのだ。本来なら、自分もお礼を言いに行くべきだ。

けれども、濁川に対しては気恥ずかしさがある。オッパイを見られているし、何度もイカされている。顔を合わせるのは……。

詩鶴はリビングに掛けられた壁時計を見た。ローズスコ

ラとピンクボリスは、依然として帰ってくる気配がない。
きつとお礼をしているのだと詩鶴は思った。それも、
エッチなお礼を——。またパイズリをしているのかもしれない。

自分は……行かなくてよかったのかもしれない。

(でも、やっぱりお礼ぐらいは言っておくべき……)

あとで、お礼だけは言いに行こうと詩鶴は決めた。自分がエージェントとして凄い活躍ができたのも、基地を潰せたのも、すべて庸のおかげなのだ。お礼を言われても庸は喜ばないだろうが、礼は言うべきだ。

そう思ったが、やはり、気恥ずかしさは拭えなかった。礼を言いに行つて、胸をさわらせろと言われたらどうしよう？

突っぱねる？

でも、パワーアップの効果は一晩しかもたないと聞いている。夜が明けるたびに濁川に胸を揉んでもらわなければならないのだ。また日が昇つて、朝が来て、そして再びここに来てデモニア救星団と戦おうとなった時に、濁川に胸を揉んでもらわなければならない。

濁川に胸を揉みしだかれた時の快感、乳首を責められて昇りつめた時の快感、吸われて絶頂に達した時の快感が蘇つて、詩鶴は一人赤面した。

あんな底辺の修道生に……と思うのだが、同時に太腿の奥がじゅんじゅんと疼いてしまう。

揉まれたくない？

たぶん……。

いえ、きつとそう。

いや——。

否定した後、すぐ快感が上書きしようとする。あんな快感は初めてだったのだ。自分が自分でなくなる感覚。自分が快感に乗っ取られていく感覚。拒絶と陶酔の入り交じった感覚——。

詩鶴は首を横に振った。美しい黒髪のロングヘアがばさばさと揺れる。

エッチなことはどうでもよい。とにかく、濁川に胸を揉

まれないと自分はパワーアップできないのだ。今回の作戦で、自分は濁川の力を実感してしまった。胸を揉まれると、本当に別人みたいに戦闘力が上がるのだ。相手が学校では最底辺の修道生であろうと、どんなに嫌悪感の走る相手であろうと、濁川に揉んでもらうしかない。

そう決めて、詩鶴はふと不安になった。

濁川は、自分の胸をさわるだろうか？

自分は思い切り濁川を罵倒してしまったのだ。おまけに、ボールシフトで自分たちの味方になったものの、濁川は表立って自分たちに協力することをいまだ拒んでいる。濁川自身が自分たちエージェントの胸を揉んでパワーアップさせ、その結果デモニア救星団を苦しめることをいやがっているのだ。心理的には抵抗している。どこがいいのだから詩鶴にはわからないが、濁川はデモニア救星団という悪の組織に心酔しているのだ。

(次も胸、さわってもらえるのかしら……)

さわってもらえなければ、暗黒騎士と互角に戦えない。

修道生相手に胸をさわられるのは恥ずかしいけれど、今日みたいに戦いたい。

濁川を誘惑する？

無理。

自分は処女なのだ。同い年の男と手をつないだことだってないのに、誘惑なんかできるわけがない。でも、胸をさわってもらわなければ……。

3

シャワーを浴びて、白井京一郎はようやくさっぱりしたところだった。勝利の余韻はまだ残っている。だが、浮かれている気分はない。

濁川庸の力は強烈だった。庸に胸を揉まれた三人のエージェントたちはまるで別人のような動きを見せ、デモニアの第〇八一基地を崩壊に追いやったのだ。少し前まではやられる一方でメンバーを失うかもしれないと怯えるほど追い込まれていた自分たちが、濁川庸を手に入れた途端、逆

転の大勝利をつかんだのである。

庸様様であった。

学校では自分より下、最下層の修道生だが、今、エージェントの間では庸こそが鍵、庸こそがすべてだった。庸の協力がなければ、自分たちはデモニア救星団を倒すことができないのだ。

三人の胸をさわられて羨ましい？

当たり前だ。庸は、自分が狙っていた聖ルミナの爆乳も、そして同じクラスメイトでグラビアアイドルの秋元理奈の爆乳も、そして上級生の真王寺詩鶴の巨乳もさわったのだ。

だが、だからといって庸に羨望をぶつける気にはなれない。荒々しい言葉で庸に迫って庸がへそを曲げたら、一巻の終わりなのだ。

これからは庸の機嫌を損ねないようにしなければならぬ。

（だが、機嫌を損ねる、損ねない以前の問題がある）

と京一郎は思った。

なぜデモニア救星団が庸を厚遇していたか、今になってはつきりとわかる。エージェントがこれだけパワーアップするということは、デモニアの暗黒騎士だってそうだったはずなのだ。

（基地を破壊された以上、連中は本気で庸を取り戻しに来る）

京一郎はそう確信した。

明日？

いや。

もしかすると、もう取り返しに来ているかもしれない。エージェントAは、二度とポールシフトさせない方法があると言っていたが、だからといって警戒を解いてよいわけではない。

京一郎は、夜闇の映る窓に歩み寄った。外を窺っている。もちろん、人影はない。京一郎はカーテンを閉めた。

「ここは大丈夫なんですか？」

と京一郎は、エージェントAに質問の眼差しを向けた。

「平気よ。パスワードを入力しない限り、この階には上がってこれない」

「暗黒騎士なら屋上から来られるでしょう。基地を破壊された以上、連中は人数を掛けて濁川を取り戻しに来ますよ」

と緊迫した声で京一郎はエージェントAに迫った。

扉が開いて、ローズスコラとピンクボリスが戻ってきた。二人とも、戦闘コスチュームのままである。だが、髪を乾かした雾囲気がある。ようやく長いシャワーが終わったらしい。

京一郎は深刻な調子でつぶけた。

「今日でなくても明日、明日でなくても明後日。毎日、連中は濁川を奪還に来ますよ。どうやって濁川を守るつもりです？ あいつを取られたら、おれたちは終わりだ。またポールシフトされてデモニアの味方にさせられたらどうしようもない。濁川が暗黒騎士を三人、四人とチャージしたら、みんな捕まりますよ」

「ええ。だから、手を打つわ。濁川を固定化するの」

エージェントAの答えに、

「固定化？」

と京一郎は聞き返した。

「ええ。ポールシフトしても敵の味方にならないようにすることよ」

「そんな方法があるんですか？」

「あるわ。ただそのためには、ローズとブルーに相当かんばつてもらわなきゃいけないの」

引っかかる言い方だった。

（相当がんばつてもらう……？）

京一郎は、ローズスコラとブルーゴージャスに——同じグロバリア国際学園の聖ルミナと真王寺詩鶴に顔を向けた。二人とも、少し不安な様子である。グラビアアイドルの秋元理奈も、不安と不思議の入り交じった表情を浮かべている。

（相当がんばるって……何だ？）

と京一郎は自問した。

（まさか、またエロい——）

「もしかして、エッチするの？」

と先に理奈が尋ねた。

（何っ!？）

理奈も同じことを考えていたことに、京一郎は驚いた。ルミナと詩鶴がぎよっとして理奈に視線を向けた。それから、二人ともエーエージェントAに顔を向けた。

（まさか……まじ!？）

ありえない。

ポールシフトするためにはパイズリが必要だと言われた時もありえないと思ったが、またエッチなんて、ありえない。

（おれたち、正義の味方だぞ？ 性戯の味方じゃないぞ!？）

違うって言ってくれ。

エッチなことじゃないのよ。ただ、とてもがんばらなきゃいけないの。

そう言ってくれ。

京一郎が動転しながら願う中、エーエージェントAは答えた。

「勇気が必要よ。覚悟も」

いやな予感がさらに強まった。

（ゆ、勇気って何だよ、勇気って。覚悟って、何!？）

さらに京一郎の動転が増す中、

「するんですか……？」

ルミナがおどおどと尋ねた。するとは、セックスのことである。

（まさか、濁川が二人とセックスするっていうのか!？ 真王寺先輩はともかく、聖とセックスするなんて、けしからん！ おれが最初の相手になるはずなんだぞ！ 聖とセックスなんて、許されてたまるか!）

京一郎はエーエージェントAの様子を窺った。エーエージェントAはすぐには答えない。間が微妙にいやらしい。ややあつて、エーエージェントAは口を開いた。

「二人とも、覚悟を決めて。二人の初めてが必要なの。二

人の初めてが重なれば、永遠に濁川を正義の味方にできる。一人は濁川と初めてセックスをする。もう一人は濁川に初めてパイズリをする。そして射精へ導く。パイズリとセックスの初めてを重ねれば、濁川庸は二度とポールシフトしなくなる。永遠にエージェントの味方よ」

めてのセックスをな。つまり、セイント・エージェントはエロエロエージェントになるというわけだ。正義の味方だと称しながら、やることが性戯とは、基地破壊などという愚かな真似をするだけのことはある」

ベルゼリアの皮肉に、ゾシアもゼルシアもアイゼナハもインフィニアも黙っていた。呆れたわけではない。ベルゼリアがエージェントたちに怒りを募らせていることは全員知っていて、黙っていたのだ。

ベルゼリアがつづけた。

「連中は必ずβを永遠に正義の味方にしようとする。だが、その前に我らを取り戻す。時間との勝負になるが、焦ることはない。時間がないと焦れば、その時点で我らは負ける。焦らなければ、我らは勝つ。わたしが戻ってきたからには、おまえたちに敗北を味わわせぬ」

「お言葉ですが、βは敵の手にあります。急がなければ――」

ゼルシアの指摘に、

「おまえたちの不安も焦りももつともだ。だが、それで今どこへ行く？ 聖母教会という建物か？ ガラスが割れて警察とかいう連中が来ているかもしれぬ時に、のこのこ出掛けていくのか？ そこに連中が留まっていると思うか？ 否だ。では、どこへ行った？ わからぬまま焦って出掛けるのか？」

ベルゼリアが次々と突っ込みを入れる。正論を前にゼルシアは黙った。他の三人も口を利かない。

「ゼルシアはよい指摘をした。焦っても何もならぬことを、より明るみにするきっかけをゼルシアは与えてくれた。ゼルシアよ、よい指摘をしたぞ」

とベルゼリアがゼルシアを褒める。暗黒騎士たちの前でゼルシア一人に恥を掻かせないための配慮である。

「疲労と焦りは勝利の敵だ。アイゼナハとインフィニアはシャワーを浴びろ。栄養補給をしろ。少しだけ休め。準備はわたしが進める」

「敵の所在はどうやって――？」

ゾシアの質問に、ベルゼリアは即答した。

「すぐにわかる。誰に連絡すべきかは心得ている。その者から答えは得られよう」

2

上昇するエレベーターに、ベルゼリアは再び乗り込んでいた。なぜか二台のバイクまである。ベルゼリアのそばには、紫色のロングヘアのゾシアと水色のミディウムヘアのゼルシアがいた。二人とも、服を黒いライダージャケットに着替えていた。それでも豊かなバスタの凹凸は隠せない。

ベルゼリアは、タブレットを覗いていた。十二・九インチのモデルである。見ているのは、東京の地図だった。

「聖母教会はどこだ？」

ベルゼリアのつぶやきにゼルシアが覗き込み、指先で地図をスクロールさせた。

「こちらでございます。奇襲をなさるので？」

「警察とやらが集まっている場所にか？ やつらはもうおらぬ。連中がまともなら、すぐ近くに逃げ場所をつくっているはずだ。どこにあるか……」

とベルゼリアが地図を拡大して睨む。

「遠くに逃げたのでは？」

ゾシアの指摘に、

「遠くでは、移動中に攻撃される惧れがある。一ブロック以内にあるはずだ。どこへ逃げ込んだ……？」

エレベーターが減速し、停止した。扉が開き、三人は外に出た。

上には満天の星空が、そして水平方向と下方向には人を呑み込むような暗がり広がっていた。目が慣れてくると、暗がりの中から巨大な窪地が浮き上がってきた。かつて第〇八一基地があった場所である。ゾシアとゼルシアの表情が、思わず驚愕に歪んだ。アイゼナハとインフィニアから基地が壊滅したという報告を受けていたが、まだ実際に見てはいなかったのである。

想像以上の破壊っぷりだった。基地始まって以来の大敗

である。壊滅と言っていい。すぐに同じ場所に基地を再建することは不可能だろう。

「よく目に焼きつけておくがよい。敗北の記憶は勝利への布石だ。敗北の記憶があれば、油断せぬ」

ベルゼリアの言葉に、

「我々はβを取り戻せるのでしょうか？」

とゼルシアが尋ねた。

「おまえたちがいるから取り戻せる。ただ、あまりゆつくりはできぬぞ」

とベルゼリアはゼルシアに、そしてゾシアに顔を向けて即答した。指揮官が迷いもなく言い切ってくれど、部下は安心するものである。質問したゼルシアも、少しだけほっとした様子だ。ベルゼリアの強い肯定の答えを待っていたのだろう。

「おまえたち、スマートフォンは持っているな？」

とベルゼリアは確認した。二人がうなずく。ベルゼリアはゾシアに顔を向けた。

「おまえはバイクで聖母教会を見てこい。付近を通るだけでよい。決して怪しまれぬようにせよ。視察後は付近に留まってわたしからの連絡を待て。わたしの読みでは、連中の逃避場所が聖母教会の近くにある。いざという時に、おまえが聖母教会のそばにいたことが役に立つはずだ」

「はっ！」

明快な指示を受けて、ゾシアは潔い返事を響かせてバイクに跨がった。バイクはすぐに気持ちのいい重低音の咆哮を上げて、夜の林に飛び出していった。

残ったのは、ベルゼリアとゼルシアである。ベルゼリアはゼルシアに顔を向けた。

「奉仕局員の名簿は、タブレットの中か？」

指揮官の問いに、ゼルシアはうなずき、尋ねた。

「誰をお探しで？」

く部屋の照明を消してベッドに潜り込んだところだった。中庭に面した大きな窓の向こうには、温水プールが見える。誰もいないのが、不思議な感じだ。セイント・エージェントたちに庸を奪われていなければ、この部屋に、そしてプールに、庸がいたはずなのだ。

父親には全部は話さなかった。デモニア救星団の話をして、理解はしてもらえまい。娘は嘘をついている、とんでもない嘘をでっちあげて、本当のことを話すまいとしている——そう捉えられるだけだ。

父親には、とにかくいきなりリムジンが止まって、真つ二つに切れた、まるで悪魔の仕業みたいだった、自分でも信じられないと話した。父は、何者かがクラリツサを誘拐しようとしたのではないかと疑っていたようだが、誘拐はなかった、きつと怪奇現象だったのだと思うと話すと、結局引き下がった。腑に落ちないところはあったのだろうが、娘が怪奇現象と言う以外、どうしようもないと思ったのだろう。ただし、今夜のことは誰にも口外しないようにと念を押された。警察に届けるの？ と父親に尋ねると、悪魔の仕業なのにどうやって警察に捜査してもらうんだ？ と聞き返された。クラリツサは安心した。今日のことを大事にはしたくなかったのだ。

とにかく早く寝てしまおうとクラリツサは目を閉じた。しばらくリムジンは使えないが、きつと数カ月後には使えるようになるだろう。それまでは我慢——。

スマートフォン呼び出し音が、寝入りばなを邪魔していた。

(こんな時に掛けてくるなんて、非常識よ)

スマートフォンを手にして、発信者の名前にクラリツサはぎょっとした。

デモニア救星団第〇八一基地——。

(庸!?)

一瞬、庸からかと思った。思ってたすぐに、そんなはずがないことに気づいた。庸はエージェントたちに捕らえられているのだ。

脱出して基地に戻った？

それなら、自分のケータイで電話してくるはずだ。

(きつと何かあったんだ)

クラリッサは電話に出た。

「29号ですね」

第一声は、しっとりとした、ラジオの女性アナウンサーのような声だった。聞き覚えのない声だ。29号は、デモニアでのクラリッサのコードネームである。

「わたしは暗黒騎士のゼルシア。戦闘局長ベルゼリア様のご依頼で掛けています。窓際へ向かいなさい」

突然の命令だった。

「庸に何かあったの？」

クラリッサは聞き返した。

「命令に従いなさい」

「教えないのなら従わないわ。こんな夜中に失礼でしょ」

「ベルゼリア様がおまえに興味を持っています。βのことで確かめたいことがあるそうです。βを助けたいのならば、窓際へ行きなさい」

(助けたいのならば?)

その言葉が引っかかった。窓際と庸との間に関係があるようには思えないが、庸は助けたい。庸が誘拐される時、自分はそこにいたのだ。

(でも、なぜベルゼリアが?)

とクラリッサは疑問に思った。ベルゼリアとは二度ほど、廊下ですれ違ったことがある。有翼のデモニア星人だった。並の暗黒騎士よりも貫禄があった。自分には威張り散らしている戦闘員も、ベルゼリアが通りかかると途端に平身低頭していた。デモニアでは偉い種族なのだろうだ。

クラリッサはベッドを下りて、プールの方へ向かった。窓際に立つ。

「立ったわよ」

スマートフォンに向かって言うと、突然、窓の向こうに巨大な黒い鳥が舞い降りた。クラリッサは思わず声を上げるところだった。黒い怪鳥は一度翼を広げ、それから翼を畳んで自分を見た。

クラリッサは納得した。おまえ次第だと言われた時には、なぜ自分次第？　と思っただが、クラリッサの父親は富豪で実業家である。この町に来る時にも、町の幹部連中とは親交を結んでいる。もちろん、不動産業者ともだ。どこに誰がどんなビルを所有していて……という情報は、執事に聞けばわかるはずだ。

「最低、一時間以内に欲しい。できれば十分で手に入れたい。エージェントはβを永遠にポールシフトできないように、一時間以内に儀式を行うはずだ。その前に、情報を手に入れて、βを奪還したい」

指揮官直々の言葉に、クラリッサはうなずいた。自分だって庸を奪い返したい。それに、ベルゼリアの説明はしっかりと聞いて、指示も明確だった。電話で済ませるのではなく、わざわざ自分のところにまで来てくれたことにも好感を持った。協力を拒むなんて選択肢は、頭の隅っこにもない。

ベルゼリアがつづけた。

「成功すれば、おまえの昇進はこのわたしが約束する。成功次第、直ちに戦闘員に引き上げる。成功せずとも、今回の協力は評価に値する。臨時戦闘員として優先的に使うように、わたしが部下に命令しよう」

指揮官自らの昇進の約束に、心が躍った。練習では一番の成績を上げながらずっと臨時戦闘員に引き上げられなかった悔しさが、蘇った。庸は自分を取り立ててくれたが、デモニア人は自分を認めてくれなかった。だが、今、デモニアの人間が初めて自分を引き立てると言ってくれたのだ。心は躍った。でも、それ以上に、庸を救い出せること、救出の手伝いができることに、心が躍った。庸を誘拐させたのは自分のせい——心の奥ではそう自分を責めていたのだ。

クラリッサはすぐにコードレスフォンを手にとった。

コールする先は——。

一人になった庸は、Tシャツとデニムのパンツ姿でソファに座って、ずっとブルを見ている。第二教会に移動してから、ずっとこの八階に閉じ込められている。外は見えても外に出ることはできない。

（みんな、大丈夫かな）

と庸は思った。理奈は、惜しいところで失敗しちゃったと話していたが、そのわりにはなんだか明るかった。本気で悔しがっている感じがしなかった。

（まさか、おれに隠してる……？ 本当は基地は破壊されている？）

途端に不安になる。

アイゼナハとインフィニアが自分を奪い返しに来て、もう一時間以上が経過している。時計はもう二時を回っている。いい加減に眠らなければならない時間だが、眠たくないし、眠りたくない。

（基地が破壊されたから、アイゼナハもインフィニアも来ないのかな）

庸は思った。

協定違反を気にしている？

まさか。

アイゼナハとインフィニアが聖母教会に姿を現した時、時計の針は十二時を回っていた。デモニア救星団とセイント・エージェントとの協定では、戦闘は深夜十二時までとすること、戦闘は基地内に限定することが定められている。だが、アイゼナハとインフィニアはその両方を破った。

正直、うれしかった。そうまでしても、自分を助けに来てくれたことがうれしかった。でも、救出計画は失敗してしまった。その上、自分は聖ルミナと真王寺詩鶴をチャージしてしまった。デモニア救星団にどんな影響があったのか、気になる。

（本当に扉で撥ね返されてたのらないけど……）

今は自分の救出計画を練っている頃だろうか、と庸は思った。それとも、アイゼナハもインフィニアも眠りに就いている？

まさか。

別れる時のアイゼナハの目は、本当に悔しそうだった。絶対助けたかった。

そうアイゼナハの目は言っていた。

きっとアイゼナハはまた来る。インフィニアといっしょに来る。もしかすると、他の暗黒騎士といっしょに来るつもりなのかもしれない。

（ここだってわかってるのかな）

庸はふと思った。

アイゼナハは聖母教会のことを知っていたようだが、第二教会を知っているのかどうかはわからない。

（ケータイ……）

連絡しようとして、ケータイを取り上げられていることに気づいた。正義の味方になったといっても、扱いは幽閉である。体のいい囚人扱いだ。全然正義の味方になった感じがしない。ここでは自分は、ただの囚人なのだ。

（どうやってみんなに知らせよう）

庸は考えた。

（誰かがここまで来てくれたらいいんだけど……）

非現実的なことを庸は願った。だが、八階の窓までやってくるような者がいるはずがない。

それでも庸はブルの脇を抜けて、大きな窓のカーテンを開いた。

（もしかして開く？）

窓を解錠しようとしたが、開かなかった。きっと部屋のどこかで開閉をコントロールしているのだろう。文字通り、自分は閉じ込められたのだ。

庸は窓から外を見た。

未来の見えない暗闇と夜空が広がっている。夜空は曇り空になっている。視線を下に転じると、遥か下に通りと信号の灯が見える。車は時々走っているが、人の姿はない。

（しばらくここにしよう。そしたら、もしかするとデモニアの連中が見つけてくれるかもしれない）

そう思って、閃いた。中学時代、同級生がカーテンを結び合わせてブラジャーの姿にしていたことを思い出したのだ。

もしかしたら、助けに來た仲間が気づいてくれるかもしれない。庸はカーテンの下を結びはじめた。

2

第二聖母教会のリビングルームは、エージェントAの言葉に凍りついていた。まるで木々が窒素ガスを食らって一瞬で樹氷になったみたいに、全員が凍結していた。

真王寺詩鶴も、凍りついた一人だった。

ポールシフトの方法を告げられた時には、エージェントAは頭がおかしくなったか、元々危ない人だったのかのどちらかだと思い込んだが、濁川庸の力を思い知った今は、さすがにそうは思えなかった。

だが——だからといって、今聞いた提案を受け入れられるわけではない。

（一人がパイズリ……!? 一人がセックス……!?）

詩鶴は性体験はゼロである。彼氏なんかできたことはない。濁川に胸をさわらせると決意するだけでも、どれほど大変だったことか。清水の舞台から飛び下りる気分でも、まだ済まない。

なのに、パイズリ？ セックス？

（セックスは絶対無理！ パイズリも無理！）

これ以上は無理だ。人には譲歩できるラインとできないラインがある。エージェントAの提案は、譲歩できないゾーンに完全に踏み込んでいる。

「いい加減にし——」

叫ぼうとした詩鶴を、ルミナの声が遮った。

「わたし、やります！」

3

聖ルミナも、詩鶴同様凍りついた一人だった。ボールシフトの方法で少し免疫はあったとはいえ、やはり驚愕でぶち抜かれた。

だが、嫌悪感は無かった。

相手は庸くん——中学時代からずっと片思いの相手なのだ。パイズリもしたし、オッパイも見られた。いっぱいもみもみされて吸われた。揉まれたのは昨日が初めてではなかったけど、相手は庸くんなのだ。

(庸くん……セックス……?)

ずっと好きだった相手とセックス……。

拒む理由はなかった。きっかけは引かかるけど——自然に庸くんと相思相愛になって、庸くんに求められてセックスまで迫り着きたかったけれど——でも、相手が庸くんなら、かまわない。

もし、今日オッパイを揉まれて吸われたのが自分の部屋だったら、自分は庸くんとセックスをしていたかもしれない。したいと庸くんに求められたら、絶対に断っていない。相手は大好きな庸くんなのだ。断る理由なんてあるわけがない。

自然な流れでのセックスではない？

それは確かに引かかる。お互い好き同士でセックスするわけではなく、デモニアに庸くんを奪われないようにするためにセックスするのだ。動機は不純である。そこに対してためらいとまどいはある。

本当は自然な流れで庸くんになりたい。お互い好き同士になっただけ。でも、だからといってセックスしなければ、庸くんをデモニアに奪われてしまう。そして自分は庸くんが好きである。庸くんに求められてもかまわないと思っている。庸くんにだったら、処女を捧げてもいい——。

気がついたら、

「わたし、やります！」

ルミナはそう叫んでいた。詩鶴が仰天して自分に顔を向けるのが横目に見えた。

(言っちゃった……)

恥ずかしい。わたしが庸くとセックスしたいって言うみたいで、恥ずかしい……。

言い終えてから、京一郎がいたことに気づいた。

（男の子の前で、セックスするって言っちゃった……もつと恥ずかしい……）

「ローズ、凄いよ」

だが、最初に褒めたのはピンクボリスだった。

「素敵よ。あなたはまことのセイント・エーリエントだわ」

とエーリエントAも手放しで褒める。照れと恥ずかしさで、顔が熱い。なぜ、京一郎の存在に気づかなかったのだろう。なぜ、やりますなんて大声で言ってしまったのだろう。

（言わなきゃよかった……）

後悔の中、場違いな男の大声が響きわたった。

「おれは絶対反対だ！」

京一郎だった。

「高校生だぞ？　高校生がバイズリとかセックスとか、おかしいだろ！　なんで濁川を奪われないために、処女をやらなきゃいけないんだよ！」

何に怒っているのか、ぶちキレたように叫ぶ。

「じゃあ、あんたが庸クンとするわけ？」

理奈が冷たい目を向けた。

「誰があんなヘボ修道士——」

「そんなふうに思ってたんだ」

と理奈が嘲りに近い声をぶつける。

「だって、あいつは修道士だぞ!?　学校の底辺だぞ!?　そんなやつに——」

「そんなやつじゃない！　庸クンがいなかったら、わたしたち誰一人パワーアップしてないんだよ！　デモニアなんか絶対倒せてないんだよ！　庸クンのおかげで倒せたんだよ！　全部庸クンのおかげなんだよ!?　その庸クンをヘボとか言うの!?　あんたの方がヘボじゃん！」

理奈が怒りで爆発した。庸への思いを、感情を、すべて塊にしてぶつけたような感じだった。

ルミナは圧倒された。

（秋元さん、やっぱり庸くんのことを好きなんだ）

そう思うと同時に、理奈の言葉に共感と心強さを覚えた。庸くんのことを悪く言われるのは、自分もうれしくない。理奈は、ルミナの気持ちを見事に代弁してくれたのだ。

「ホワイト。あなたは席を外してくれる？」

とエージェントAが割って入った。

「なんでですか！ おれだってエージェントです！」

と京一郎が怒鳴り返す。

「女の子たちがデリケートな話をするの。それに、決断するのはあなたではないわ。彼女たちよ。あなたがエージェントだというのなら、彼女たちが落ち着いて決断できるように席を外して。彼女たちが考えている間にデモニアの連中が来ないかどうか見張っていて。もしかすると、ベルゼリアが戻ってきて部下を率いてくるかもしれない。ベルゼリアは空を飛べるのよ。不審者がいたら知らせて」

エージェントAに促されて、京一郎は沈黙した。

すぐには動かなかった。その顔は、明らかに不満を示していた。言い返したい衝動と戦っているようだった。だが、結局何も反論せずに、京一郎はリビングを出ていった。

「これで心置きなく話せるわね」

とエージェントAが微笑んだ。ルミナは微笑みを浮かべなかったが、ほっとした気分を味わった。男が一人交じているより、女の子だけの方が話しやすい。

（真王寺さんはどうするのか……）

とルミナは心配になった。詩鶴は、庸のことが好きではない。庸が修道生ということで、あまりいい印象を持っていなかったはずだ。

エージェントAが詩鶴に顔を向けた。

「それで、ブルー。パイプリ、できる？」

いきなり話を振られて、詩鶴は面食らった。

(わたしが濁川にパイズリ……!?)

「無理ですっ!」

咄嗟に大声が出た。

「そう。デモニアに濁川を奪われてもいいってことね」

とエージェントAが冷たく詰め寄る。

「そんなこと言ってますん!」

詩鶴は思わずヒステリックに叫んでしまった。

「固定化をしないというのはそういうことなのよ。これから四人で二十四時間、何年もデモニアから濁川を守れると思う? 濁川は毎朝、特別生のお出迎えをしているみたいね。もしその時にデモニアの連中が特別生のふりをしてやってきて、車に引きずり込んで走り去ったら、どうするの? 車の中でボールシフトされて、それでおしまいになるのよ? それをあなたが防げるの?」

エージェントAの言葉に、詩鶴は黙り込んだ。

自分でも、わかっていた。固定化以外、濁川庸をセイント・エージェント陣営に引き止める方法はないのだ。

「学校の中だって安全ではないわ。どんなにあなたたちがガードしようとしても、必ず隙が生じる。あなたたち女性は男子トイレには入れない。ホワイ特が付き添うことになるけど、さすがに個室の中まではいっしょに入れない。その個室にデモニアの連中がいたら、ボールシフトされてしまうのよ。固定化以外に方法はないのよ?」

詩鶴は黙っていた。

確かに方法はないのだ。だが――。

男のオチンチンだってまともに見たことがないのに、その自分がいきなり、好きでもない男のものを胸に挟む?

挟んで射精させる?

無理。

絶対無理。

好きでもない男のものを挟んで射精させるなんて、絶対無理。

「こんなふうに議論している間にも、デモニアの連中は奪還の計画を立てているはずよ。早く固定化をしてしまわな

いと、間に合わなくなるかもしれないのよ」

「好きでもない人のものを挟むなんて、無理です」

と詩鶴は突っぱねた。

「じゃあ、奪われてもいいの？ 濁川がもし暗黒騎士になつたら、きつと大変なことになるのよ。それでもいいっていうの？」

詩鶴は表情を歪めた。

いいわけがなかった。でも、パイズリは――。

「十秒で決断しなさい。十。九。八――」

エージェントAがカウントダウンを始める。

（無理！ そんなの無理！）

「やっちゃいなよ。さっきは胸をさわらせたじゃん。パイズリもできるって」

と理奈がけしかけた。

「無理よ！ あなたはしょっちゅう男にしているからかわわないでしょうけど、わたしは違うのよ！」

思わず言い返す。

「何、その言い方」

理奈が鋭く睨む。

「三。二。一――」

ついに秒数が尽きた。

「無理です。わたしにはできません……！」

そう苦しみながら宣言した直後、空気が凍りついた。詩鶴は敗北の気分で床を見た。

（ああ、また同じだ……）

そう心が囁いた。

胸を揉ませる、揉ませないと揉めていた時と同じだ。あの時も、自分が拒んで大きなチャンスを失った。そして今回も――。

1

クラリツサ・ローズウエルは、執事からの電話での報告を聞き終えたところだった。今すぐ欲しいというクラリツサのリクエストに、執事は忠実に応えてくれた。

（あとは……）

スマートフォンで電話を掛ける。出たのはゼルシアではなく、驚くべきことに第〇八一基地の戦闘局長、ベルゼリアだった。

「わかったか？」

「物件は一つだけよ。八階。住所は——」

と告げる。

「間違いないのだな？」

「ええ。ただ、ビルには暗証番号がないと入れない。図面は送るわ」

「感謝する。おまえは実によい仕事をした。今回の最大の功労者になるかもしれぬ。その時にはわたしの権限で、おまえを正式に戦闘員として認めよう。おまえは吉報を待っているがよい」

そう告げて電話は切れた。クラリツサはスマートフォンを枕元に置いた。

《わたしの権限で、おまえを正式に戦闘員として認める》

心地よい言葉だった。基地の実質的リーダーから、昇格を認められたのだ——庸を助け出せればという条件つきだが。

（今夜ですべての勝負が決まる）

2

巨大な鳥が夜空を我が物顔に飛んでいた。この街は明るすぎる。真昼の明るさにはほど遠いが、街灯が通りを冷たく浮かび上がらせ、信号の三色で彩りを添える。

巨大な鳥は、八階建てのビルの屋上に舞い降りた。大型の室外機の間を抜け、貯水倉庫の脇を通って、小屋に辿り着く。小屋のドアノブの上には、数字のボタンが並んでいた。

「ここも暗証番号か」

巨大な鳥はそう言って冷たい笑みを見せた。

ベルゼリアだった。

第〇八一基地の跡からクラリツサに指示されたビルまで一気に飛んできたのである。ベルゼリアはビルの端に戻った。少し、風が吹いている。風を受けながら見下ろすと、バイクが見えた。跨がっているのは黒いライダースーツを着た紫色のロングヘアの女――ゾシアである。ベルゼリアの命令を受けて、第二聖母教会の建物の近くに陣取ったのだ。

第二聖母教会は、聖母教会と目と鼻の先だった。幸運なことに、警察の姿はない。きつと、何かあっても人間たちには音も聞こえないようにしておいたのだろう。

ベルゼリアは、ビルから暗闇へ向かって飛び下りた。照明を避け、翼を広げて滑空する。そうして歩道に着地した。着地音にゾシアが顔を向けた。

「ベルゼリア様……」

ベルゼリアは手招きした。すぐにゾシアがロングヘアを波打たせて駆け寄る。

「屋上には――」

「一通り見てきた」

「連中には――」

「まだ気づかれておらぬ。βの姿は確認できなかったが、ここに間違いはない」

とベルゼリアは答えた。

「では――」

「わたしはまた基地に戻る。おまえは残って、動きがないか引き続き監視せよ。一時間以内に攻撃を開始する」

少し前まで、京一郎は荒れまくっていた。部屋に戻って、何度プラスチックのごみ箱を蹴飛ばしたかわからない。哀れなごみ箱とティッシュ箱は見る形もなくぼこぼこになってしまった。それでも、感情は収まらなかった。

大事な会議から追い出されたから？

それもむかついたが、それ以上に、あの汚らしい制服を着た濁川庸が聖ルミナとセックスするというのが許せなかった。ルミナは、グローバル国際学院に入学して、自分がいいと思った相手なのだ。なのに、そのルミナを――。

(くそっ！)

壁を蹴り飛ばした京一郎は、思わず呻き声を上げてベッドに転がった。当たりどころが悪くて、思い切り悶絶する結果になってしまった。

(くそ……)

悔しかった。

勉強では、自分の方が濁川庸より遥かに上なのだ。なのに、なぜ自分が好きな女を奪われなければならないのか。よりによって、学園の最底辺に――卒業したって社会の底辺として生きるしかないようなゴミに――。

答えはわかっていた。自分でも、それははっきりわかっていたのだ。今の自分たちは、濁川庸抜きに成り立っていない。濁川に胸を揉まれたエージェントたちは別人のような動きを見せ、見事にデモニアの基地を破壊した。基地を破壊できたのは、間違いなく濁川のおかげなのだ。自分のおかげではない。女性エージェントが濁川に優しくせざるをえないのは当然なのだ。

(結局おれは脇役かよ……)

自分に力があれば、と京一郎は思った。濁川が持っている力を自分が持っていれば、今頃ルミナは自分のものになっているのに。

京一郎はベッドから起き上がって、窓際に近づいた。窓から外を窺う。その刹那、何かが窓の外を横切ったような気がした。

(何だろう？)

京一郎は窓に顔を近づけた。夜空をしてみる。

別に何も無い。

さらに見下ろしてみた。

いつの間にか、バイクが止まっていた。ちょうど黒いライダースーツを着たロングヘアの女が戻るところだ。知らない顔だったが、やけに気になった。

(なんでこんなところにいるんだ?)

セイント・エージェントとしての根性が、怒りに打ち勝って目覚めた。京一郎はカーテンに隠れて、バイクと女を見た。女は少しも動かない。

変だ。変すぎる。

こんなところに何の用事があるというのか。

人を待っている?

まさか。こんな夜中に、ビルの前で待ち合わせをするような者がいるものか。

ちらりと女が自分の方を見た。

(見られた?)

いや。

一瞥しただけで、また視線を戻した。だが、女は明らかに八階を見ていた。それがやけに引っかかった。

(まさか……デモニア? ここを突き止めたわけじゃ……)

法外なことを京一郎は思い浮かべた。

(そんな馬鹿な。ここがわかる——)

待てよ、と京一郎は思考を練り直した。このビルに逃げ込んだ時、下に人はいなかった。バイクも止まっていなかった。今、バイクが止まって女がずっと何かを待っている——。

それだけでも充分に怪しい。ただ、こんなに早くデモニアの連中が嗅ぎつけられるのか? という疑問が残る。嗅ぎつけるにしても、もう少し時間が掛かるのではないのか。女はデモニアの連中ではないのではないか。だが、ならば、ビルの下にいる女は何だというのか。こんな真夜中に、普通の用事でビルの下にいるはずがない。

秘密の取引? 実は麻薬の取引?

麻薬取引の三大スポットは、パチンコ店やサウナ、コインロッカーである。真夜中に公道にバイクを止めて取引を

するなんて、聞いたことがない。

麻葉の売人なんかじゃない、と京一郎は自分の中で結論づけた。むしろ、こう考えた方が自分の中ではすっきりする。

デモニア救星団の連中は、聖母教会の第二教会の場所を突き止めた。攻撃のため、戦闘員を一人派遣して監視に当たらせている――。

（濁川を奪うつもりか！）

させてたまるか、と血が湧き上がった。濁川への恨みも、エージェントとしての義務を果たすという意志にすべて吹っ飛んだ。

京一郎は会議中のリビングに飛び込んだ。エージェントAと三人の女たちが顔を向ける。京一郎は叫んだ。

「デモニアの戦闘員が外にいるぞ！ 連中はここを突き止めているぞ！」

4

京一郎の言葉に、詩鶴は思わずビクッと身体をふるわせた。自分にはできないと断ってから、ずっと詩鶴は黙っていた。

（また、わたしがみんなの努力を台無しにするの……？）

ローズスコラとピンクボリスとエージェントAは、自分たちで濁川を守る方法を議論していたが、土台無理だった。

「やっぱ朝一番が危ない。偽者のクラリツサがやってきて、車に引きずり込まれたら、追いかけるのがない。バイクなんか持っていないし、ローズが変身して無重力弾とか撃つわけじゃないし」

というピンクボリスの声も聞こえていた。

（でも、無理なものは無理……）

と詩鶴はずっとうつつむきつづけていたのだ。そこへ、京一郎が飛び込んできたのである。

「デモニアの戦闘員が外にいるぞ！ 連中はここを突き止めているぞ！」

会議の場が、一瞬で凍りついた。ローズスコラもピンクボリスも皆、固まっている。

(デモニアが来てる……? もう嗅ぎつけてる?)

詩鶴も衝撃を覚えた。デモニアが襲撃する可能性については言われていたが、目前のもとしては捉えていなかったのだ。

「それは本当ですか!？」

とエージェントAが確かめる。

「ずっとバイクに跨がってる。こんな時間に女が一人でいるわけがない」

と京一郎が返す。

「たまたまじゃないの?」

ピンクボリスの問いに、

「夜中の二時だぞ? 公道で待ち合わせるやつがいると思うか? しかも、おれたちのビルの前だぞ? 普通の人間と考える方がおかしい。絶対デモニアの戦闘員だ」

と京一郎が言い張る。

(もう嗅ぎつけられたんだ……)

愕然とした。

時間がない。もう無理だとか言ってる場合じゃない。早くしないと、濁川を奪われて、またあの惨めな敗北の毎日に戻ってしまう。

(好きな男じゃないからとか、セックスしたことがないからとか、うじうじしている場合じゃない……。わたしがいやがっている間に、濁川を奪われてしまう……。わたしのせいでは……!)

そう思ったら、「無理」の抑制が一瞬で弾け飛んでいた。次の瞬間、詩鶴は自分でも驚くくらい、大きな声で叫んだ。

「わたし、やります……!」

仲間が詩鶴の方を振り向いた。詩鶴はさらに明確に言いなおした。

「バイズリ、します……!」

かつて、デモニア救星団の第〇八一基地があつた場所——。そこからさらに深く地下へと潜ったデモニア星人たちの居住エリア——。

広さ二十平米の会議室のスクリーンには、タブレットに表示された地図と、あるビルの図面が映写されていた。真剣な顔を詰めて座席から説明を聞いているのは、すべて暗黒騎士——アイゼナハ、インフィニア、ゼルシアであつた。

説明しているのは有翼の超乳女、ベルゼリアだつた。

「このたびの作戦は五人で行う。皆、我が第〇八一基地が誇る精鋭だ。鍵となるのは協力だ。単独で助けようとするな。わたしが命じた役割を忠実にこなせ。その先に奪還がある。だが、単独行動の先には失敗しかない。今日失敗すれば、二度とβは手に入らぬと思え」

騎士たちは全員、引き締まった表情で黙って聞いている。相手は自分たちが信頼する司令官なのだ。

ベルゼリアがつづけた。

「皆も知っているように、βは作戦隊長としても非常に優秀だ。乳揉み係としての優秀さは、それを遥かに上回る。恐らく地球上のすべての基地の乳揉み係の中でもトップだろう。そのようなβを、エージェントどもにくれてやるわけにはいかぬ。デモニアの未来のためにも、βは是が非でも取り戻さねばならぬ。そして我々は手に戻すことができるのだ」

三人の暗黒騎士たちがうなずいた。

「出撃準備」

ベルゼリアの号令に、三人が会議室を出る。その後に、ピンク色の看護服を着た少し垂れ目の爆乳ナース——ルクレツィアが入ってきた。

「あれの準備を」

とベルゼリアはルクレツィアに命じた。

「オツケー。いつでもできるようにしとく。もう一度ポールシフトしただけじゃ、安心できないもんね」

2

京一郎はインカムを装着して、窓からそっと下を窺いつづけていた。バイクの長髪の女は、まだビルの前に居すわっている。そして、待ち人がやってくる気配はない。

間違いない。自分たちを見張っているのだ。ここに自分たちが隠れていることを知っているのだ。

胸には、まだわだかまりが残っていた。ルミナのことを考えると、もやもやした疼きが生じる。グローバル国際学院で同じ一年ブロンズ組のクラスになった時から、気になっていた。オッパイが大きくておとなしそうで、おれの好みだ……と思っていた。

だが——そのルミナは、よりによって濁川庸に恋していた。おまけに初めてのバイズリを濁川に捧げた。さらに今、処女を濁川に捧げようとしている。

二人のセックスのことを考えると、胸に強い圧迫感が生じる。非常に不愉快な、苦しい圧迫感——。

いっそのこと、デモニア救星団に庸を奪わせる？ 奪わせれば、ルミナの処女は濁川に捧げられない。自分がルミナの処女を奪う可能性は残る。自分が今警備をやめて、デモニアに濁川を強奪させてやる？

答えはNOだった。

自分は一度、自分の不注意から作戦失敗を招いている。そのおかげで濁川のポールシフトを、一度邪魔してしまった。そのせいで、隊長の座を追われた。自分は無能になりたくない。無能呼ばわりされたくもない。学年一位の自分が、無能の烙印を押されてたまるものか。もう二の舞はごめんだ。

（おれの仕事はデモニア星人の侵入を阻止することだ）

と京一郎は強く思った。

（もう失敗はしないぞ。今度こそ……）

庸がいる寝室の隣の部屋で、ルミナは思い切り緊張していた。白い壁に白いベッド、そして黒い小さな本棚と机だけのこじんまりした上品な部屋である。

ルミナは紺色のスクール水着を着て、スタンバイしていた。詩鶴がバイズリを終えれば、自分が隣の部屋に行つて、庸とセックスすることになっている。

庸くんと初めてのセックス――。

考えるだけで緊張する。どうして自分はイエスなんて言ってしまったんだろうと思うくらい、緊張している。

自分が来ても、庸くんはセックスしたいと思ってくれるだろうか？

また不安になる。

（でも、オッパイさわってくれたし、自分からいっぱいオッパイを吸ってくれたし……）

その先に進みたくなと言われたら？

おれ、聖とそんな関係になんかなりたくないって言われたら？

絶対、気絶しちゃう。一週間泣き倒して、二度と学校にも行けなくなってしまうかもしれない。

ふいに扉を開く音が聞こえて、ルミナは跳び上がった。

（っ、ついにきた……！）

緊張で頭の中がおかしくなりそうになる。

「今からブルーといっしょに行ってくるから」

と理奈は微笑んだ。身体力が抜けた。

（なんだ……違ってたんだ……）

「自分の番だと思った？」

と理奈が笑った。ルミナは苦笑を浮かべた。

「大丈夫だよ。庸クン、ローズと凄いエッチしたいって思ってるはずだよ。さっきも自分からローズのオッパイさわってたし、めっちゃオッパイ吸ってたし。ローズ、庸クンと同じ中学だったんでしょ？ 中学の時からずっとエッチしたいって思ってたはずだよ。心配いらないって」

と理奈が優しく微笑んでくれた。理奈にそう言ってもら

えると、少しだけ元気が出る。エッチに関しては、理奈が先輩だ。

「じゃ、行ってくるから」

理奈が消えると、ルミナは唾を飲んだ。

自分の番はまだ。

やっぱり緊張してしまうけど、庸くんが自分としたいと思ってくれているのなら、それでいい……。

4

人生逃げたい時があるとすれば、真王寺詩鶴にとっては今がまさにそうだった。ピンクボリスに説得されていざ水着を着たものの、恥ずかしすぎてたまらなかった。

（こんなの、裸と同じじゃない……）

と思う。

真王寺家の自分が、こんなものを着るの？　あまりにも面積が小さくて、水着というより紐である。おおよそ人が着るものとは思えない。服の存在自体がセクハラだ。

「やっぱり着替えてくる」

そう言った詩鶴を理奈が睨んだ。

「庸くん、パイズリしてくれないよ。普通の地味なやつを着ていったって、庸くん反応しないよ。無礼者なんて怒鳴った相手に、庸くんが反応すると思う？」

「でも、こんなの——」

詩鶴が抗弁しようとする、

「また娼婦だって言い張るわけ？　それで庸くんがパイズリしてくれなかったら、誰がどう責任を取るわけ？」

と理奈が容赦なく突っ込んできた。

かつていっしょに戦っていた時のピンクボリスは、こんな感じではなかった。軽くてお調子者で、享楽が友達みたいな感じの子だった。だが、デモニア救星団に捕まって、エージェントの身分を剥脱されて、そして戻ってきてから変わった。芯が強くなった。今、エージェントの中で一番芯が強いのは彼女だ。

「その水着だったら、絶対庸くん反応するから。しゃぶり

ついてくるから。しゃぶりついてきたら、拒まないで庸クの自由にさせて。パイズリはその後。いきなりパイズリしたいって言っても、庸クンOKしないから」

ピンクボリスの説明に詩鶴は黙った。

ああ。

自分はなんてことを引き受けてしまったのだろう。なんてことをしようとしているのだろう。真王寺家の令嬢が、こんな水着を着て娼婦みたいな真似を……。なぜ自分はエージェントになってしまったのか。

「行くよ」

理奈が先に歩きだした。

いや？

違う服にすると言い張る？

自分に選択肢はないのだ。拒むことなんてできないのだ。もうデモニアの連中は第二教会の存在に気づいている。早くパイズリをしてしまわなければ――。

理奈が扉を開き、詩鶴は理奈につづいて部屋を出た。

5

庸はTシャツ一枚とトランクスでベッドに潜り込んで、暗い天井を見上げていた。一旦目を閉じたものの、一向に眠れない。まるで眠気が襲ってこないのだ。自分自身も、眠りたくなかった。

（おれ、どうなるんだろう）

また、当てのない問いが頭の中に生じる。急激すぎる身の回りの変化に、自分の頭が追いついてくれない。

（明日、おれ――）

ノックの音が不安と思考を遮った。扉が開く。

「あ、電気消えてる」

理奈の声につづいて、部屋の照明が点灯した。

「何？」

「もう寝てた？」

と理奈が微笑む。

「寝たけど眠れない」

理奈がカーテンに目をやった。

「エロいんだ」

と笑う。庸は苦笑した。デモニアの仲間に気づいてもらおうと思ってやったことを気づかれたのかと思ったのだ。

「ブルーがね、さっき無礼者って言っちゃってごめんなさいって、お詫びとお礼をしたいんだって」

（ブルー？）

真王寺詩鶴——かつて学校で自分に気に入らないことを言った上級生だ。確か、二年生ではなかったか。

「別にいいよ。おれ、寝るし——」

庸ははね除けようとした。理奈が脇にのき、後ろから詩鶴が姿を見せた。圧倒的な肌色の面積に、庸は哑然として言葉を失った。

両肩から、幅二センチもない水色の紐のような細い生地が、股間に向かってまっすぐに伸びていた。双つの極細の帯はかろうじて乳輪を覆い隠しながら乳房の上を通っている。乳房の大部分は隠れずに露出していた。水着の帯は乳首と乳輪にだけ接触して、あとは乳房の大半から浮いた状態で下へと伸び、胴体突っ切って股間で結びつき、角度の鋭いV字となって股間を覆っていた。

エロいなんてどころではなかった。よくグラビアアイドルが着る、わずかに乳輪と股間だけを覆ったきわどいハイレグ水着——スリングショット水着である。それを、特別生の上級生が着ていたのだ。

詩鶴は恥ずかしそうにうつむいていた。さらさらの漆黒のロングヘアが、水色のスリングショット水着に映える。まるで清純派のアイドルが枕営業に来たみたいだ。

（オッバイまる見え……!）

庸の視線と欲望は、スリングショット水着に覆われた双つのバストに吸い寄せられた。乳首はぎりぎり見えない。だが、乳輪自体が立体的なせいで、輪郭がわかる。乳輪の真ん中に聳え立つ乳首も、勃起して浮かび上がっている。

（エ、エロい……）

庸は突っぱねる気満々だったのだが、早くも前言撤回の文字がちらついていた。少なくとも、お詫びをはね除ける

気持ちほとんど吹っ飛んでいた。目の前に、こんなにエロい衣装とオッパイがあるのだ。

「お礼言うの、だめかな？ お詫びもだめ？」

と理奈が下手に出る。

「別に……だめじゃないけど……」

と答えた庸の語尾は、ごによごと不明瞭へ向かって収束していった。前言撤回確定である。こんなエロい衣装を前にして、拒絶する気持ちはなくなっていた。詩鶴のオッパイはほとんど丸見えなのだ。

「いいって」

理奈の言葉に、詩鶴が近づいてきた。庸は布団を押し上げて上半身を起こした。

詩鶴は庸のベッドのすぐ前までやってきた。間近で見ると、さらにエロい格好だった。水着が乳房の頂点だけに接して、胴体から浮き上がっているのがはっきりと見える。手を滑り込ませば、揉み放題である。

「あの……さっきは怒ったりしてごめんなさい……」

と詩鶴はうつむいた。

心から反省しているのか、それとも恥ずかしいのか。顔は真っ赤である。うつむいてくれているおかげで、オッパイは見放題だ。むつちりと高く突き出したふくらの真ん中を水色の細いテープのような水着が覆っている。生地越しに乳輪と乳首の二段ロケットが浮き上がっている。相変わらずの三段ロケット乳である。少し前に、自分はこのオッパイを揉み、しゃぶりまくったのだ。そして詩鶴はイキまくっていた。あの時の興奮が蘇る。

理奈が庸のベッドに上がってきた。顔を近づけて、「パイズリしちゃっても平気だから。初パイズリもらっちゃえば？」と囁いた。

（パイズリ……）

思わず唾を飲みそうになる。

（本当に？）

と庸は自問した。

（本当にパイズリしても平気……？）

まさか、あの詩鶴がと思う。自分に対して怒った詩鶴が、自分を嫌っているっぽかった詩鶴が、パイズリOK？ 詩鶴はずっとうつむいていた。漆黒のロングヘアと白い肌とのコントラストが眩しい。何よりも、白い肌と水色のスリングショット水着とのコントラストが眩しく、艶っぽい。そして、何度見ても、スリングショット水着は乳房のところで浮き上がっていた。高く盛り上がった乳房を離れたところで、水色の細い帯は宙に浮いて、そして股間でようやく胴体に接している。乳房の上半分も下半分も、右半分も左半分も、水着に覆われていない大部分は丸見えである。もちろん、谷間も全開だ。

「ほら、ブルー。ベッドに上がって」

理奈に促されて、詩鶴はベッドに上がった。膝を突く。庸はまだベッドから半身を起こした状態なので、ややローアングルにオッパイが見える。

「もっと庸クンに近づいて」

理奈に言われて、詩鶴は膝行して近づいてきた。水色の細い帯の下で、プルン、プルンと豊球が波打つ。

「庸クンに跨がって」

（跨がる？ おれの上！？）

理奈の命令通り、詩鶴が膝を突いたまま、庸の両脚に跨がった。信じられない展開である。自分に文句を言ったあの上級生が、自分から庸の両脚に跨がるなんて――。まるで自分から生贄になりに来たようなものではないか。

庸は唾を飲んだ。極細のスリングショット水着は目の前だ。手を伸ばせば、もうそこに詩鶴のバストがある。

「さわっちゃいなよ。水着に手を滑り込ませちゃえば？」と理奈がけしかける。

庸が一番したいことだった。水着がエロいのは、水着の中に手を滑り込ませたいという欲望を、水着を脱がせたいという欲望を、水着が喚起するからだ。

「さわって……」

詩鶴がかすれた声でおねだりした。

（あの真王寺先輩がおねだりした……！）

興奮が激しく全身を駆り立てた。おしとやかな上級生

が、自分に乳揉みをお願いしたのだ。

(思い切りさわってやる……！)

庸は手を伸ばし——人差し指で、細い水着の上から乳首を押した。

「はうっ……」

早くも敏感に詩鶴の身体がふるえる。ビクンと一度きりだったが、身体が波打っていた。

(やっぱり、ここ、弱いんだ)

少し前にバストをさわった時に、詩鶴の弱点はわかっている。オッパイの三段ロケットの頂点——乳首。庸は人差し指を回転させながら、弱点の乳首をぐりぐりと押した。エッチな上級生のバストに、庸の指が回転しながらめり込む。同時に高校生の張りど弾力が指にエッチな抵抗を見せる。

「んあっ……やっ……」

ビクッ、ビクッと身体を波打たせて詩鶴が悶えた。長い黒髪が背中で揺れる。

(おれ、真王寺先輩の胸をさわってるんだ……)

その実感に、庸は興奮した。

かつて自分とクラリッサに注意した女。和風美人だが、厳しそうな上級生。その上級生が——グローバル国際学院の最上層に君臨する特別生が——いやらしすぎる水着を着て、自分に乳首を責められて感じているのだ。

二時間ほど前に詩鶴の胸をさわった時には、詩鶴はセイント・エージェント姿で、目隠しをしていた。目隠しを取るまで、正体はわからなかった。だが、今、目隠しはない。上級生の顔は丸見えである。それだけに、あの上級生の胸を犯しているのだという実感が込み上げて興奮してしまふ。

「真王寺さん、乳首弱かったんだ」

わざと言って、庸はさらに指をバストに沈み込ませた。若々しい高校生のバストに、庸の人差し指が気持ちよくめり込んでいく。めり込みながらドリルのように回転して、弱い乳首を責め立てる。また上級生のバストが反発して、指に抵抗しようとした。

「んあっ……やっ……そんなこと……やあんっ……」



長い黒髪をばさつ、ばさつと暴れさせながら、詩鶴がビクビクと瞬間的に身体を後ろに引いて悶えた。AVを見ていても、胸が感じる女の子は、乳首を責められると途端に身体が後ろに跳ねる。それと同じだった。真王寺詩鶴は、胸が敏感なのだ。敏感すぎて、愛撫に対して逃げているのだ。

(逃すか……！)

庸はバストにいつそう人差し指をめり込ませた。小さな円を描いて乳首をほじくる。バストに快感の穴を空けるように指先ドリルで乳首を責め立てていく。

「やあつ、やつ、やああつ、そこやあつ……！」

詩鶴の身体が面白いくらいビクツ、ビクツと跳ねた。お腹がヒクヒクとひくつき、何度も身体がバウンドする。

(ほんと、この人たまらない……！)

庸はさらに鋭く指を突き立てた。指先が完全にバストに埋まり、消えた。第一関節がまったく見えなくなる。白い豊球は指ドリルを食らってひしゃげ、底面積を増しながら潰れて広がった。まるでパンケーキに圧力を掛けたように、乳房が美しい半球から鏡餅のように変形していく。変形しながら、高校生のすばらしい張り指に抵抗しようとする。だが、抵抗は所詮、敗北につながっているのだ。

「やああつ、そこ、やああつ……！」

詩鶴が思わず逃げた。後ろ手を突く。逃げる詩鶴を追いかけて、さらに指先でバストを突き、ぐるぐると指を回転させた。乳首ごと乳房が攪拌され、体中の性感を掻き立てられて、詩鶴が悲鳴を上げた。後ろ手を突いているので、もう逃げ場所はない。逃げられない状況で、庸の指が双つの乳首を——バストを——ぐりぐりとほじくり、絶頂へと追い込んでいく。

「やああつ、変になるからやああつ、乳首やああつ……!!」

詩鶴は首を横に振り、黒いロングヘアを乱舞させた。庸の指は瀕死の女騎士に止めを刺すかのように、バストに食い込み、乳首を穿った。苛烈な乳首への凌辱に、詩鶴は、やああつ、やああつをくり返し、いきなり激しく上半身を

痙攣させて声を失った。

乳イキ——胸への愛撫だけでの絶頂だった。指責めを始めて数分も経たぬうちに、乳首責めで絶頂に達してしまったのだ。上級生の身体から力が抜け、ふにやっと崩れた。優しく抱き締める？

まさか。

庸はこれ以上身体が逃げないように両腕で背中を抱き留めると、極細のスリングショット水着の上からバストにしゃぶりついた。

「やあっ……！」

庸に拘束されたまま、詩鶴の身体が跳ねた。加虐心を——犯したいという欲望を——生じさせる肉体だった。

「ほんと、真王寺さんの胸、スケベ」

わざと言葉でいたぶりながら、庸は同時に舌でねちねちと乳首をいたぶりにかかった。細い水着の上から、はつきりと勃起した虜囚の突起を唾液でべとべとの舌で執拗に舐める。水着の上からその隆起具合を、形を、なぞるように執拗に乳首を舐め上げていく。唾液を通して快感をたつぷりと塗り込んでいくかのように——。

詩鶴がまた、ビクビクと身体をふるわせた。やあっ、やあっと声を上げて、身をよじる。庸の乳首責めから逃れようとしているのだ。

（そうはさせるか……！）

水着を左右に引つ張ってずらした途端、簡単に水色の細いスリングショット水着が乳首から離れた。それでもなお水着は乳房に掛かっていたが、ぶっくりふくれた乳輪が、その上にロケットのようにそそり立つ尖塔が、庸の視線にさらけ出されていた。そして次の瞬間には、勃起した乳首は庸の口に咥え込まれていた。

舌による凌辱——乳辱——の始まりだった。しつこい舌が乳首に巻きついた。乳首をびちゃびちゃと弾きながら、同時にバストを吸引する。乳首を責め立てられて感じる女もいれば、乳房を吸われて感じる女もいるが、庸は、乳首責めと乳吸いの両方で詩鶴のバストを犯しにかかったのだ。

次の瞬間、

「やあああああっ！」

また詩鶴が悲鳴を上げて身体を突っ張った。ピクピクと肢体をふるわせる。

（イキそうになってるな？ 今だ！）

さらにスピードを加速させて、高速で乳首を弾く。弾きながら、バストを吸いまくる。乳房を吸引されながら、乳首が庸の舌にめった打ちにされた。快感の往復ビンタが、凄く速さで乳首を何度も颯る。詩鶴は、きつと乳首が快感でびりびり痺れて、とけそうになっているに違いない。

「やあああつ、やあああつ、イクう……!!」

初めてイクという言葉の口にして、詩鶴はまたしても絶頂に達していた。白い肢体が、ピクツ、ピクツと二度ほど大きく跳ねる。乳イキだ。

絶頂は征服である。女をイカせた時、男は女を性的に征服した気分になる。庸もまた同じだった。

十分に満足した？

まさか。宴は始まったばかりだ。まだじかにオッパイをさわっていない。

庸は、双球とスリングショット水着の間に両手を突っ込んだ。手がじかに上級生のバストに触れる。豊潤で実にきめ細かな、まろやかな乳肌の手が吸いつく。同時に、充実した張りと豊満なボリュームが両手に炸裂した。詩鶴が無言で、ピクンと身体をふるわせた。

（やっぱ、気持ちいい……!）

詩鶴の肌はすべすべだった。水分がたっぷりの、非常に潤いのある、きめ細かな肌をしている。深層の令嬢を体現したような雪肌だ。さすがお嬢様と言うべきなのか、肌のきめ細かさや肌のまろやかさも違う。乳房の張り具合もルミナに負けていないが、何よりも肌のすべすべ具合やまろやかさが違いすぎる。そして、やっぱり乳房は三段ロケツトだった。乳房の上に盛り上がった乳輪がついていて、さらに乳首が盛り上がっていた。さわりはじめたばかりなのに、乳首が手のひらを突いている。

（ほんと、この人のオッパイ、エロくて気持ちいい……）

一度手にすると、もうやめられなかった。庸はすぐに両方のバストをこねまわしはじめた。弾力をたつぷりと楽しむように、もみっ、もみっ、と乳球をこねまわしていく。三段ロケットのオッパイが、両手の中で気持ちよく弾ける。「あっ……くっ……ふあん……」

ビク、ビクと詩鶴の身体が小刻みにふるえた。

あの上級生のオッパイをじかにさわっているんだ、自由にしているんだという感覚に、庸はゾクゾクした。もっとオッパイをいじめたくなって、弱点の乳首をつまむ。小さな肉の突起が指の中で軽く弾み、

「ひあっ……!」

詩鶴の上半身が小さく跳ねた。乳首をつづけてつまみ、指でこすり合わせる。敏感なのを知って、わざと執拗に指と指の間ですり潰して乳首を颯り立てる。

「ひあっ……! あはっ……! だめっ……!」

詩鶴の身体が面白いくらい間欠的にパウンドする。

(もっと感じさせたい……!)

庸はスリングショット水着を両脇に追いやって、三段ロケットの頂点にしゃぶりついた。

「ひあんっ……!」

詩鶴がビクツと身体をふるわせ、背中を丸めて逃げようとする。咄嗟に庸は詩鶴の腰を引き寄せ、身体を抱き起こしてオッパイを吸い伸ばした。瑞々しい乳房が尖る。

「やあっ、それ、やあっ……!」

吸引音に、詩鶴の愛らしい悲鳴が重なった。詩鶴の身体がビクンビクンと波打つ。

「何が？」

知っているくせに、さらにちゅーちゅーと乳首を吸い立てる。吸い立てながら、舌先をふるわせて口腔の囚人をびちゃびちゃと弾いてやる。

「そ、それえ……やあっ、やあっ……!」

詩鶴が言葉でイヤイヤをくり返しながら、何度も肢体を波打たせる。庸は悲鳴をかき消すほど激しく吸引音を響かせた。豊潤な爆乳が庸の口腔に吸い込まれる。そして吸い込まれたバストの先端には、執拗な舌の往復ビンタ――。

「やああつ、舌やああつ、イクからやああつ……！」

詩鶴はたまらず庸にしがみつき、黒いロングヘアを激しく揺さぶった。漆黒の長髪が右に左に乱舞する。感じまくる姿に、庸は加虐心を覚えた。言葉でもいじめたい欲望が込み上げた。相手は上級生。しかも、特別生——自分よりすべてが上の相手なのだ。

「胸でイキそうになつてんの？ エロい先輩だな」

庸はわざと言葉でいたぶって、両方のバストを寄せた。双つの乳頭が重なる。その双つの乳頭をいっぺんに舌で弾いたのだ。濃いピンク色に美しく染まって尖った敏感な尖塔が、何度も下級生の舌になぎ倒された。上から下へ、下から上へ、執拗に颯り倒される。詩鶴は悲鳴を上げて身をよじり、いきなり上半身を痙攣させた。また乳イキだった。両方の乳首を責め立てられて、絶頂に達してしまったのである。

詩鶴の身体が後ろに倒れそうになった。慌てて引き寄せると、詩鶴は逆に庸に体重を預けてきた。庸は後ろ向きにベッドに倒れた。詩鶴の身体が庸の上に覆いかぶさる。上級生のすべすべオッパイが、むっちりと庸の顔面にひしやげる。

（下からしゃぶりたい……！）

咄嗟に庸は激しい欲望を覚えた。

「身体を起こして」

庸の命令に、詩鶴が身体を起こす。詩鶴は四つん這いに近い形で庸の上に跨がる状態になった。

下から見上げる景色は、絶景であった。すでにスリングショット水着は胸の両側に外れて、形のいい三段ロケット乳が庸に向かって垂れ下がっている。身体を下に向けているので、乳房はいつもよりも豊満にふくらみ、さらにいつもよりも長く伸びてミサイルみたいにいやらしい砲弾形を描きながら先端を尖らせている。男に向かって突き出す、双つの性感ロケットみたいだ。しかもその性感ロケットの先端は、舌の愛撫を待っているのだ。

（下から見ると、ほんとエロい……！）

庸は詩鶴の胴体を少し引き寄せて、乳房にしゃぶりつい

た。同時に片方の乳首を指でつまんだ。瑞々しい乳房が顔に密着する。同時に指の間で乳首が弾ける。イツたばかりの乳首への指と舌とのダブル凌辱に、詩鶴はかわいい悲鳴を上げた。ピクンと身体が背中側——上方向へ跳ね上がる。

「やあっ……もうオッパイやあっ……」

逃げようとする詩鶴の右の乳首を指先で、左の乳首を濡れた舌先でびちゃびちゃと執拗に弾いてやる。

「やあっ、やあっ、やあっ……もうやあっ……」

詩鶴がピクンピクンと身体をふるわせて首を横に振った。黒いロングヘアが背中で揺れ、身体からこぼれて庸に向かつて落ちてくる。それでも、庸は乳首責めをやめない。まるで悪魔にでもなったかのように、右の乳首を指先でこすり合わせ、左の乳首を舌先で颯り立てる。

「やあっ、やあっ、乳首やあっ、またイク……!」

大好きな乳首を指と舌で犯されて、詩鶴の腕がぶるぶるとふるえて崩れそうになる。

「腕、崩れちゃったら罰で庸クンに馬乗りでバイズリね」

と理奈が横から割って入る。

(絶対バイズリしてやる……!)

庸は双つの乳房を真ん中に寄せ、双つの乳首にしゃぶりついた。激しく吸引して乳首を離す。途端に、あはあっと細い声を上げて詩鶴が身体をバウンドさせる。庸は吸引しては乳首を口から解放し、吸引しては乳首を口から解放しをくり返した。

「あはあっ……! ああっ! あはあっ……!」

バストが吸引され、乳首がたつぷりと口の中で伸びて口腔から解放されるたびに、詩鶴の背中がピクン、ピクンと跳ね上がる。

「やあっ、もう乳首やめてえ……」

「真王寺さん、乳首弱いでしょ」

と庸は指摘した。

「弱くない……!」

「そう?」

要は思い切り両方の乳首を吸い伸ばした。いつもならす

ぐに解放するのに、首を横に振って、さらに乳首を颯る。

「あああつ、それ、やああつ……!!」

「これ？」

庸は乳首を伸ばしながら、舌をドリルのように回転させた。舌ドリルが、伸ばされた乳首を口腔の中で凌辱する。

「舌やあつ、やあつ、やあつ……!!」

詩鶴は激しく身体を揺さぶり、庸の舌ドリルから逃れようとした。だが、庸の口は完全に乳首を捉えていた。ピンク色に尖った上半身最大の性感帯は、庸の口腔の虜囚である。もはや、快感の奴隷だ。庸はいつそう乳首を吸い伸ばして、ちゅぽつと甲高い音とともに乳首を解放した。詩鶴の腕が曲がり、乳房が庸に迫った。身体が突っ伏しそうになる。詩鶴は咄嗟にこらえて、身体を引き起こした。

（がんばってる……!!）

こらえていると思うと、余計にいじめたくなる。余計に感じさせて、イカせたくなる。庸は両手でバストを上下に――頭側とお尻側の方向に――揺さぶった。乳房が揺れる。乳首も揺れる。その揺れる双つの乳首を、顔を横にふるわせてしゃぶりまくる。上下動と横の振幅とが重なって、詩鶴が悲鳴を上げた。やあつ、やあつ、やああつとくり返して、いきなり声を失い、激しく上半身を痙攣させ、乳房を庸の身体に押しつけてきた。腕が崩れて、乳房が完全に庸の顔面を塞ぐ。また胸で絶頂に達してしまったのだ。それでも乳首を咥え込んで、舌で颯ってやる。

「だ、めえ……もうだ、めえ……!!」

途切れ途切れで喘ぎの声を放ちながら、詩鶴がさらに身体を痙攣させる。本当に乳首が敏感で仕方ないらしい。いじめ甲斐のある上級生だ。

「ブル―、起き上がって。罰で庸クンにパイズリね」

理奈の言葉に、ようやく詩鶴が身体を起こした。乳房が庸の口から離れる。庸は追いかけてまた乳首をびちゃびちゃと舐めた。

「やあつ、もうやあつ……!!」

また詩鶴が身体をふるわせてイキそうになる。それでもびちゃびちゃと乳首を舌で叩く。詩鶴は身体をヒクヒクさ

せながら、さらに上体を起こして舌から逃れようとした。庸はさらに追いかけて乳首にしゃぶりついた。あぁと声を上げながら、詩鶴が後ろに倒れる。庸はベッドに詩鶴を押し倒して、両方の乳房を寄せた。乳房を高く隆起させておいて、双つの乳首をしゃぶり、吸引する。

「やぁあつ、もうやぁあつ、やめてえ……！」

「乳首弱いでしょ？ 認めたらやめてやる」

と庸は高圧的に出た。

「弱いからやめてえ……！」

庸は思い切り双つの乳首を吸引した。尖った乳首を口に含んだまま、舌でいやらしくすり潰しながら首を左右に振る。

双つの乳塔が弾けた。詩鶴は悲鳴を上げ、いきなり声を失い、背中を浮き上がらせた。二度三度、背中が浮き上がって上半身がバウンドする。またしても、詩鶴は胸だけで絶頂に達したのだ。

6

詩鶴は、もう何度イッたのかわからなくなっていた。

二度？ 三度？ もしかすると、四度かもしれない。濁川庸のことは全然好きではないのに——絶対付き合わないタイプなのに——乳首を攻められると、感じてどうにもならなくなってしまうのだ。

感情とは裏腹に身体の相性がいい？

そんなの、認めたくない。でも、乳首を責められると、たまらなくなってしまう。気持ちよくて気持ちよくて、抑えようとしても勝手にイッてしまう。そして悔しいことに——イクのは気持ちよかった。乳首を責められるのは本当に気持ちよかった。乳首でイカされるのもたまらなかった。

スリングショット水着の股間部分は、恥ずかしいくらい濡れていた。濡れすぎて、生地がびったり張りついてしまっている。疼いて疼いて仕方がない。人間にとっての一番の他人は、実は自分の身体なのかもしれない。感じたい

と違っていないのに、勝手に感じて自分の気持ちを裏切りつづける。

でも、本当に裏切っているのだろうか？

やあつ、やあつ、やあつ。

やめてえ。

そう言いながら、さらに激しく乳首を責められて感じていたのは誰なのか。心の奥に――情動の奥底に――絶頂を、絶頂へと導く愛撫を、望んでいたのは誰なのか。他ならぬ自分ではないか。人は神と獣の中間的存在だというのは、こういうことなのか。

ふい庸が自分の身体から離れた。途端に、

（もう終わりなの……？）

寂しく思ってしまった。もう少し乳首をいじめられてもよかった。逃げてでも逃げてでもバストを責められるのはとても気持ちよかった。

「ブルー、パイズリね」

と理奈が告げた。いきおい、緊張した。

数時間前までは、胸を見せたことも、揉まれたことも吸われたこともなかったのだ。その自分が、今度はパイズリ？ わたし、できるの？

庸が起き上がっていた。

（どうするの？）

不安になる。

「平気。庸くんが動くから」

とそばで理奈が励ましてくれる。言葉通り、庸はトランクスを脱いで詩鶴に跨がってきた。一瞬、襲われるんじゃないかと不安が走った。

だが、庸は胴体に跨がっただけだった。庸がペニスを取り出す。膨張した男の逸物は、大きかった。比喻でソーセージなどと言われるが、こんな太いソーセージはない。おまけに、かなり距離は近かった。

（お、男のアレって、こんな感じなの……？）

一瞬、目を背けたが、また見てしまった。亀頭がふくらんでいて、女の詩鶴からすると、なんか変な感じだ。皮膚の下から血管が見えるのも、生々しく感じてしまう。

（なんだか、犯されてしまいそう……）

庸が胸ではなく下半身に跨がったら、自分は犯されてしまう。そうなったら、どうすればいい？ 理奈は助けられる？

庸が両乳をつかんだ。

（また乳首を責める……？）

乳首はいじらなかった。庸は片手でペニスを押さえながら、乳房で挟み込んだ。

不思議な感覚だった。

やわらかい自分の乳房の間に、妙に硬い異物が挟まっている感じ。とても妙な感じだ。好きではない相手の身体は異物である。別に気持ちよさはない。だが、庸は少しつけた表情で半開きに口を開いた。

「くす。気持ちいいみたい」

と理奈がそばで言ってくれる。

（そうなの？ 気持ちいいの？）

初体験の自分にはわからない。ただ不安しかないのだ。初めての自分が、果たしてうまくパイズリできるのか。自分は何もできず、ただ無力を感じながらモノのように横たわるだけで、まるで射精を待つ受け身の人形――。

濁川はちゃんと射精してくれる？

わからない。うまくパイズリできないと、きっと固定化はうまくいかないに違いない。でも、自分にはどうすることもできない。

「庸くん。いっぱいブルーのオッパイ、オチンチンで犯してあげて」

理奈の言葉に、庸は腰を振りはじめた。自分で双球をペニスに押しつけたまま、ずりっ、ずりっ腰を振って乳房の間を往還させていく。

またしても不思議な感じだった。

男が自分の上を――胸の上を――いや、胸の中を、動いている。ペニスが自分の胸の中を動いている。そして男は――どうやら気持ちいいらしいのだ。

「庸くん、気持ちいい？」

理奈が横から尋ねる。

「うん……オッパイがすべすべ……」

庸の声が、少しうわずっている。

（え？ 本当に気持ちいいの？ こんなので気持ちいいの？）

さらに不思議な気分になる。でも——ちよっぴりうれしい。気持ちよくないと言われるより、ずっといい。

ふいに胸の中でペニスがびくつと脈打った。

（え？ 今のって？）

「くす。庸くん、イキそうになってきた♪」

と理奈が笑う。

（そうなの？ イキそうなの？）

庸は明らかに気持ちよさそうな、少し、我慢しているような顔をしている。

前と表情は違う？

わからない。自分の方が緊張していてわからない。ただ、パイズリがうまく終わってほしいと思う。

庸の動きが激しくなった。自分の胸の間を、庸のペニスが激しく往還する。

「理奈ちゃん、本当にイッていいの……？」

庸が喘ぎながら尋ねる。

「いいよ。いっぱいイッちゃって」

ついにイクんだ、と詩鶴はまた緊張を覚えた。いよいよである。これで最初の布石が完成する。濁川庸がポールシフトされないようにするためには、まず自分がパイズリする必要がある。そして次に、ルミナがセックスする必要があるのだ。

自分はセイント・エージェントの未来のために、最初の重要な布石を打とうとしているのだという思いが強くなった。

「ブルー。オッパイをぎゅうって押しつけてみて」

理奈からアドバイスが飛んだ。

（押しつけるって、こう？）

おっかなびつくり、両手でオッパイを押しつけてみた。胸の中を往還するペニスに対して、乳圧を加える。より、ペニスが乳房を貫く感覚が——乳房と乳房の間を押し退け

る感覚が——強くなる。

「ああ……」

庸が呻いた。腰がピクンと動いた。

（え!? 今のって、気持ちよかった!?）

初めての自分でも、庸が反応したのがわかった。庸が切なそうな表情を浮かべて、さらに腰を振る。ずっと緊張状態で余裕がなかった詩鶴だったが、初めて庸の表情が今までと違うことに気づいた。

（感じているのね……? 気持ちいいのね……?）

ふいに、興奮と歓喜めいたものが湧き起こった。庸の反応に気づくまでは、自分はただのモノみたいな感覚だった。ただパイズリされるために横たわっている置物。ただ寝転がって胸を犯されるだけの、主体性を放棄した無力な存在——。そう感じていた。だが、その自分が、庸に対して明確な効果を与えたのだ。

セックスで初めて味わった、主体性発揮の瞬間だった。そして主体性を発揮した瞬間は、興奮に彩られていた。

（もつと挟んだらどうなるのかしら……）

さらに乳房を押しつけてみた。普段はG75のブラジャーに収まっている爆乳で、庸のペニスを強く挟み込む。

「ああっ、それだめえ……」

庸が喘ぎながら呻いた。

（感じてる……!）

詩鶴はさらに興奮した。初体験で全然自信がなくて、自分には何もできないと思っていたパイズリだったが、自分にできることがあったのだ。エージェントとしての優秀さを証明した時と同じように——。

庸にさんざん乳首をいじめられてイカされた思いが蘇った。あの時、ひたすら自分は攻められていた。守ることもできなかった。でも、今なら——。

（仕返しよ……! 今度はあなたがイキなさい……!）



庸は、詩鶴に馬乗りになってパイズリストロークを繰り出しながら呻いていた。

バストサイズ自体は、ルミナの方が遥かに上だ。ボリユームもルミナの方ががある。ルミナはIカップだが、詩鶴は恐らくGカップぐらい――。

だが、そのバストサイズを撥ね返すほどの、オッパイのすべすべ感だった。きめ細かいクリーミーな肌がペニスにびつちりと吸着して、腰を振るたびに両側からペニスを摩擦してくるのだ。

いくらバストが大きくても、ざらざらの鮫肌ではパイズリも気持ちよくはない。だが、詩鶴の乳肌はきめ細かくまろやかで、ただペニスに触れているだけでもとろけそうな気分になってしまう。その雪肌が、ペニスを乳間に往還させるたびに密着してくるのだ。

(ちよ、ちよつと正直、やばい……)

パイズリする前は、まさかこんなに気持ちいいとは思ってはいなかった。聖ルミナより小さいなあ、理奈ちゃんの方が大きいなあと思っていたのである。二人にするパイズリの方が絶対気持ちいいと思っていたのだ。

大間違いであった。

理奈とルミナと詩鶴と、誰が一番気持ちいいのかわからないくらい、パイズリをしていて気持ちよかった。腰を振るたびに、なめらかな雪肌にペニスをしごかれてイキそうになってしまう。

しかも、相手はあの詩鶴だった。

艶々と光の輪を放つ黒いロングヘアをベッドシートに広げさせて仰向けになったまま、庸を見つめているのだ。

膣にペニスは突っ込んでいないが、半分、犯しているような気分である。自分があの特級生を、自分より遥かに高位的の上級生を、屈伏させているような気分である。自分の上級生に跨がって、上級生のオッパイを犯しているのだ。

だが、犯しているはずのオッパイに責められて追い込ま

れているのは、庸の方だった。腰を振るたびに、ずりずりと雪肌にしごかれて射精の予感に襲われて悶えてしまう。

「くす。庸くん、イキそうになってきた♪」

早速理奈に見抜かれてしまった。理奈には何度もパイズリしているので、顔の表情だけでわかってしまう。

（もう我慢するの、無理……）

「理奈ちゃん、本当にイッていいの……？」

庸が尋ねると、

「いいよ。いっぱいイッちゃって」

と理奈がOKを出した。

詩鶴が自分から両手でバストを押しつけてきた。むにゅうっと両側から張りのあるGカップ乳が押し寄せる。すべてのクリーミーな乳肌がさらにペニスに密着して肉棒をこすり立てる。

「あぁっ、それだめえ……!!」

ちりちりと快感の粒子がペニスに込み上げた。快感の電気が通電したみたいに、じいんと気持ちのいい快感の通電状態がペニス全体に広がっていく。

ペニスの感覚がいきなりふわふわしたものになり、ペニスとオッパイとの輪郭の感覚がぼけてきた。

（やばい……これ、イク前触れだ……!!）

さらにペニスの感覚がふわふわになり、ところどころの快感とごちゃ混ぜになった。パイズリストロークは止まらなくなっていた。もう少し快感の時間を長引かせよう、抑えようと思っているのに、チンポが気持ちよくて勝手に腰が動いてしまう。爆発寸前のチンポが、すべすべのオッパイの中を勝手に激しく往還していく。

ちりちりの快感とところどころの快感が溶けながら、ペニス全体に充満した。すべての快感がちりちりの状態からところどころの状態へと変わり、ペニスと乳房との輪郭の感覚が消えた。快感だけが、快感の感覚だけが、ペニスに充満した。

（だめ、イクッ……!!）

庸はついに、美しい上級生の胸の中に精液を噴射していた。どぴゅっという噴射音が鳴り、精液が気持ちよくほと

ばしった。

「きゃっ」

詩鶴が声を洩らす。どろどろの濁液が胸の谷間から飛び出し、首の付け根に掛かる。さらに、遅れてびゅっ、びゅっと濁液が噴射して、胸の上部をどろどろに汚す。

（ああ……イッた……）

庸は腰をふるわせた。射精前の緊張から解放されて、心地よい虚脱感と弛緩とが身体に広がっていく。

詩鶴は目を開いて、精液を見ていた。男の射精を見るのは初めてなのだろう。

「庸くん、イッたねっ」

と理奈が笑顔でほめてくれる。

「精液、結構熱いでしょ？」

と理奈が詩鶴に話しかける。詩鶴はうなずいた。詩鶴が目を丸くしていたのは、精液の温度だったらしい。

詩鶴が乳房を押しつけてきた。雪肌がまたペニスを締めつけて、優しくくすぐる。

（やばっ……）

また快感が込み上げた。イッたばかりなのに、乳房を押しつけられただけで、もうイキたくなっていた。

「これでおしまい？」

と詩鶴が理奈に聞く。

「ゆさゆさしたら、出るかも」

その言葉に、詩鶴が乳房を弾ませてきた。パイズリは初体験のはずなのに、寝転がったまま、庸のペニスに揺さぶり挟撃を与えて両乳でこすり立ててきたのだ。

（やばい、イク……！）

詩鶴がさらにずりずりと激しく乳房を上下に揺さぶった。Gカップのすべすべオッパイがたぶたぶ揺れながら、優しくペニスをこする。庸をイカせたクリミーな雪肌が容赦なくペニスに密着し、摩擦する。

「んあっ……！」

ペニスがとけそうになって、庸は思わず声を洩らした。

（やばい……また出る……）

抜こうとしたが、もうその時には詩鶴は淫靡なパイズリ

ストロークを加速させていた。イッたばかりで敏感なペニスを、ばいんばいんと音がしそうなほど、激しくGカップの豊球が揺れてしごき立ててくる。

「ああっ、だめ、それ出る……」

「出さない……わたしをイカせた罰よ……」

熱っぽく息を弾ませながら、詩鶴が双球をバウンドさせる。すべすべのオッパイを、凄い勢いで両側からペニスにこすりつける。だが、どんなにパイズリが加速しても、ペニスにはクリーミーな雪肌が優しく触れて優しくこすっていくのだ。指でしごくような強さではない。あくまでもソフトな、とろけそうな感触を与えながらペニスをしごいてくるのだ。ペニスはもうとろとろである。

（やばい、本当にイク……!!）

次の瞬間、詩鶴は信じられないことを始めた。男にパイズリするのは初めてのはずなのに、まるでパイズリだけで客が取れそうな風俗嬢みたいに、いきなり両方の乳房を交互に揺さぶってきたのだ。右乳をずり上げて左乳をずり下げ、次に右乳をずり下げて左乳をずり上げる。揺さぶりパイズリである。

「んああっ、それイク……!!」

左右互い違いに揺れ合う双球が、激しくペニスを翳った。我慢しようとしても、これでもかとはかりに両側から互い違いに乳房が密着し、優しい雪肌で摩擦する。チンポがとろける感覚に襲われ、こらえる間もなく快感が爆発し、庸はまた精液を打ち放っていた。

胸の谷間から白い濁液が大量にほとばしった。精液が詩鶴の喉に直撃する。つづいてもう一つ、小さな塊の精液が谷間から噴射した。まるで白いマグマの噴火である。

（あああ……!!）

庸は詩鶴に跨がったまま、腰をふるわせて上級生の胸の谷間に精液を注いだ。その間も、詩鶴は乳房を揺さぶっている。左右互い違いに優しくパイズリで責め立てる。

（だめ、もうイッてるからあ……!!）

庸はつづけて詩鶴のバストに射精した。詩鶴がぎゃつと声を上げた。目をパチパチさせる。ようやく淫靡なパイズ

リストロークが終わっていた。

(気持ちよかった……)

庸は放心した表情で詩鶴を見た。詩鶴は満足そうに精液を見ていた。初めての精液に驚いているのか、天性の淫性が目覚めたのか。表情からはわからない。そして庸は詩鶴の表情に囚われて、理奈が小さくガッツポーズを決めたことに気づかなかった。

1

深夜、二時すぎ――。

乳雲寺の前で、一〇〇〇ccオーバーの三台のバイクがほぼ一斉にスタートを切った。一台はヤマハV-MAX。一台はスズキGSX-1300Rハヤブサ。一台はホンダCBR-1000RR――。

跨がっているのは、ヘルメットをかぶったデモニア救星団の暗黒騎士たち――黒いライダージャケットを着た水色のミディアムヘアのゼルシア、赤毛のインフィニア、黒髪のアイゼナハだった。ゼルシアはヤマハV-MAXに、インフィニアはスズキGSX-1300Rハヤブサに、アイゼナハはホンダCBR-1000RRに乗っている。不思議なことに、ベルゼリアの姿はない。

三台のバイクは、細い路地を抜けてすぐに幹線通りに出た。先頭はアイゼナハのホンダCBR-1000RRである。

墓標のように黄色い街灯が照らし出す黒いアスファルトの舗装を、なめらかに駆け抜けていく。

アイゼナハは、ずっと通りの先を見つめていた。白いセントリーンが右前方から猛スピードで迫っては後方へ抜けていく。この先は、いったいどこへ向かっているのか。敗北なのか、それとも――。

（庸、待ってて……すぐに助けてあげるから……）

2

エージェントAは自分の部屋で、隣接する埼玉エリアに援助を求めたところだった。万が一を考えて、救援を要請したのだ。関東エリアのリーダーはすぐに快諾してくれた。一時間で到着するという。もっと早く援助を求めるべきだったのだろうが、作戦が成功する前から援助を要請するわけにはいかない。

かわらず、やり遂げた後の充実感が高揚といっしょに胸に溢れていた。

初めてのパイズリは、自分に思いがけない感覚をプレゼントしてくれた。

自分はモノ。

自分は無力。

主体性はゼロ。

自分は受け身の人形――。

途中まではそんな感じだったのに、自分が乳房を押しつけるようになってから、世界が一変したのだ。詩鶴に胸を押しつけられて、明らかに濁川の反応が変わった。その後、すぐに濁川は射精した。そして自分がオッパイを揺さぶると、濁川は二度目の射精を行った。自分のパイズリに、射精でもって応えたのだ。

女の勝利？

胸の勝利？

パイズリの勝利？

（わたし、男の人を初めて射精させたのね）

自分は何もできない女じゃなかったのね、と詩鶴は喜びを嘯み締めた。ただ横たわってパイズリされながら射精を待っている時は、自分が置物になったみたいだった。何もできない存在みたいだった。でも、そうではなかったのだ。

ただ寝転がっているだけで何もしない女のことを、俗にマグロと言うと聞いたことがある。自分は途中でマグロだった。でも、途中からマグロを脱したのだ。性的に何もできない、だめな女を脱したのだ。

詩鶴は、自分の性的能力を――自分の性的優秀さを――証明したような気分だった。パイズリで射精という、巨乳の女にしかできない、自分の有能証明――。

濁川は本当に気持ちよさそうな表情をしていた。恍惚が両目に浮かんでいる。本当に自分が濁川をイカせたんだと思う。

気分は高揚していた。精液のぬくもりは不快ではなかった。むしろ、うれしいくらいだった。胸に散らばった温か

い精液は、勝利の証だった。

「ブルー、凄いね。庸クン、一瞬でイッちゃったよ」

とそばで理奈が感嘆の声を上げる。経験者の理奈に言われて、詩鶴は少しはにかんだ。

ちよつと恥ずかしかったが、うれしかった。

庸が射精したのは、庸自身の力ではない。わたしの力だ。わたしの胸が、庸を射精させたのだ。

女の勝利。胸の勝利。パイズリの勝利――。

（もう一回、パイズリしてあげてもいいかも）

高揚のあまり、そんなことを思ってしまった。パイズリは初体験だったが、男がイクのはちよつと楽しかった。

（もう一度――）

パイズリを始めようとしたところで、

「ブルー、シャワーへ。庸クンの精液、洗ってきたら？」

と理奈が促した。理奈は笑っていたが、目の奥が促していた。

選手交替。次はローズ。

はつとした。

そうだった。次はルミナだった。あんまり射精させたら、きつと男の人は射精できなくなってしまう。ルミナにも興味を持たなくなってしまうかもしれない。

「庸クンもシャワーを浴びてきたら？」

と理奈が促した。

「ああ……」

と生返事をして、庸は起き上がった。それで詩鶴は、ようやくベッドから身体を起こした。

「外のシャワーへ。ローズを呼んできて」

と理奈が詩鶴に囁いた。詩鶴は小さくうなずいて、庸の寝室を出た。

ルミナは控えの部屋で、思い切り緊張していた。着ているのは、紺色のスクール水着だけだった。サイズが小さくて、思い切り胸の谷間が覗いている。もし誰かが部屋に

入ってきたら、思い切り谷間を見られてしまう。

でも、見る相手が庸くんならかまわない。

中学生の時からずっと好きだった庸くん。片思いの相手だった庸くん。戦闘中におかしな仮面をかぶって自分の胸をさわった相手。自分が初めてのパイズリを捧げた相手――。

今、庸くんは詩鶴にパイズリをしているはずだ。

悔しい？

うん。

ドキドキしている。パイズリがうまくいけばいいと思う。そうすれば、庸くんはポールシフトされることなく、ずっとここで自分といっしょにいられる。庸くんは自分だけでなく詩鶴の胸も理奈の胸もさわることになるけれど、庸くんはずっといっしょにいられるのならかまわない。それに――。

今日、庸くんに自分の初めてを――処女を――捧げることになるのだ。

うまくできるかな。

庸くん、わたしとセックスしたくないなんて言ったりしないかな。

理奈は平気だって励ましてくれたが、不安は尽きない。性的な自信は、仲間のたった一言だけでたりしないものだ。セックスの自信は、セックスの相手によってしかない。

ノックの音にルミナは跳び上がった。

(来た!?)

部屋に入ってきたのは、詩鶴だった。

「あなたの番よ」

心臓が妙な音を立てた。内臓が一気に萎縮して変な感覚になる。

「うまく……いった？」

詩鶴はうなずいた。少しはにかんだところを見ると、やっぱり初めてのパイズリは恥ずかしかったらしい。

わかる。自分もそうだったから……。

「がんばって」

詩鶴に励まされて、ルミナは部屋を出た。向かうは庸くんの部屋――。

6

庸は寝室の中に設けられた透明のシャワーブースで、シャワーを浴びていた。直径の小さな細い水流が、身体の汗を心地よく流していく。

なんだか、今日は目眩がしそうだった。デモニア救星団の基地付近で誘拐されたのが、午前〇時頃。無理矢理セイント・エージェントの味方にされて、ルミナのオッパイをしゃぶって、詩鶴のオッパイもいじめて、エージェントAに思い切りパイズリで責められて。そして今度は、詩鶴にパイズリしてしまった。

詩鶴のパイズリは予想以上に気持ちよかった。胸のポリウムだけでいえば、理奈やルミナの方が上だ。詩鶴の方がポリウムで劣る。

だが、肌の質感が全然違っていた。あのクリーミーな肌を押しつけられて密着した状態でこすられると、もうたまらなかった。今でも、本当に気持ちよかったという印象しかない。だから、三連続で射精してしまったのだ。

詩鶴が自分から乳房を揺さぶってきたのにも驚いた。パイズリは初めてのはずなのに、自分から胸でしごいてくるなんて……。あまりに気持ちよすぎて、すぐに射精してしまった。雪肌パワー炸裂である。また詩鶴にパイズリしよつかと誘われたら、うんと即答してしまいそうだ。

（おれのこと、嫌いだったはずなのにな……）

と庸は思った。

（もしかして、好きになった？）

ありえない。

お礼と言っていたから、自分のおかげでパワーアップしたのだろうけど、それで自分を好きになるなんてありえない。

明日もわたしの胸をさわってパワーアップしてね。きつとそういうつもりなのだろう。そう思うと、ちよっ

と悲しくなった。自分が部品のような感覚になる。デモニア救星団にいた時は、部品みたいな寂しい感覚を味わうことはなかった。デモニアでは自分は作戦隊長で、中心的存在だった。確固とした主体だったのだ。でも、セイント・エージェントでは、部品としての充実しか味わえない。主体性は奪われてしまっている。

（理奈ちゃんも聖も、真王寺さんと同じなのかな……）

と庸は思った。でも、お礼に来てくれた時はそんな感じはなかった。二人のオッパイを思い出すと、今でも勃起しそうになる。オッパイを押しつけられながらパイズリされるのは気持ちよかった。オッパイをしゃぶるとルミナが思い切り反応して。自分も夢中になってしゃぶりついて。それを見て、理奈が思い切りパイズリで責め立てて……。

ルミナのオッパイには、どんどんはまってしまいそうだった。本当に大きくて気持ちよくてたまらない。あの大きさであの乳房の隆起度は半端ではない。日本中のAV女優と比べて、彼女より上の女優がどれくらいいるのか。

ふいにブースの扉を開く音が聞こえて、庸は振り返った。立っていたのは、紺色のスクール水着を着たルミナだった。一〇一センチIカップの豊球は、詰め物でもしたのかと思えるほど高くパツンパツンふくらんで隆起していた。見るからにムチムチしていて、無造作に水着の上から揉みしだきたくなる。おまけに水着が小さいのか、胸の谷間の三分の二が露出していた。乳房の半分くらいも露わになっている。

（水着小っちゃ……！）

庸は胸の中で突っ込んだ。同時に、爆乳の隆起に、そして谷間に引き寄せられた。

（やっぱり、聖ってでかい……）

同じ中学に通っていた頃から大きかったが、何度見ても大きい。狭いブースの中で間近で見ても、やはり大きい。密室のシャワールームでスクール水着のルミナと二人きりで対面すると、学校のシャワールームでイケナイ対面をしているような気分になる。

「な、何……？」

と庸は尋ねた。

「う、うん……背中流そうと思って……」

とルミナは赤面してうつむいた。うつむいたおかげで、オッパイは見放題だ。上から見ても、やっぱりルミナのオッパイは大きい。少し前に吸いまくったオッパイは、紺色の小さな水着の下でムチムチの存在感を放っている。

（さわってやるっか……？）

ふと、庸は思った。夜明け前だから、今さわったってチャージすることにはならない。しかも、場所はシャワールームという密室。ブースにはルミナと二人きり――。

さわったら怒る？

たぶん、ルミナは怒らない。

「背中流すって、こういうこと？」

と庸は両方の人差し指でスクール水着の上から乳首を突いた。

「あんっ」

びくっとルミナが身体をふるわせる。

ムラツと欲望が湧き起こった。今まではずっとルミナにモーションをかけられてだったが、初めて庸の方からアクションを起こしたのだ。

「おれに胸、さわられに来たの？」

聞きながら、さらに二本の人差し指を双球にめり込ませる。指先が小さな紺色のスクール水着にめり込み、乳房がたわんで中心が凹んだ。ムチムチの弾力が指先で悲鳴を上げながら庸の指を弾き返そうとする。

「あんっ……やっ……」

「違うの？」

さらに聞きながら、指でバストを攪拌する。乳首を潰しながら、ぐりんぐりと指を回転して豊かなバストを指先だけで回す。同級生のバストが弾力で心地よい抵抗を見せた。ピクピクと身体をふるわせながら、ルミナが首を横に振る。

やっぱり、胸をさわられに来たのだ。

庸は大胆に、両手でバストをつかんだ。小さなスクール

庸の指はすぐに乳首を捜し当てた。パツンパツンに張った同級生の、女子高生の乳房の感触を楽しみながら、コリの乳首を指先で撫で、倒してやる。

「やん……」

ルミナがピクツ、ピクツと身体をふるわせた。シャワーを浴びながら同級生にエッチな悪戯をしている気がして、さらに興奮が高まる。庸はスクール水着の隙間の中で手を広げて、欲望をだめて揉みまわした。弾けそうな一〇一センチーカップ球がむっちりとしやしやげ、瑞々しい弾力と快感を手のひらに炸裂させる。

（やっぱでかい……！）

揉みしだきながら乳首を何度も倒すと、ルミナの身体がスイツチを入れられたようにふるえた。

ルミナが感じている。

自分が感じさせているんだ。

その征服感に、さらに興奮して庸はたまらなくなった。ペニスもう勃起しまくっていた。ルミナも庸の勃起は感じているだろう。

庸はルミナの手をつかんだ。

「しごいて」

とルミナの手をペニスに誘導する。中学時代からの同級生の手が、庸のペニスを優しくつかんだ。少しおっかなびつくり、少したどたどしい感じで、庸の肉棒に指を絡ませる。中学時代からエッチしたかった女の子に自分のチンポを握らせているという感覚、現実に、興奮する。

「動かして」

ルミナが後ろ手で庸のペニスをしごきはじめた。ゆっくり上下動するだけでも、ペニスが気持ちよくなって射精したくなる。女子高生の手はふにゆふにゆしていて、気持ちいい。

（射精したい……！）

欲望をぶつけるように、さらにIカップのオッパイをこねまわす。でも、スクール水着に手を滑り込ませている状況では、自由に揉めない。

（もっと思っ存分にさわりたい……！）

庸はとうとうスクール水着の肩紐を外した。肌色の面積が一気に広がり、肩口から乳房上部が完全に眩しい肌色に変わる。そしてバストトップを遮っていた紺色のスクール水着が身体から離れ、ムチムチの豊球が姿を見せていた。肩口から眺めても、やはりその突出ぶりは半端ではなかった。重力に引っ張られて斜め下へ急斜面のように下降するのではなく、むしろ樹から飛び出さんばかりに突き出した南国のフルーツのように勢いよく前方へ迫り出している。女子高生の体幹に胸のフルーツが双つ、くつついているみたいだ。



弾力とIカップのボリュームが両側から押し寄せた。

（やばい……もうイキそう……）

さっき詩鶴にバイズリしてイッたばかりなのに、もう果てそうになっていた。すぐに爆発したくてたまらなくなる。

庸はルミナの肩に手を置いて、腰を振りはじめた。ずりっ、ずりっとならぬペニスを突き立てる。そのたびに、弾力たっぷりの若々しいバストがペニスを容赦なくこすり立てる。そして胸の一番奥までペニスを突き立てるたびに、鼠蹊部をやわらかい乳房の質感が迎え撃ち、優しく愛撫する。乳房独特の弾力とやわらかさが、ピストンのたびに鼠蹊部を受け止め、くすぐるのだ。その、バストが鼠蹊部にやわらかく当たる感覚が気持ちよくてたまらない。オッパイを犯しながらオッパイに受け止められている感じがして、射精したくなってしまう。

「聖……もうイッていい……？」

庸は腰を振りながら尋ねた。

「うん……平気……」

その言葉に庸はさらにピストン運動を加速させた。激しく腰を振るせいで、余計に何度も何度も乳房が鼠蹊部を優しく受け止める。そして高速で乳房がペニスをしごき立てる。ちりちりとした快感の粒子がじいんと肉棒全体に広がり、庸は呻いた。チンポがとけそうな快感に襲われ、乳房とペニスとの境界の感覚が、快感の中で薄らいでいく。

（やばい、マジでイク……！）

庸は首を横に振り、低く呻き声を洩らした。腰がピクッ、ピクッと激しく痙攣し、精液がルミナのIカップの谷間に噴射した。さらに腰がふるえ、精液を飛び散らせる。

（はあ……またイッちまった……）

庸は恍惚とした目でルミナの乳房を見下ろした。龟头は完全に谷間の奥に隠れて見えない。精液も見えない。でも、きつと谷間の奥もペニスもどろどろだ。

腰を引くと、ルミナが乳房から両手を離れた。白い濁液が、乳房の付け根と乳房に掛かっていた。ペニスにも精液

がついていた。思った通りどろどろだ。

ルミナは少し驚いているような、喜んでいるような感じだった。考えてみれば、ルミナにパイズリする時にはいつも誰かがいたのだ。ルミナ単独でルミナと二人きりでパイズリしたのは初めてである。

「めっちゃ気持ちよかった……」

庸の言葉に、ルミナははにかんだ。地味な顔だちだが、それでも笑顔はかわいい。いい子だなって思う。中学時代に庸がルミナに惹かれたのは、胸だけではない。

庸はシャワーヘッドをルミナの胸に向けた。精液を洗い流す。洗い流しながら、おれ、いっぱい射精したんだなって思う。

「いたい、今日、何回射精したんだろう？」

「四回？」

「五回？」

なのに、まだいっぱい精液は溢れてくる。正直、どうかしてる。中学時代、部屋で一人でオナニーしている時は、最高でも六回だった。そして五回目六回目は、ほとんど残り汁みたいな分量しか出なかった。

こんなにいっぱい出るのは、相手が理奈や詩鶴やルミナだからかもしれない。根底から欲望を刺激され、搾り出されてしまうのだ。今だって、お湯で身体を流しながら、ほんとにいいオッパイだなんて興奮しているのだ。きつとまたパイズリしたら、射精してしまうに違いない。

（オッパイしゃぶればよかった）

ふと思った。パイズリに夢中になってしまつて、しゃぶるのを忘れてしまった。揉むしかしていない。

「しゃぶっていい？」って聞いてみる？

ルミナはたぶん断らない。

でも、しゃぶつたら、なんかベッドに押し倒してしまいうる感じがする。それはさすがに――。

「庸くんは……パイズリしか興味ない……？」

ルミナが伏目に尋ねてきた。顔は少しくつむいていて、表情は硬かった。ナイーブな話題に、心が自然に硬化している感じの表情だった。

（バイズリしか……？ どういう意味？）

庸はルミナを見た。

（バイズリしか興味ないって、まさか、セックスには興味ないってこと？）

まさか。

自分の考えを否定した途端、伏目のままルミナが畳みかけてきた。

「わたしとするの……いや……？」

わたしとするとセックス？

まさか！

ルミナは処女のはずだ。処女のルミナが自分から――。

（いや、でも、わたしとするのいや？ って、そういう意味だよな？ セックスするのはいや？ って意味だよな？ わたしとセックスしないかって、間接的に聞いてるんだよな？）

心が動揺した。思いがけないルミナからの誘いに、思い切り動揺した。

「いや……？」

ルミナは質問をくり返してきた。目はずっと伏せたままだった。表情も、頬が硬くてぎこちなかった。

庸はまだ動転していた。でも、いやなはずがなかった。中学時代、何度ルミナを妄想の中で脱がせてオナニーしたことか。

（でも、理奈ちゃんは……？ 聖としたら、理奈ちゃん、怒っちゃう……？）

「秋元さんの方がいい……？ わたしじゃだめ……？」

もう一度ルミナに聞かれた。

理奈に操を立てて断る？

断れば、ルミナは泣いてしまうかもしれない。ルミナは絶対処女なのだ。処女が自分をセックスに誘っているのだ。相当の勇気を振り絞って自分を誘ったに違いない。

女の子の勇気を無下にするのか？

相手が全然タイプとは別だったり自分の嫌いな子だったりしたら、拒絶したっていいかもしれない。セックスの選択権は自分にあるのだ。

でも、ルミナは決してタイプじゃない子ではない。むしろ、思い切りタイプである。中学時代、何度ルミナの胸を盗み見たことか。体育の授業の時、ルミナを視線で追いかけていて集合の号令に気づかず、気づいたら自分一人がグラウンドの真ん中に取り残されていて他の皆は整列していたこともある。水泳の授業なんか、もう窃視するのと勃起を抑えるのとで大変だった。水泳の授業のたびに、帰宅してルミナのスクール水着姿を思い出してオナニーしていた。妄想の中でルミナを脱がせてオッパイを揉んでしゃぶってパイズリして、中に入れて、射精していた。

そのルミナが――相手なのだ。

今日一番のサブライズだった。しかも、望まざるサブライズではなかった。

「やっぱり……だめ……？」

ルミナの顔がさらにうつむいた。

「おれも聖としたい」

庸ははっきりと答えた。ルミナがぱっと顔を上げた。草むらに咲いたパンジーの花みたいに、顔が明るく輝いていた。

「ほんと……？」

「おれ、中学ん時からずっと聖としたかった」

ルミナはさらに瞳孔を幸せ色に輝かせ、庸に抱きついた。シャワーを浴びて濡れたIカップの豊球が密着してひしゃげる。抱きついただけでも乳房が存在感たっぷりな庸の胴体を刺激して心地よく圧する。

庸のペニスはいっぺんにむくりと起き上がった。庸はすぐに自分とルミナの身体との間に手を滑り込ませて生乳を揉みしだいた。

「あん、庸くんっ……」

「おれ、胸ばかりさわっちゃうから」

「ベッドオ……」

ルミナが身をよじってブースから出ようとする。庸は跪いて、乳房に顔をうずめた。背中に腕を回して、乳房に顔を押しつける。押しつけながら口を開いて、濡れた乳房を頬張る。

「あん、庸くんっ……ベッドオ……」

ルミナが半身をよじって、片足をシャワールームの外に出した。それでもコリコリの乳首を口で弾きながら、顔をIカップの爆乳に押しつける。

「あはん、やん、ベッドオ……」

ルミナの身体がビクンとふるえた。庸は発作的に思った。

（ここでしたい……！）

1

エージェントAは、無数の貯水倉庫の間に腰掛けて、ずっと待っていた。援軍が到着するまであと三十分。それまでにルミナが濁川とセックスしてくれば、すべては片づく。

デモニア救星団第〇八一基地の実質的司令官ベルゼリアは、必ず空から襲ってくるはずだ。きっと空と地上の二面作戦で来るつもりだろう。何らかの手段でマンションに押し入って、エレベーターか階段を使って八階に到達。濁川庸を奪うつもりに違いない。

そうはさせない、とエージェントAは思った。本国のやっていることは他国の権利の侵犯だ。たとえ自国のため——母星のためとはいえ、他国に勝手に踏み入って勝手に基地をつくるなど、あってはならないことだ。ならぬものはならぬのである。

(もっと基地を潰さなければいけない)

とエージェントAは思った。そのためにも、濁川庸を守り抜かねば——。

2

真王寺詩鶴は、ブルーゴージャスに変身して庸の寢室の扉の前に戻ったところだった。扉の前にはすでに先客がいた。

ピンクボリスに変身した秋元理奈である。理奈はスマートフォンを覗き込んでいた。

「ローズは？」

詩鶴が尋ねると、黙ってスマートフォンを向けた。ちょうどルミナがシャワールームから出てきたばかりの映像が映っていた。こっそりカメラを仕掛けていたらしい。ルミナはブラジャーみたいに結び合わされたカーテンを戻すと、部屋の電気を消した。初めてのセックスを行おうとい

うのに、冷静だ。一つだけ部屋の電気が点いていれば、怪しまれて居場所を突き止められてしまうかもしれない。

庸が、ルミナに遅れてシャワールームから姿を見せた。バスタオルを腰に巻いている。庸が部屋を横断して、一瞬、電気が点灯した。すぐに電気が消える。きっとルミナが消灯させたのだろう。

いよいよだ。

ルミナは大詰めを、本番を迎えようとしているのだ。ルミナが処女を捧げた瞬間——すなわち、濁川庸がルミナの処女を貫いた瞬間——庸はボールシフトが不可能となり、永遠に自分たちセイント・エージェントのものとなる。自分たちが待ち望んだ時がやってくるのだ。

昨日までは、濁川庸のせいで負けつづける人生になっていた。少し前までは善戦していたのだが、濁川のせいで連敗がつづいていた。だが、今日からは、濁川のおかげで連勝の時代が始まることになる。

(聖さん、がんばって……)

3

白井京一郎は、ずっとマンションの窓から外を見張っていた。相変わらずライダースーツの女はバイクに腰掛けている。デモニア救星団も、人間の世界で生活している以上、バイクを保持しているらしい。

(やはり仲間を待っているな)

どうやって攻めてくるつもりだろうと京一郎は思った。エージェントAは、敵の首領は空を飛べると話していた。

いきなり空から攻めてくる？

だが、飛べるのは一人しかない。一人では、太刀打ちはできない。

上から特殊部隊よろしく下りてくる？

それはありうる。でも、そのためにすでにエージェントAが屋上で見張りにつけてくれている。

(さて、どう攻めてくる？ やはり地上と空の二面作戦か？)

ふいにバイクの音が聞こえたような気がした。

いや、気がしたではない。音は近づいていた。排気量の小さなバイクではないようだ。恐らく、排気量の大きなバイクだ。

(来た！)

深夜三時近くの夜の街に、バイクの音はよく響く。

(さあ、来い。姿が見えたら、おれが知らせて出端を挫いてやる。もう二度と失敗はしないぞ)

意気込んだところで、ふいにバイクの音は消えてしまった。

(え？)

京一郎は肩すかしを食らった。てっきりデモニア救星団の連中がバイクで駆けつけるものと思っていたのだ。

だが——バイクの音は消えてしまった。

(なぜ？ 今のは違ってたのか？)

自分の早とちりだったのかもしれない。思わず、京一郎は自嘲を浮かべた。

(フン。神経が高ぶって——)

バイクの女が、ふいに右の方へ顔を向けた。バイクを置いて走る。京一郎の視界から女は消えた。その瞬間、

(仲間と落ち合ったんだ！)

京一郎は直感した。

自分の早とちりではない。きっとデモニア救星団の連中は、見張られているのを知って少し離れた場所にバイクを止めて、京一郎たちの死角を通して駆けつけたのだろう。

それで、仲間を見て——あるいは仲間と呼ばれて——女戦闘員がバイクから離れた。

(来るぞ！)

京一郎は思わずインカムに叫んだ。

「戦闘員が仲間と落ち合った！ 攻撃してくるぞ！」

ベルゼリアは高さ十メートルの低空で八階建てのビルに近づいていた。翼の音を立てないように大きく翼を広げて

夜の街を滑空していく。ビルの死角を使って、八階建てのビルの屋上から見えないコースを飛行していく。

セイント・エージェントたちが馬鹿でなければ、ビルの屋上に見張りを置いておくはずだ。見張りには、自分が上からやってくると思想しているだろう。

目的のビルが迫ってきた。ベルゼリアは三〇メートル手前で五階建てのビルの屋上に着地して、双眼鏡を出した。翼を畳み、ビルの角からこっそり顔だけ出して、八階建てのビルに双眼鏡を向ける。

クラリツサの話では、八階に入り口があるという。玄関に入って真ん中に廊下があり、左右六つの部屋に分かれている。左手前にあるのは、祭壇の部屋。祭壇の部屋は通りに面している。

（連中が馬鹿でなければ、大きな通り側の部屋にはβを入れぬはず。βを匿うとすれば、通りとは反対側）

図面では、右手にあるのはリビングと二つの寝室だった。リビングは玄関に近いので、恐らく真ん中の部屋か、奥の部屋だろう。真ん中の部屋はひときわ大きくて、プールが設置されているとのことだった。

（濁川庸は、連中にとっても大きなお客だ。みすばらしい部屋には閉じ込めぬはず。そもそも、狭い部屋では我らが押し入った時、防戦するのに不利になる。連中は飛び道具を持っているからな）

ならば、広い部屋——真ん中の部屋か。

部屋の窓は、すべてカーテンで遮られていた。そしてすべて明かりは消えていた。同じ条件にしてわかりづらくしているのだ。

（真ん中の部屋か？ それとも奥か？）

一瞬、迷った。可能性としては両方ある。ベルゼリアの勘では真ん中だが――。

ふいに真ん中の部屋の電気が点いた。すぐに消灯する。

（誰か真ん中にいる……！）

いるのはエージェントたち？ それとも、庸？

この時間だ。庸は寝ている可能性が高い。

だが、それなら、なぜ明かりが点いてまた消えたのだ？

京一郎は、玄関の外で一人待ち構えていた。敵が来るとしたら、ここに間違いない。

だが、エレベーターの表示ボタンは一向に変化がない。エレベーターが上がってくればモーター音もするはずだし、階数表示のランプも変化するはずだが、エレベーターは八階のままである。

（おれ、間違えたのか？ 来ると思ったのはおれの早とちりだったのか？）

一瞬、京一郎は思った。

（だとしたら、おれ、聖のセックスの邪魔をしてしまったかもしれない。緊急解除をしてもらった方が――）

7

京一郎は間違っではいなかった。早とちりでもなかった。ただ、エレベーターを使ってやってくるという予想が違っていたのだ。

八階建てのビルの壁面を、重力をものともせずに駆け上がってくる女がいた。女は、しかも女を一人おんぶしていた。

暗黒騎士は、必ず特殊な技や能力を持っている。アイゼナハなら電撃の鞭。インフィニアなら、高速の疾走能力。背負われているのはアイゼナハ、背負って駆け上がっているのは、ゾシアだった。ゾシアの特殊能力は、垂直な壁を走って登れることだったのだ。

「アイゼナハ、用意はいいかい？」

ゾシアの言葉に、

「いつでもOK。タイミングを教えて」

とアイゼナハは鞭を手にした。

（絶対に庸を助けてみせる。みんなで奪い返してみせる）
「行け！」

ゾシアの言葉に、アイゼナハは電撃の鞭を窓ガラスに向かって放った。びしっと鞭がガラスを打つ。その直後、ガラスが粉々になって真下に崩れ落ちた。

ゾシアが、部屋に飛び込んだ。アイゼナハも、おんぶから解放されて、部屋の中に着地した。ゾシアの左手に陣取る。

アイゼナハのすぐ後ろで力強い翼の音がした。

着地したのは、ベルゼリアだった。腕にはインフィニアを抱き抱えている。一旦地上に降下して、見事インフィニアを連れて舞い戻ったのだ。作戦通り、四人が勢ぞろいしたのである。ベルゼリアが考えた、β奪還作戦の始まりだった。

アイゼナハはすばやく部屋に目をやった。

自分と一番近くにいるのは、正面のブルーゴージャスだった。ブルーゴージャスの右横には広いプールがある。そしてブルーゴージャスの後ろ側には、ピンクボリスがいた。ピンクボリスの右斜め後ろにはベッドがあって、そのベッドにローズスコラと、バスタオルを巻いた庸がいた。

(庸……！)

すぐにも助けに行きたくなる。でも、助けるのは自分ではない。自分たちだ。五人が皆それぞれの任務を果たして、初めて庸を救い出せるのだ。それがベルゼリアの敵命だ。

(わたしはわたしの任務を果たすだけ。インフィニアもゾシアも、それぞれの任務を果たすだけ。その先に庸の奪還がある……！)

「デモニア！」

ブルーゴージャスこと詩鶴が叫んで弓に矢を番える。即座にアイゼナハは鞭を振るった。狙うはもちろん——身体の左側。

中心を狙わないのか？

まさか。

躲させるのが目的なのだ。案の定、詩鶴は右側へ——プールとは反対側へよけた。さらに鞭を詩鶴の身体の左側から振るう。

「ブルー、射て！ プールに近づかせないで！」

ピンクボリスがアイゼナハの狙いに気づいて叫んだ。拳銃を向ける。その瞬間、インフィニアが走り出した。プー

ルの横を抜けて庸の救出へ向かう。ピンクの拳銃がインフィニアに向いた。

今のピンクボリスなら、インフィニアを倒せる。きっと命中させられるだろう。だが、そのための準備はしてきたのだ。

インフィニアが、走りながら拘束ボールを投げた。ピンクボリスの左半身を狙う。思わずピンクボリスは右のソファ側へ――すなわち庸のいるベッドとは反対の方向へ逃れた。そしてその時を、ゾシアが待っていたのだ。

ゾシアは壁に駆け昇った。壁に対して垂直に立ったまま、猛然と庸へ向かってダッシュしたのだ。



詩鶴は呆気にとられた。ゾシアと対戦したのは、それほど多くはない。よく樹上から攻撃を仕掛けてきたが、木登りが得意か身軽だとはか考えていなかった。木登りの瞬間を見たことがなかったのだ。

（嘘……！）

詩鶴は言葉を失った。まさか、壁の側面を地上と同じように走れようとは――。

一瞬、注意が消える。注意が戻ると同時に、納得がやってきた。

いきなりアイゼナハの鞭が窓ガラスを粉々にした時、詩鶴たちにとっては寝耳に水だった。デモニア救星団が攻撃してくることは、京一郎から聞いていたが、きつと空か玄関の方からだと思い込んでいたのだ。

なぜ？

なぜ窓から？

空飛ぶやつが連れてきたの？

あの時感じた謎が、今解けていた。紫色のロングヘアの女――ゾシア――が、アイゼナハを背負って地上のように歩き、八階まで辿り着いてアイゼナハに攻撃させたのだ。

アイゼナハの鞭が唸った。気づいた時には躲す時間は残されていなかった。

詩鶴は弓を前に出して鞭を受け止めた。身体が猛烈に痺れて崩れそうになる。視界の隅で、ゾシアがベッドに迫るのが見えた。

「ローズ……！」

すでにルミナは動き出していた。ゾシアへ向けてハンドランチャーを構える。装填しているのは無重力弾。今の自分なら外さずに撃てる。庸くんにチャージしてもらった力はまだ残っている。

（今だ……！）

引き金を引いた途端、目の前に変な影が覆いかぶさった。うげえっという低い声がつづいた。

（何!? 何!? 何!?）

混乱の中、大きな肌色の塊が宙に浮かび上がった。ルミナは思わず声を上げそうになった。

無重力弾を食らって宙に浮かび上がったのは、庸だったのだ。庸がハンドランチャーの前に飛び出し、ゾシアへの一撃を防いだのだ。そして浮き上がった庸の近くにはゾシアが――。

「させるか！」

理奈がコルトパイソンを向けた。その理奈に――。

「ピンク、横！」

10

理奈はルミナが無重力弾を庸に撃ち込み、庸が浮かび上がるのを見ていた。その庸にゾシアが迫るのも――。

「させるか！」

叫んだ時には、もうコルトパイソンを向けていた。

「ピンク、横！」

黒い影が右の視野に入った。その時には、もう反射的にソファの後ろへと飛びのいていた。自分がいなくなった空間に、インフィニアの蹴りが飛んだ。

ぎりぎりだった。詩鶴が注意してくれていなければ、もろに蹴りを食らって崩れ落ちていたところだった。

でも、躲した代わりに庸からは遠のいてしまった。ゾシアはもう庸のすぐそばに来ている。

（庸クンを奪われてたまるか！）

コルトパイソンを向け直したその時、視界の真ん中に、妙な黒い影が見えた。その影は人間とは思えない軌道を――人間が移動する高さを遙かに超えて、天井近くを高速で移動した。

その者は、翼を伸ばしていた。インフィニアを連れてきた敵の首領――ベルゼリアだった。

（奪わせるか！）

理奈はコルトパイソンの引き金を引いた。ドリーム弾はベルゼリアのすぐ横を抜けた。ベルゼリアは庸のそばを通過して身体を反転させ、窓ガラスとは反対側の壁に垂直に両足を着いた。それからまたばさつと翼を羽ばたかせて、再び窓ガラスへ向かった。その軌道の先に――庸がいた。

（それが狙い……！）

理奈はつづけてコルトパイソンの引き金を引いた。

タン、タンと鈍い音が走る。ベルゼリアは身体を九〇度に傾け、ドリーム弾を躲した。そして庸を両腕につかんだ。

一瞬だった。飛行速度はまったく落ちなかった。ベルゼリアは空中で庸をかつさらって、そのまま窓の向こうへ消えたのである。

「庸くん!!」

ルミナの悲痛な叫び声に、

「庸くん！」

理奈自身の叫び声が重なった。インフィニアが拘束ボールを詩鶴に、理奈に投げつける。身体が勝手にしやがみ、理奈は拘束ボールを躲した。庸に胸を揉んでもらった効果はまだつづいている。

だが、躲している間にアイゼナハはゾシアの背中に乗っていた。ゾシアが外へ躍りだす。

「逃がすな！」

理奈の声を背中に受けて、インフィニアが宙へ向かって、まるで飛び込みをするみたいにダイブした。

（え!? 死ぬつもり!?）

反射的に窓ガラスへ駆け寄る。詩鶴も駆け寄る。

理奈と詩鶴が見たのは、落下途中のインフィニアを捕まえる有翼の化け物――ベルゼリアだった。

（なんでこいつら、こんなにチームワークいいんだよ!）

理奈が胸の中で叫ぶ中、詩鶴が弓矢を構えた。理奈もコルトパイソンを向けた。ふいに視界の隅に黒い点が見えた。意識が把握する前に、理奈の身体がよけていた。

猛スピードで飛んできた拘束ボールが、理奈と詩鶴のす

ぐ身体の脇をかすめて壁に激突した。

(誰……!?)

ボールを投げたのは、三十メートルほど離れたビルの屋上に立っている、水色のミディアムヘアの美女だった。

理奈も、何度か対戦して覚えている。ボール投げがめちゃめちゃ上手で、何度も手を焼いた女——ゼルシアだった。

「どうした!」

京一郎が遅れて部屋に飛び込んできた。つづいてエージェントAも飛び込んできた。

バイクのエンジン音が八階まで上がってきた。

(庸クンを連れていこうとしてる!)

理奈は走り出した。

「デモニアに庸クンを取られた! 外へ!」

廊下を走り、玄関を抜け、エレベーターに飛び込む。ルミナも詩鶴も飛び込んできた。

「エレベーターよりも屋上からジャンプして追いかける方が早い!」

京一郎が追いかけてきた。理奈は慌ててエレベーターの前から、屋上への通路へ向かった。階段を上がり、金属の扉を開いて屋上に出る。もうバイクのエンジン音がいくつも鳴り響いていた。

(庸クンが……!!)

理奈は音を頼りに走りだした。屋上の縁まで走って、ジャンプする。

風が頬を流れた。

眼下に広がるは、街灯に照らされた冷たいアスファルト——。

一気に通りを超えて、隣のビルに着地する。着地音が遅れて三つつづいた。ルミナも詩鶴も京一郎も、みんなついてきている。

バイクのエンジン音は遠ざかっていた。

「絶対基地へ向かうはずだ!」

京一郎の言葉に、さらに四つ五つとビルを飛び越えた。それから地上に下りて猛然と走る。いくら戦闘スーツのせ

いで速く走れるとはいえ、バイクに敵うわけがない。バイクのエンジン音はどんどん遠ざかっていく。

「あきらめないで！ 基地に行けば何とかあります！」

詩鶴が励ます。

十字路を曲がって少し小さめの通りに入り、乳雲寺に着いた。フェンスを超えて、自分たちが破壊したデモニア基地に向かう。

もうエンジン音は聞こえない。だが、バイクのガスの匂いが漂っている。やはり連中はここに逃げてきたのだ。

理奈たちは窪地のそばに到着した。バイクの姿はない。

「見ろ、タイヤの痕だ！」

京一郎の指摘に、理奈たち三人は駆け寄った。無数のタイヤ痕が、一点に向かっていく。硬い金属の上。何かがここに突き出していてバイクが来るのを待っていた！

「ローズ、無重力弾！」

ルミナがハンドランチャーを構えた。二発、三発、連続で撃ち込む。

反応はなかった。

理奈は無言だった。ルミナも無言だった。詩鶴も、京一郎も無言だった。あまりに苦みの強い、後味の悪い沈黙だった。

理奈にも、他の三人にも、もうわかっていた。自分たちは庸を奪われてしまったのだ。石田三成は三日天下だったが、自分たちは三時間天下だった……。

「庸くん……」

ルミナが膝を着いて、顔を覆った。

泣くな！

そんな言葉は理奈にも言えなかった。言えなくらい重い敗北の重圧が、まるで5G下の世界のように心にのしかかっていた。

もう自分たちの許に庸はいない。庸は、デモニア救星団のものになってしまったのだ。

突然鳴り響いたスマートフォンに、クラリツサは怒りを覚えた。いったい今、何時だと思っているのか。

（こんな時間に掛けてくるなんて、何を考えているの!? 無視——）

クラリツサははっとした。

こんな時間に電話してくる相手に思い至ったのだ。無視から一転して、クラリツサは慌ててスマートフォンをつかんだ。

相手はデモニア救星団——。

（やっぱり!）

クラリツサは慌てて電話に出た。

「夜分すまぬ。だが、わたしはおまえに報告せねばならぬ。おまえには真つ先に報告を受ける権利がある」

とベルゼリアの声がした。

思った通りだった。電話を掛けてきたのは、デモニア救星団の戦闘局長だったのだ。一瞬、緊張する。

失敗したのか。成功したのか。

「 β を確保した。すでに我々が居住区に向かっている。もう二度と β を奪われることはない。札を言うぞ」

「庸は無事なのね?」

とクラリツサは聞き返した。

「おまえがくれた図面が役に立った。我々は奪還に成功した。約束通り、今よりおまえは戦闘員だ。おまえは β 奪還に一番の功を成した。おまえが戦闘員より降格されることはない。改めておまえに札を言うぞ」

電話が切れると、クラリツサは一秒を置いてガッツポーズを決めた。決めてから、さらに喜びが込み上げてきた。

奪還は成功した。

庸は再びデモニア救星団に取り戻されたのだ。そして自分は今から戦闘員——。もうみじめな奉仕局員をつづける必要はないのだ。

でも、それ以上に――。

（庸が戻れてよかった……！）

2

地下深部へと降下していくエレベーターの中で、庸は下半身がバスタオル、上半身がライダージャケットという、世界一ださい姿でアイゼナハと抱き合っていた。

「庸……」

自分を初めて戦闘員に引き上げてくれた彼女が、自分が初めて乳房とパイズリと女の身体を経験した女が、自分を抱き締めて泣いている。

すぐそばには、優しい笑みを浮かべたインフィニアがいた。少し離れて、庸も何度か会ったことのある暗黒騎士のゾシアとゼルシアが、そして基地の実質ナンバーワンのベルゼリアがいる。

アイゼナハが顔を上げた。眼鏡の奥で、目が濡れている。泣いたアイゼナハを見るのは初めてだ。涙を流すのは、地球人もデモニア星人も変わらない。どちらも泣いた女はちよつと弱々しくて、決して美しいわけではないけれど、愛らしい。心から愛しい――特に自分のために泣いてくれた女は――。

「やつとあなたを取り戻せた……」

涙を浮かべたまま、アイゼナハが言った。

「絶対来てくれると思ってた」

と庸は答えた。

エレベーターは順調に降下をつづけていた。このエレベーターは一度乗ったことがある。アイゼナハとインフィニアといっしょにこのエレベーターでデモニア星人の地下居住区に行き、西部劇ごっこを楽しんだ。アイゼナハが警察官、インフィニアがガンマン役で、二人に思い切りエッチした。

（おれ、戻ってきたんだ……）

と庸は実感を新たにした。戻ってきたという感覚が、次から次へと波のように心に押し寄せる。ずっとずっと、こ

こに戻ってくることを望んでいたのだ。わずか十数分前まではセイント・エージェントに囚われていたなんて、信じられない。

庸にとつても、救出劇は予想外だった。いきなりガラス窓が割れて、ゾシアとアイゼナハの姿が見えて。すぐ、インフィニアとベルゼリアが現れて。アイゼナハとインフィニアが動き出して、詩鶴と理奈が二人に攻撃しようとして。ゾシアが壁を走ってきて、ルミナがハンドランチャーを構えて――。

やられると思った。夢中で脇からランチャーの前に飛び込んだ。かなり痛かったが、ゾシアを守れた。そうしたら、ベルゼリアが飛んできて自分を抱いて猛烈な速さで地上へと舞い降りたのだ。

《ここにいろ》

そう言われてベルゼリアが跳び上がって、空から降ってきたインフィニアをキャッチして。アイゼナハをおぶって駆け下りてきたゾシアと合流して。そこへゼルシアも近くのパイルから走ってきて。上半身裸でバスタオルしか身に着けていない庸にインフィニアがライダージャケットを貸してくれて。ゾシアのバイクの後ろに跨がって、真っ先に第〇八一基地へ向かって――。すでに基地にはベルゼリアがいて、遅れてアイゼナハとインフィニアとゼルシアが到着して、そしてこのエレベーターに乗り込んだのだ。

(おれ、本当に戻ってきたんだ……)

アイゼナハの身体のぬくもりに、乳房の弾力に、庸は思った。

基地は壊れてしまった？

それは凄くショックだった。基地に戻ってきた時、呆然とした。理奈たちはもうちょっとだったと話していたが、嘘だったのだ。

「どうしたの？」

アイゼナハが濡れた目で覗き込んでいた。

「基地――」

「気にしないで。あなたがいなかったら、基地が戻っても仕方がない。基地はすぐ再建できるわ。でも、再建して

も、あなたがいなければ意味がない」

「おまえ、乳揉み係として強力すぎるからな。またぶっ壊されちまう」

とインフィニアが笑う。庸を励まそうとしてくれているのだ。

庸はインフィニアに顔を向けた。赤い情熱的な瞳に、赤毛のショートヘア。そして角――。龍の模様を描いた黒いライダースーツがHカップボディを包み込んでいる。異形の姿なのに、同朋の感覚、仲間の感覚がする。

アイゼナハが庸から離れた。入れ代わりにインフィニアは庸を抱き締めた。むっちりしたHカップのバストがたわむ。

「やつとおまえを取り戻せたぞ」

と耳元で囁く。

「あとで思い切りパイズリしてやるからな。アイゼナハと二人で、パイズリしまくってやる」

とエッチなことを言ってくる。

(本当に、おれ、戻ってきたんだ)

じいんと感慨が込み上げる。二人の身体を抱擁できるのは、庸がデモニアに戻ってきた証だ。

(三人にも礼を言わなきゃ)

庸は、ゾシアとゼルシアにも顔を向けた。黒いライダースーツに身を包んだ紫色のロングヘアがゾシア、黒いライダースーツを着た水色のミディアムヘアがゼルシアである。二人とも、見事なオッパイだ。

インフィニアが離れた。ゾシアとゼルシアの二人が微笑む。二人とも黒いライダースーツ姿だが、ゾシアにはスケパンの雰囲気がある。ゼルシアは秘書の雰囲気だ。

「礼を言うぞ。よくかばってくれた」

とゾシアがまず庸を抱き締めた。ムチムチのオッパイがライダースーツの下で弾み、庸の身体を押す。

(うわっ……!! この人、オッパイ凄い……!!)

庸は瞬間的に勃起した。さんざんエージェントたちにパイズリされたのに、爆乳を押しつけられるとすぐに反応してしまう。

「お、おれの方こそありがとうございます。ゾシア様の力がなければ――」

「様はいらぬ。おまえはすぐに、我々と同じ身分になるのだ」

とゾシアが遮る。ゾシアは軽く庸の背中を撫でた。ゾシアに背中を撫でられると少し安心する。

やがてゾシアが離れた。すぐにゼルシアが庸を抱き締めた。どう考えても九十五センチオーバーのボリュームが弾ける。

庸はあくまでも戦闘員だ。二人の暗黒騎士は、戦闘員にとっては格上の存在である。簡単に抱擁できる相手ではない。その二人が、自分を抱擁してくれる。

「本当にありがとうございます」

「いいのよ。あなたは第〇八一基地の宝だわ」

とゼルシアが答える。うれしい言葉である。セイント・エージェントでは聞けなかった言葉だ。エージェントでは女には不自由しなかったが、宝だなんて言葉は掛けてもらえなかった。

ベルゼリアが近づき、ゼルシアが離れた。庸は、有翼の女司令官に向き直った。足元まで垂れる裾の長い真紅のパーティードレスがエージェントAと同じほどの超乳を包み込んでいる。ボタン一つで合わさった胸元は、今にもはちきれそうだ。バストは半分以上露出してこぼれそうになっている。

相手は格上中の格上だ。庸にとっては天の人である。

「すみません、基地をぼろぼろにしちゃって……」

庸が謝ると、

「詫びる必要はない。ぼろぼろにならなければ、逆におまえは乳揉み係として無能だったことになる。おまえが乳揉み係として非常に優秀だからこそ、こうなったのだ。連中はおまえを失って絶望しているであらう」

と強い声でベルゼリアは答えた。それから微笑みかけた。

「おまえは戦士としても優秀だな。おまえがローズスコラの邪魔をしなれば、ゾシアはやられていた。ゾシアがや

られていれば、戦況は変わっていた。おまえを助け出せなかったかもしれぬ。おまえを救った最大の功労者は、おまえ自身だ」

そう言ってから、ベルゼリアは意外に人懐っこい笑みを見せ、庸を抱き締めた。エージェントAと同じポリュームの超乳が凄い勢いで庸の身体を圧迫する。

（うわっ……！ 凄……！ エージェントAと同じだ！
めっちゃバイズリしたい……！）

「よく戻ってきたぞ。おまえは我が基地の至宝だ。これからも頼むぞ」

ベルゼリアに頼まれて、庸はうなずいた。元からそのつもりだった。自分が心をうずめる場所は、ここしかない。

「居住区に着いたら、まずおまえをボールシフトする。その後で、約束通り暗黒騎士に昇格させる」

「え？」

庸は思わず聞き返した。

昇格？

暗黒騎士？

今日？ 今日やるの？

動転する庸に、ベルゼリアは告げた。

「暗黒騎士は、一つだけ特殊な能力を使える。インフィニアなら速さを。アイゼナハなら、鞭に電撃を。何がいいか考えておけ。あまり時間はないぞ」

3

イギリスのイングランドやウェールズには運河が張りめぐらされており、川幅七フィート——すなわち二メートル十センチ幅の運河を航行するため、一メートル八十センチほどの幅の狭いボート、ナロウボートが今でも運河を走っている。

庸がエレベーターを下りて乗ったのが、そのナロウボートに似た船だった。といっても、幅は三メートル以上ある。運河が広いのだ。

庸が乗ったボートは、最後尾に広いバスタブがあつて、

その手前に広いベッドがあるという代物だった。騎士昇格の儀式を行う場までは、この船で行くのだという。

「バイクで身体が冷えたでしょ？ お風呂に入りましよ」

とアイゼナハに誘われて、庸はボートの一番奥にある白い大きな円形のバスタブに入った。上半身はライダージャケットを羽織っていたから大丈夫だったが、下半身はバスタオル。正直、下半身は冷えていた。

（あったかい……！）

お風呂に浸かると、庸は思わず頬を緩ませた。入浴は日本人の魂の行為である。温かいお風呂に入ると、心と身体が緩み、解放感を覚える。

（ああ……ほんと、おれ、ここに帰って来たんだ……）

そう実感する。もう夜中の三時近くなのに、一向に眠くならない。いろんなことがありすぎて、神経が高ぶっているのだ。

これから、自分はボールシフトすることになる。セイント・エージェントの味方からデモニアの味方に戻るのだ。

ボールシフトにはパイズリが伴う。エージェントたちも、庸を三連続でパイズリしてボールシフトしていた。きっとデモニアでもそうなるだろう。

（やっぱり、アイゼナハがするのかな……。きっとそうだよな……）

と思いを巡らす。

（その後の騎士昇格の儀式って、何をするんだろ……。やっぱりパイズリ……なわけないよな）

正直、自分はナイトって柄じゃないよなと思う。将棋の駒でいえば、ただの「歩」。香車にすらなっていない。でも、その自分が暗黒騎士――。

バスルームの扉が開いて、バスタオル姿のアイゼナハが姿を見せた。後ろには、同じくバスタオルを巻いたインフィニアがいる。

（え？ まさか、二人でやるの？）

先にアイゼナハがバスタブに入ってきた。庸の身体の前から近づく。次にインフィニアが入って、庸の後ろから近づいてきた。

アイゼナハは、入浴のためにロングヘアをアップにまてていた。首筋が見えて、普段よりもっとりと大人っぽさが漂っている。大人の女の色香は、首元に出るのである。

「もしかして、二人が温めてくれるの？」

庸は聞いてみた。アイゼナハが微笑む。

「バスタオル、取りたくない？」

思った通りのお誘いだった。

「二つあるぞ」

とインフィニアが後ろから乳房を押しつけてきた。

（うはっ！）

「誰から取るの？」

とアイゼナハが迫った。もう庸のペニスはギンギンである。

（取るならやつぱり――）

庸はアイゼナハのバスタオルを剥いだ。ぶりんぶりんのよく突ったオッパイが姿を見せた。サイズは九十三センチのGカップだが、一つ上のカップサイズではないかと思えるほど、乳房が高く隆起している。見るからにビチビチの、若々しいオッパイである。バストも先端へ向かって尖っているが、先端にあるはずの乳首はなかった。陥没乳首である。

庸はすぐに両手の人差し指を陥没乳首に突き刺した。

「あん、もうっ♪」

とゾクゾクツとアイゼナハが身体をふるわせる。アイゼナハの一番のスーイトスポットだ。きつと庸に陥没乳首を觸られたかったに違いない。

「わたしは脱がさないのか？」

庸は後ろを振り返った。途端にアイゼナハが背中に乳房を押しつけてきた。ビチビチの弾力オッパイをむっちりと背中にこすりつけながら、庸のペニスを細い指で軽くしごく。

（うあっ……！）

早くもイキそうになる。

「インフィニアのオッパイを脱がせてくて、こんなに硬く

なってるの？」

とアイゼナハがわざと言葉で責める。

「そ」

と嘘をついて、庸はインフィニアのバスタオルに手を掛けた。何度見ているオッパイでも、脱がす瞬間は興奮する。乳房が遮られている状態から露出の状態へと変わる瞬間は、何度味わっても興奮する。

庸は一気にバスタオルを引き下ろした。バストの底面積が広く、形よく張りつめた九十六センチHカップの豊球がブルンと躍り出た。

（やっぱりおっきい……！）

庸は背中のアイゼナハに見せつけるように、インフィニアのオッパイを揉みしだいた。両手で円を描くようにこねまわしていく。乳房が底面積を増しながらむっちりとしやがて鏡餅のように変形し、庸の両手を押し返す。

（気持ちいい……）

さらにペニスを勃起させると、インフィニアが甘い吐息を洩らした。

「パイズリで戻してやる。わたしからしてやるぞ」

インフィニアの言葉に、

「わたしよ」

とアイゼナハが自己主張する。本来ならアイゼナハのオッパイにしゃぶりつくべきなのだろうが、庸はわざとインフィニアのオッパイにしゃぶりついた。インフィニアの背中を腕で捕まえて、顔をオッパイに押しつける。押しつけながらちゅーちゅーと乳首を吸い立てる。

「あん、こら♪ そんなにわたしのオッパイをしゃぶりたかったのか？」

と優しい声でインフィニアが言う。

「邪魔しちゃうんだから」

とアイゼナハが庸のペニスをしごいてきた。大人の色気たっぷりの細い指でしなやかにしごかれて、ペニスがとろけそうになる。

「んあっ……！」

庸は思わず呻いた。アイゼナハの手コキが気持ちよく

「もう感じてるのか？」

とからかいながら、インフィニアが背中からHカップ乳をこすりつける。

（オッパイ気持ちいい……）

うっとりとしたところで、インフィニアの指が庸の両方の乳首を指先で弾いてきた。あくまでも優しくソフトタッチで、敏感な乳首を颯々とする。

（やばい、乳首いじられたら、余計に感じちゃう……）

「あつ、オチンチン今元気になった……庸スケベよ」

アイゼナハが淫蕩の笑みを浮かべながら、さらにバストをパウンドさせる。すべすべの弾力オッパイにこすられてペニスに快感の粒子が広がり、とろけそうな快感が浸潤してきた。かなりやばい。アイゼナハには、どれだけの圧力でペニスを挟んでどんなスピードで揺さぶれば庸がイクのか、わかっているのだ。

射精の前兆的な快感が迫って、庸は思わず右に左に腰を振った。

「逃げちゃだめ♪ 逃げると、こうしちゃうんだから♪」

と色っぽい声でいじめながら、アイゼナハがさらに乳房を揺さぶった。左右の乳房を互い違いにこすり上げて、凄じ速さでペニスを摩擦する。とろけそうな乳圧ととろけそうなバズリスピードとに庸は呻いた。

「ああっ、アイゼナハ、それ、だめえ……」

「何がだめ？ オチンチン、イキそうなの？」

とアイゼナハがさらにエッチなバズリストロークを加速させる。右の乳房がずり上がると同時に左の乳房がずり下がり、右の乳房がずり下がると同時に左の乳房がずり上がり、左右互い違いの動きで最大限にペニスをいやらしく摩擦してくる。それだけでももうイキそうなのに、後ろからはインフィニアが気持ちのいいオッパイを押しつけて庸の性感を高め、さらに両方の乳首を執拗に指先で颯々立てる。

「インフィニア、乳首、だめって……」

「ここか？」

とインフィニアの指先がさらにねっとり、庸の乳首を爪先で掻き撫でる。爪のフェザータッチで乳首を刺激されて、ペニスが大きくふくらんだ。庸はまた腰をくねらせた。乳首を颯られる快感とペニスを挟まれる快感とに、爆発の時間が近づいていく。

「ほら、腰をクネクネしないの♪ まだイッちゃだめよ♪」

とさらにアイゼナハがパイズリストロークを加速させた。すべすべのGカップが、これでもかとはかりにペニスを摩擦し、玩弄する。

（無理……！ もうイク……！）

我慢の限界だった。庸は右に左に腰を躍らせながら、ふいに下半身を痙攣させた。凄い勢いで濁液が噴射する。

「あんっ、庸♪」

アイゼナハが甘い声を上げる。

「ほら、イッた♪ スケベだな、庸は」

とインフィニアが爪先でさらに乳首をくりくりと責め立てる。

「んあっ……！」

「早くイッた罰よ♪ 連続パイズリ♪」

とアイゼナハは両手でバストを押しつけると、勢いよく身体を弾ませた。たぶたぶとお湯が波打ち、バスタブから洩れる。乳房がバウンドしてペニスをこする。瑞々しいGカップ乳がピチピチの肌をこすりつけて、これでもかとはかりにペニスを摩擦しまくる。

「アイゼナハ、だめえ……！」

イキそうになったところで、アイゼナハがびたつとパイズリを止めていた。イキたかったのに、イキそうだったのに、寸止めされて庸はたまらず腰を押しつけた。でも、アイゼナハはパイズリしてくれない。

「今度はわたしにしてやるぞ。こっちを向け」

アイゼナハが離れ、庸は後ろを向いた。インフィニアがすぐにバストでペニスを挟み込んできた。高く紡錘形に突出したムチムチの乳弾が、ペニスに密着する。龟头に口を近づけて、ぴちゃぴちゃと舐めはじめた。

「あぁっ、それだめえ……」

「これか？」

と啞えたまま尋ねて、さらにインフィニアが舌先をふるわせる。びちゃびちゃと亀頭を叩かれて、庸は呻いた。

「それとも、こっちの方か？」

とインフィニアがHカップ乳をゆさゆさと弾ませた。逃げられないようにペニスをぎゅうつと双球で挟み込んで、ムチムチの褐色乳でペニスをしごいてくる。きめ細かな質感と気持ちいい弾力とに摩擦されて、庸は立っていられなくなつてインフィニアの肩をつかんだ。もうやばい。イキそうになつてゐる。

「今度はわたしを手伝つてあげる」

アイゼナハが移動して庸の乳首にしゃぶりついてきた。指で責められて敏感になつた庸の乳首を、アイゼナハの舌がびちゃびちゃとしやぶり立てて性感を掻き立てる。同時にインフィニアの舌が亀頭をしゃぶつて性感を倍加させる。そしてペニスは、インフィニアの褐色乳に挟み抜かれている――。

「まだ出すなよ♪ 出したら、もうパイズリしてやんないぞ♪」

と言葉でいじめながら、インフィニアがさらにパイズリストロークを加速させる。乳房の揺れが激しくなつた。褐色のバストが何度もペニスにこすりつけられる。射精を我慢しようとしても、乳房がどんどん速く激しく揺れて、気持ちいい乳肌でひっきりなしにペニスをしごいてくるのだ。耐えようとすればするほど、逆にオッパイでペニスをいじめられて気持ちよくなつてしまう。

おまけに乳首をアイゼナハに舐められていた。乳首を舌で舐められると、身体がゾクゾクしてチンポも気持ちよくなつてしまう。その上、亀頭もひっきりなしにインフィニアの舌で弾かれていた。一定のリズムでびちゃびちゃと敏感な亀頭を舌で舐られるたびに、腰がひくついてしまう。なんとかパイズリをこらえようとしても、亀頭を責められて腰が砕けそうになつてしまう。

「もう出る……」

「我慢ひろ♪」

無茶なことを言いながら、インフィニアはさらに舌まで加速させて亀頭をしゃぶってきた。乳房が揺れまくり、舌が亀頭の上を這いずり回るむずむずした快感が爆発した。
(もう無理い……！)

庸は首を横に振った。腰が勝手に右に左に揺れ、ついに庸はインフィニアに射精していた。インフィニアが亀頭を咥え込む。精液は美しい鬼娘の口腔に呑み込まれた。ゴクン、ゴクンと嚥下の音がつづいていく。食られる快感に、庸はまた腰をふるわせてインフィニアの口に射精する。

インフィニアの舌がびちゃびちゃと亀頭を叩き、庸の腰が躍った。腰がふるえて、立ってられないほど気持ちいい。おまけに、もうイッたというのにアイゼナハは庸の乳首を執拗に舐めている。乳首の快感とペニスの快感とが重なり合って、庸は身をよじった。

「アイゼナハア……！」

「なあに？ 気持ちいいの？」

わかつているくせに、アイゼナハが乳首を舐めまくる。ゾクゾクと快感が走り、庸はビクツと腰をふるわせた。ひたすら乳首をしゃぶられて、また射精してしまったのだ。

ようやくアイゼナハが顔を上げ、インフィニアも口を開いた。

「濃くて美味しかったぞ♪」

とインフィニアが微笑む。

「少しお風呂に浸かりなさい」

アイゼナハに言われて、庸はバスタブに浸かった。アイゼナハとインフィニアが二人、庸の脚の方に陣取る。庸から見てアイゼナハが左、インフィニアが右である。二人は庸の脚を開いて割って入った。

二人が正座して、太腿の上に庸の腰を載せた。庸の腰が浮き上がり、ペニスが温水から出る。

アイゼナハとインフィニアは身体を寄せ合い、乳房の側面を押しつけてペニスを挟み込んできた。アイゼナハが左側の乳房の左側を、インフィニアが右側の乳房の右側を――つまり、並び合った二人がそれぞれ隣接する側の乳

房を押つけて乳房をしごいてきたのだ。

ダブルパイズリ——男のロマンである。

二人が目に合わせて、体動を始めた。息を合わせてびつたりのタイミングで、アイゼナハは左の乳房の外側の側面で、インフィニアは右側の乳房の外側の側面で、庸のペニスをしごいてくる

庸のペニスの左からはアイゼナハの九十三センチの白い乳房が、右からはインフィニアの九十六センチの褐色の乳房が、容赦なく乳房と弾力とをこすりつける。ムチムチの感触が気持ちいい。

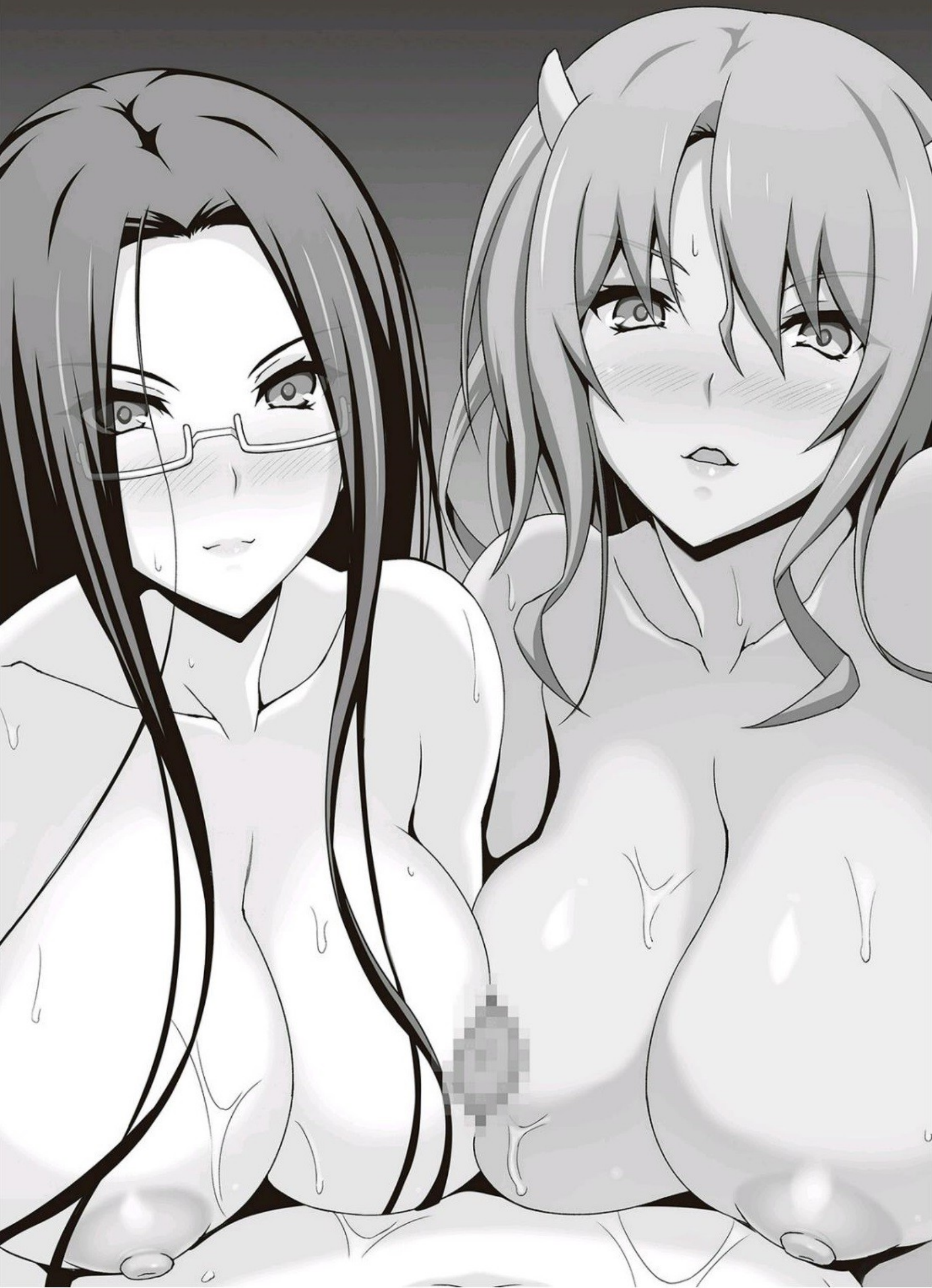
早くも、じいんと快感の粒子がペニスに充滿した。二連続でパイズリされて、もうペニスはすっかり感じやすくなってしまう。少しパイズリされるだけでもイキそうになってしまう。一度射精すれば次の射精までは時間が掛かるはずなのだが、気持ちよすぎて逆に射精が次の射精の呼び水になってしまうている。

「庸、イッていいのよ？」

とハアハアと息をつきながらアイゼナハが促した。

「イカないともったこうだぞ♪」

インフィニアの台詞がつづく。二人は、♪ ♪ ♪ ♪ と息びつたりにバストを弾ませてきた。ペニスの両側から、白い乳房と褐色の乳房がペニスを颯り立てる。きめ細やかな肌触りの、色の違う二人の乳房が、何度も何度もペニスに吸着して、両側から摩擦する。



二人のオッパイに責められて、チンポがとけそうになってきた。じいんと広がった快感の粒子が、部分部分、ところどころの快感に変わっていく。と同時に、快感が増大してチンポとオッパイとの境界の感覚が消えていく。やばいと思うのに、それを察して二人がさらにピッチを上げてきた。二人の身体がバスタブで弾み、左からアイゼナハの白い乳房が、右からインフィニアの褐色の乳房が責め立てる。すべすべのオッパイマッサージにペニスがとろとろになった。

(もうだめ……!)

庸はついに呻き声を上げ、二人の乳房の間に射精していた。濁液がアイゼナハの白い乳房とインフィニアの褐色の乳房にほとぼしる。

心地よい射精の瞬間だった。だが、その瞬間——突然、首元が熱くなったのだ。

(え……?)

「ああ……!」

とアイゼナハとインフィニアが同時に声を上げ、インフィニアがつづいて声を洩らした。

「首輪が……」

4

庸はパイズリできる快感に酔いしれながら、アイゼナハはインフィニアと二人息を合わせて身体を揺さぶっていた。バスタブのお湯がちゃぶちゃぶと音を立てて暴れている。庸のペニスがピクピクと蠢く。ペニス全体が硬くふくらんでいく。

男はイキそうになると、チンポが硬くふくらんでくる。その前からすでに勃起しているが、イク前にさらにチンポが硬くなり、ふくらむのだ。

あ。

庸、イクのね。

気持ちいいのね。

これで三度目の射精だ。ポールシフトには連続して三度

の射精が必要だ。

来て。

わたしとインフィニアの許に来て。

次の瞬間、庸は射精していた。熱い濁液が自分とインフィニアのオッパイにほとぼしる。待っていた精液だ。

そして射精の直後、庸の首に金色の光の輪が浮き上がった。セイント・エージェントの奴隷となった、従属の証だった。それがいきなり光を放散し、飛び散ったのだ。同時に庸の中指に嵌まっていた金色の光の指輪も、消えていた。

「首輪が……」

「インフィニア……!」

インフィニアの声に、思わずアイゼナハは呼びかけた。

「散った……!」

「ええ、ボールシフトしたのよ!」

真の意味で、庸をようやく奪還したのである。歓喜に、アイゼナハは庸に抱きついた。インフィニアも庸に抱きつく。

「え? え?」

と庸はとまどっている。

「成功よ! 庸、もうあなたはエージェントの味方じゃないわ! わたしたちの味方よ!」

「本当?」

庸が確かめる。

「本当だぞ。おまえはデモニアの人間になったのだ」

庸がようやく笑顔を浮かべて、二人に抱きついてきた。アイゼナハは、たつぷりと愛しさを込めて乳房を押しつけた。インフィニアも、欲情の目を向けて庸に褐色の乳房をこすりつけている。そのたびに、庸がゾクツと身体をふるわせている。

(これですつと庸といられる……)

とアイゼナハは心をふるわせた。あとは、ルクレツィアに橋渡しをするだけだ。ボールシフトした庸を、次は騎士に叙任するだけである。それでもう、セイント・エージェントたちにボールシフトされることはなくなる。庸は永遠

に、デモニア救星団の味方になるのだ。

（ああ……やっと庸が戻ってきた……やっと庸を取り戻せた……）

うれしくて涙が出そう？

うん。

でも、涙は出ない。ただただ、うれしいのだ。庸が帰ってきたことが——自分たちの許に戻ってきたことが——。

ふいに浴室の扉が開いた。顔を見せたのは、二人の上司ベルゼリアだった。

「もうすぐ着くぞ。βにどんな能力が欲しいか答えを出させる。夜明けまでに片をつけるぞ」

1

真王寺詩鶴は、夜遅くにこっそり屋敷に戻ってきたところだった。部屋に入って、エージェントの変身を解く。

時計は午前四時近くを指していた。もう東の空は明らんでいる。午前二時から四時は人間の反応が一番遅くなる時間帯だが、疲労もたつぷりだった。

一時間前まではそうではなかった。濁川庸を自分たちのものにして、濁川に胸を揉んでもらってチャージして、今までの自分とは別人の活躍を見せて、高揚していた。

だが、あの高揚は何だったのか。収縮後の虚無感を味わうためのものだったのか。

せっかく手に入れた濁川庸を、守りきれなかった。奪って数時間でデモニア救星団に奪還されてしまった。また奪い返そうにも、夜明けは近い。真昼間に戦闘コスチュームを着て暴れ回るわけにはいかない。明日、また皆で作戦を立て直すしかない。

庸は、明日学校に来るだろうか？

わからない。来たとしても、すでに暗黒騎士に叙任されていたら終わりだ。濁川をポールシフトさせることはできない。そしてそうなったら、また敗北の連続が自分を待っているのだ。

(パイズリもしたのに……)

詩鶴はため息をついた。

2

自宅に戻ってベッドに潜り込んだ理奈は、顔まで布団をかぶった。

悔しかった。

せっかくまたセイント・エージェントに戻れたのに。今度は庸クンもいっしょだったのに——。これからずっと正義の味方としていっしょに戦えると思っていたのに——。

庸はデモニア救星団に奪還されてしまった。きっと、庸は暗黒騎士に叙任されてしまうだろう。もう庸が正義の味方になることはあるまい。

つまり、自分と庸とは敵同士――。

ずっと前なら、それでもかまわなかったのかもしれない。庸のことは気にも留めていなかったし、眼中にない存在だった。でも、今は――。

好きな相手が自分の敵。

明日、どんな顔をして学校で会えばいいのだろうか？ なんて言葉をかければいいのか？

それよりも――メールをしても前みたいに返事してくれる？

会いたい。

今度××で会おうよ。

そんなふうにメールしてくれる？

庸クンとは別れたくない。最初は全然好きじゃなかったけど、今は好き。庸クンがエージェント側にいたから、自分はエージェントに復帰したのだ。

（また敵同士……どんな顔をして戦ったらいいいのか、わからないよ……）

3

自宅の二階に戻ってきたルミナは、変身を解いてベッドに転がり込んだ。胸の中は、悲しい虚無感しかなかった。本当に、あともう少しだったのだ。二人ベッドに上がって、たぶん、これからキスをして、庸くんにつばい胸をさわられて、そして初めて庸くんのものを受け入れて、庸くんと結ばれるんだって思っていた。そして庸くんは、永遠に正義の味方になる――。

なのに。

あともう少しのところ、デモニア救星団が来てしまった。庸くんはシャワールームでいたが、拒むべきじゃなかったのだろうか。あの時拒まなかったら、すぐに庸くんは自分の中に入ってきていて、二人結ばれて、

庸くんは永遠に正義の味方になっていたのだろうか。
わからない。

わかつているのは、すぐそばに自分がいながら庸くんを
奪われたということだ。

自分のせい？

きつそう。

でも、まさか庸くんが割って入るなんて思わなかった。

冷静に考えれば、庸くんはずっとデモニア愛を示していた
から、邪魔するのは当たり前だったのに……。

庸くんがハンドランチャーの前に飛び込まなければ、確
実にあの紫色のロングヘアの暗黒騎士を倒せていたと思
う。そうしたら、ベルゼリアって首領に庸くんを奪われる
こともなかった。

(わたしが当てていたら……)

ルミナは涙が出そうになった。

自分が当てられなかったからいけないのだ。

庸くんが邪魔したから？

(でも、庸くんがデモニアを好きだったことはわかってた
じゃない。なのに、どうして……)

これからどうすればいいんだろう、とルミナは思った。

また、庸くんと敵同士になってしまった。

次に戦場で会ったらどうしよう。ハンドランチャーの引

き金を引ける？ 庸くんに重力弾や無重力弾を撃てる？

無理。

だって、庸くんのこと、好きだもん……。

白井京一郎は、自宅のマンションに戻って部屋で変身を
解いたところだった。この戦闘スーツのおかげで、家族が
眠っていても気づかれずに部屋に戻る。

勝利した日や活躍できた日は、なかなか興奮して寝つけ
ないことがある。だが、今日は別の意味で眠れそうにな
かった。

天国から地獄へ。

その言葉がびったりだった。一度は濁川庸を奪還し、全員の女性エージェントをパワーアップさせて、基地の破壊に成功した。

濁川がいれば不可能はない。濁川がいれば我らは無敵。

——だが、いなければ最弱。

自分に落ち度はなかったと思う。しっかり見張っていたし、いち早く敵の襲撃にも気づけた。警告も発した。だが、防げなかった。垂直の壁でも走って上がれる暗黒騎士がいることに気づけなかったのが、最大の敗因だった。有翼のベルゼリアが地上から八階へと急上昇して襲撃したのも、計算外だった。ベルゼリアが来るのはわかっていたが、まさか四人の暗黒騎士を投入するとは思わなかった。デモニア救星団の本気度合いを見抜けなかった時点で、勝負はあったのかもしれない。

濁川を奪われた二十分後に埼玉から応援が駆けつけてくれたのが、余計に悲しかった。あと三十分早ければ、奪還は許していなかったはずだ。

手痛い敗北を味わうと、人はifを考える。もし応援が早く来てくれていたら、守れただろうか？

間違いなく。

もし、自分が庸の寝室にいたら防げただろうか？

恐らく。

アイスフロストを放って庸と暗黒騎士たちの間に氷の壁をつくり、暗黒騎士の奪還を阻止できたに違いない。

デモニア救星団が奪還に来るとわかった時、どうして玄関を出てエレベーターの前で待ってしまったのか。どうしても庸の寝室に向かわなかったのか。ピンクボリスに交替してもらって自分が庸の寝室にいれば、アイスフロストをバリアーにして奪還を阻止できたのに。

シミュレーションが足りなかったのだ。デモニア救星団がどのように奪還に出てくるのか、そのシミュレーションが足りなかったのだ。でも、それもまた仕方なかったのかもしれない。詩鶴とルミナは庸を固定化するための準備に必死で、敵の奪還作戦についてとてもシミュレーションしている場合ではなかった。それでも、もし自分が完璧にシ

ミュレーションをしていれば――せめて、庸の部屋に真っ先に駆けつけていれば、と思わざるをえない。

代償はとてつもなく大きなものになるだろう。デモニア救星団が、何もせずに放置するわけがない。間違いなく、庸を暗黒騎士に叙任するだろう。そして庸が暗黒騎士になった時、庸を取り返してエージェントの味方にする道は閉ざされてしまうのだ。そしてまた、自分たちは連敗を喫することになる。

地下室の床が、赤く輝いていた。床の赤い輝きが、一対ずつ両側に何十本も並んだ高さ四メートルの白い円柱を、そしてアーチ形の天井を、薄赤く染めている。さしずめ伏魔殿というところだ。

庸は船を下りて、儀式の場へと向かっているところだった。庸の前にはベルゼリア、後ろにはアイゼナハとインフィニア、そしてゾシアとゼルシアだけである。

自分が暗黒騎士になる――。

不思議な感覚だった。前もってそのことは言われていたけれど――暗黒騎士に昇格する前にセイント・エージェントに誘拐されて、一時的にエージェントの味方になってしまったのだけれど――やはり、不思議な感覚がする。

自分は地球人。

周りの暗黒騎士は全員デモニア星人。

（おれが暗黒騎士？）

なんだか、変な感じがする。

暗黒騎士になりたくない？

まさか。

デモニア救星団に入った時、上の階級に行きたいと思った。戦闘員になりたいと思った。暗黒騎士になれたら気持ちいいだろうなあとは思ったが、夢にも野望にも入っていなかった。無理だと思って欲望すらしなかったのだ。

でも――。

「おまえが選ぶメンバーも考えておけよ」

ベルゼリアが振り返って言った。

（メンバー？）

「暗黒騎士になれば、自分の隊を持つことになる。隊員はおまえが選ぶことになる。ただ、他の隊から異動させる余裕はない。臨時戦闘員と奉仕局員の中から選べ」

臨時戦闘員――。

その言葉に、真っ先にクラリッサが浮かんだ。自分の隊

に引っ張るなら、まずはクラリツサだ。

あとは、あずみ。

他には——今のところ、思い浮かぶメンバーはいない。

（自分の隊か……）

思ったところで、

（その前に、能力だ）

庸は思考の方向を修正した。

正直、どんな力がいいんだろうと思う。デモニア救星団での自分の出世は、乳揉み係から始まった。

（じゃあ、乳揉み係の力をパワーアップしてみるか？ 戦闘員の胸をさわっても、パワーアップできるとか）

それなら、満遍なくどの戦隊も助かることになる。

（あ、でも、待てよ。それだと巨乳じゃない乳とか、好きじゃない乳も揉まなきゃいけなくなる。やめやめ！）

庸は取り消した。第一、それでは自分は乳揉み係のままではないか。それに、そもそも戦闘時に助けになる力ではない。バックアップ要因としての能力をパワーアップしても、自分が戦闘時に役に立つことにはならない。

自分は暗黒騎士になるのだ。ならば、戦闘時に役に立つ力が欲しい。

（弓矢とか飛び道具は、デモニア救星団はだめだし、正確にボールを投げる力はゼルシア様が持ってるし……）

庸は唸った。

（速く走る力はインフィニア。電撃はアイゼナハ。じゃあ、射精でエージェントを麻痺させられるとか……）

庸は首を横に振った。それではいちいち、ズボンを下ろしてチンポを剥き出しにしなきゃいけない。そんなことをしている間にやられるし、第一、間抜けすぎる。そんなのはギャグ漫画の世界だけにしておきたい。

（エージェントと戦う時に役に立つ力か……）

庸は、初めてルミナと対戦した時のことを思い出した。

あの時、自分は高い木にぶら下がっていた。そこへたまたまルミナがやってきたのだ。ルミナは自分に気づいていなかったのだ。そこで自分は降下し——。

（それだ！ 足音を立てずに忍び寄る力！）

自分がエージェントの後ろに来て、エージェントは気づかない。自分は背後からエージェントを襲撃し、揉みまくって一気に倒す。それなら、みんなの戦力になれる。

（足音さえしなけりやこつちのもの……って、待てよ。姿は見えるじゃん！ 見えたら終わりじゃん！ エージェントのやつら、チームで動いてるから、一人きりにさせないとおれの足音がしなくても……）

だめかあ、と庸は再び唸った。イケると思ったのだが、意外に穴があった。自分の発想力に対してため息が出る。

（いい力なんてないなあ……。二度とボールシフトされない力は暗黒騎士には標準装備だし……）

そう思った途端、何かが頭の片隅で動いた。

（ボールシフト？）

敵の乳揉み係を味方にする方法――。

（それ、おれが手にすればオッケーじゃないのか!? おれがオッパイしゃぶりまくったら、敵の女エージェントが味方になるとか……）

それだ！ それなら、みんなの戦力になる！

理奈を倒した後、エージェントはホワイトグラスを補充した。自分たちがまた倒しても、エージェントは仲間を補充するだろう。そして自分たちは戦闘員も暗黒騎士もあまり増えない……。

（これならいける。みんなのためにもなる）

ふいにベルゼリアが止まった。

「着いたぞ」

天井から取り込まれた光が、ゆるやかないくつもの段丘を流れる碧色の川を浮かび上がらせていた。段々畑のように小さな段丘がいくつも連なっていて、その上を川が流れているのだ。段丘が終わって次の段丘に移るところでは、高さ数十センチほどの低い滝ができています。それがいくつもつづいているのだ。

そして川の段丘の中では、脚に金の装飾を着け、白い

シースルーのパレオを腰に巻いて金のベルトを身に着け、金の腕輪を手首に嵌めて、金色の真珠のネックレスを首に掛けたデモニア星人のナース、ルクレツィアが待っていた。

「ポールシフト、できたみたいね」

とルクレツィアが微笑んだ。いつも見るナース服のルクレツィアとは少し雰囲気違っていた。まるでどこかの姫君か女神官に見える。そして、心なしかいつもよりオッパイが大きくふくらんでいるように見える。

（サイズ、上がった……？）

自分がいない間に？

まさか。

でも、そんなふうに見える。

いつもと違う雰囲気、ルクレツィアと大きなオッパイに、庸はムラツとした。上半期で一番活躍した戦闘員に選ばれてご褒美に旅館に出掛け、ポールでルクレツィアのオッパイにしゃぶりついてオッパイを揉みながらオマンコを犯したことが思い出される。ほんわかつた穏やかな顔だちと凄い爆乳との組み合わせに、ムラムラしてしまうのだ。アイゼナハとインフィニアに三連続でパイズリされたばかりなのに、またしゃぶりつきたくなってしまう。

「先に申し渡しておくぞ。何人たりとも、庸以外この川に入ることはならんぞ。儀式が終わるまで、何人たりとも足を踏み入れてはならぬ」

とベルゼリアが言い放った。暗黒騎士たちがうなずく。

ベルゼリアが庸に顔を向けた。

「βよ。おまえは暗黒騎士として生まれ変わらなければならぬ。服を全部脱げ」

「服を……？」

「異能を授けるのに、服は邪魔だ。服を脱げ」

庸は少し狼狽した。

（みんなの前で……？）

庸は後ろを振り返った。アイゼナハもインフィニアもゾシアもゼルシアも、真面目な視線を向けている。アイゼナハとインフィニアとはすでに裸のお付き合いをしていると

はいえ、他の二人とは肉体関係にない。さすがに肉体関係のない女たちの前でスッポンボンになるのは、羞恥心を覚える。

「全部脱ぐのよ」

とアイゼナハが優しく告げた。どうやら脱ぐしか選択肢はないらしい。庸は羞恥心を振り切って、命令に従った。デニムのストリートパンツも、Tシャツもトランクスも脱いで、アイゼナハに渡す。

（これで何かを待ったら、文字通り、全裸で待機……）

アホなことを考えていると、

「力は決めたか？」

ベルゼリアに聞かれた。全裸の庸はうなずいた。

「では、入れ」

庸は再びうなずいた。

（冷たいのかな？）

用心深く川面に足を着けると、意外に温かった。ぬるめのお風呂と同じだ。

川に入ると、庸は川の中を遡った。段丘を一つ上がる。

さらに川の中を進んでまた一つ段丘を上がる。

後ろを振り向くと、ベルゼリアもアイゼナハもインフィニアもゾシアもゼルシアも、皆ずっと仁王立ちで見ている。

庸はさらに川を遡行し、段丘を上がった。その先の浅瀬にルクレツィアが立っていた。間近で見ても、やはりルクレツィアのオッパイは大きくなっていた。前はIカップぐらいだったと思うのだが、Jカップぐらいまで成長した感じがする。

ずっしりしたボリュームたっぷりのふくらみ――。スカスカのオッパイではなく、よく充滿した、よく実った、豊熟という言葉がぴったりの重量感溢れるふくらみが双つ、胸にぶら下がっている。パイズリしたら相当気持ちよさそうなオッパイだ。

「オッパイ、おっきくなった？」

庸は小声で尋ねた。

「ちよつとね」

とルクレツィアは微笑んで、

「やっぱり出世したね」

と目を細めた。親愛のこもった、優しい目である。

「まだ実感がない」

と庸は苦笑した。

「騎士になる前に実感する人なんかいないよ。みんな、
なっってから実感するんだよ」

とルクレツィアは微笑んだ。そうかもしれない、と庸は
思った。

「今日はわたし、女神なんだよ。行こ」

ルクレツィアが手をさしのべた。庸はルクレツィアの手
をつかんだ。やわらかい手だった。こんなふうに彼女と手
をつなぐのは初めてである。庸は手のやわらかさに驚きな
がら、ルクレツィアと上流へ廻行した。

女神って、自称なのかなと庸は思った。

それとも、リアルで？

普段と違う衣装を着ていたということは、ルクレツィア
が儀式を行うのは間違いない。ただのナースかと思ってい
たら、ただのナースではなかったということか。それと
も、デモニア救星団では、ナースがそういう役割を任せら
れているのか。

不思議な感覚だった。白いシースルーのパレオを巻い
て、金色の腕輪を着けて女神っぽくおしゃれをしたかわい
い爆乳ちゃんに手を引かれて、川の中を歩いている。

(確かに女神みたい)

庸は微笑んだ。儀式に挑もうというのに、緊張はない。

「儀式って、何をするの？」

庸は歩きながら尋ねてみた。

「そのうちわかるよ。気持ちいい儀式だから」
とルクレツィアが答える。

川は右に曲がっていて、先へ進むと庸たちの姿はベルゼ
リアたちから見えなくなった。周りにはツル科の植物が
茂っている。

「これで誰にも見えない♪」

とルクレツィアはいきなり川の中で抱きついてきた。南

国のフルーツみたいに重量感たっぷりにふくらんだ推定Jカップ乳が、むっちりと胴体に吸着し、ひしゃげる。はつきりと弾力が胴体を圧して、庸はゾクッと身体をふるわせた。

「女神の抱擁、気持ちいいでしょ？」

とルクレツィアが少し身体を上下させてわざと乳房をこすりつける。スケベな女神だ。庸はたまらず脇から乳房をさわった。だが、オッパイが庸の身体に密着していて、手を滑り込ませられない。

「ンフフ、オッパイ、好きなんだから♪ そんなことすると、こうしちゃうぞ♪」

ルクレツィアは庸の背中に腕を回して、左右にオッパイを揺さぶった。右に、左に、身体をスライドさせて乳房で庸の肌をくすぐっていく。すべすべの看護婦の肌に、庸はまたゾクゾクと身体をふるわせた。

（オッパイ、さわりたい……!）

「オチンチン、めっちゃバキバキ♪ すぐ力を授けてあげる♪」

言うのと、ルクレツィアは川の中で跪いた。水嵩はそれほどない。ルクレツィアは庸のペニスをつかんで、いきなり咥え込んできた。ぬるぬるの温かい口腔がペニスを包み込む。包み込んだ時には、舌が龟头をしゃぶりはじめていた。

「ああっ……!」

庸は呻き声を上げてルクレツィアの肩をつかんだ。女神がいきなりフェラチオをしてきたのだ。かわいい女神は早くも首を上下に振ってフェラチオストロークを繰り返していた。優しく口唇でペニスを包みながら、首を上下に振ってお口でペニスをき立てる。すぐにペニスがとけそうになり、腰が躍った。

「ああっ……ルクレツィアッ……」

「いいよ、出ひて♪ 我慢ひなくてもいいから♪」

さらにルクレツィアが激しく顔を上下に振る。口唇がペニスに吸着してしごき立てる。推定Jカップのオッパイが、ゆさゆさと揺れた。庸を視覚だけでイカせようとする

かのように、重量感たっぷりにぶるんと跳ね回る。真上からは乳房の揺れは見えないが、斜めからなら揺れは観賞できる。

敏感なペニスを口でしごかれて、その上、眼下で揺れまくるオッパイを見せつけられて、庸はさらに勃起した。

(凄い揺れてる……！)

そう思ったら、ますます興奮してイキそうになる。

ちゅーつと吸引音が鳴り響いた。庸は腰をふるわせて叩いた。ルクレツィアがペニスを吸引して、精液を搾り出しにかかったのだ。吸引を浴びせながら、顔を上下に振ってペニスをしごき立てる。

(イカされる……！)

ペニスを吸引される快感に腰が砕けそうになりながら、庸は上半身を折り曲げて、両手を伸ばした。

オッパイに――手が届いた。

ぶるんぶるんと揺れるオッパイを両手でつかむ。すぐに欲情をぶつけてこねまわす。ずっしりした乳房が両手に広がった。やはり、前よりもボリュームが増している。指が気持ちいいくらい奥深くまで食い込んでいく。そして、オッパイが重い。

(気持ちいい……！)

庸は乳首を探して指でつまんだ。指でつまみながら、器用にぶるんぶるんとオッパイをこねまわす。指が乳房に食い込んでたまらない。

「ずるいの♪ オッパイはらうめ♪ 刑罰♪」

さらにルクレツィアが手で軽くしごきながら肉棒を吸引してきた。舌が龟头に触れたまま、凄い勢いで旋回する。手コキとフェラチオと龟头責めとのトリプル責めに、庸の腰が激しくひくついた。性感が爆発し、腰が躍る。絶頂の粒子が一気にペニスに充満し、上昇した。ペニスがルクレツィアの口の中とけていく。

(イッちゃう……！)

庸は思い切りルクレツィアのバストを握り締めた。指先が完全に乳房に埋まり、見えなくなる。乳房が歪に変形して突き出した。ルクレツィアが甘い声を洩らしたが、ルク

レツィアのトリブルフェラチオ責めはあまりにも気持ちよすぎた。腰が崩れそうになりながら、庸はルクレツィアに精液を噴射していた。

かわいい女神の喉が鳴った。庸はさらに腰をふるわせて、女神の口腔に精液を注いだ。注ぐそばから、次々と精液を飲み干される。まるで女神にペニスを貪られているみたいで、ゾクゾクと興奮する。

「ンフ♪ 地球人の精液って、やっぱり美味しい♪」

とルクレツィアがさらにペニスを吸った。猛烈な吸引を浴びせながら、同時に顔を上下に振って口唇でペニスを優しく搾り上げる。庸はまたJカップのオッパイに指を食い込ませた。ギチギチとオッパイを搾りながら、それでも乳揉みでは快感に耐えきれず、また射精した。再びかわいい女神の口腔に精液を注ぎ込む。

「ンフン♪ 美味ひいん♪」

甘い声を洩らしながら、ルクレツィアが精液を貪り飲んでいく。あずみもフェラチオは上手だったが、ルクレツィアはそれ以上だった。

「ルクレツィアア……!!」

腰が砕けそうになって、庸は思わず名前を呼んだ。



「ンフン♪ またオッパイさわるんだから♪ こうひてほひいの？」

ふいにルクレツィアがJカップの爆乳でペニスを挟み込んできた。ゆさゆさと高速で乳房を弾ませながら、ペニスを吸引する。

「ああっ、それだめえ……！」

庸はたまらず腰を右に左に揺さぶった。パイズリで優しくペニスをしごかれると、気持ちよくて我慢できない。ペニスがむずむずして、絶頂の粒子が充満してしまう。

「ンフン、腰クネクネひちやって♪ やっぱり、これ好きなんだ♪ もっと揺さぶってほひい？」

わかっているくせに尋ねながら、さらにパイズリストロークを加速させる。重量級のバストがばいんばいと暴れまわり、優しく、そして激しく、ペニスをこすった。やわらかい乳球が、すべすべの乳肌をこすりつけながら何度も何度もペニスをしごき立てる。童顔の女神がオッパイで絶頂寸前のペニスを騷りながら、舌と口とでも龟头を騷り立てるのだ。

ペニスがまたとけた。腰が激しく躍った。我慢なんて無理だった。

（だめ、イク……！）

庸は再び女神のオッパイに精液を打ち放っていた。ルクレツィアが口で濁液を受け止める。すぐに精液を貪り飲んでいく。

（貪られてる……女神に貪られてる……）

庸は激しく腰をふるわせた。イッてる最中だというのに、ルクレツィアはパイズリをやめない。ひたすらオッパイを揺さぶりながら、ペニスをしごきまくる。

「だめえ……！」

庸はまた射精した。ルクレツィアの喉が激しく鳴る。喉を鳴らせながら、引き続きルクレツィアが乳房でペニスをこすり立てる。もはや、淫乱女神、パイズリ女神である。

「ルクレツィア、またイッちゃう……！」

「イッて♪」

吸引音が鳴り響き、庸は上半身を折り曲げた。腰が引け

てお尻が後ろに突き出す。それでも、ルクレツィアはオツパイを揺さぶって、ペニスを颯り立てる。庸はまた声を上げて精液を放った。本当に腰が崩れそうになって、庸はルクレツィアの肩を強くつかんだ。

ルクレツィアの喉が鳴った。だが、乳房はもう揺れなかった。ようやくルクレツィアがパイズリフェラをやめたのだ。

「ほんと、いっぱい出すんだから♪」

とルクレツィアが笑った。

「だって、いっぱいパイズリするから……」

「パイズリされるの、好きでしょ？」

言われて、庸はうなずいた。

「じゃあ、こっちは？」

とルクレツィアが立ち上がり、恥丘をこすりつけてきた。またペニスがむくりと起き上がる。

「これ、入れて♪」

とルクレツィアが軽く手でペニスをしごく。

「あうっ……」

「ねえ♪ ねえ♪ 入れて♪」

と童顔のルクレツィアが甘くおねだりをくり返す。

「ルクレツィア、エロすぎ」

「だって、βのオチンチン、エロいんだもん♪ だから、こうしちゃう♪」

と立ったまま、ルクレツィアはバタフライショーツを剥ぎ、オマンコに庸のペニスを咥え込んだ。庸は思わず呻き声を上げた。

もうルクレツィアのおマンコに吸い込まれてしまっていた。ぬるぬるの果肉がペニスを包み込んでいく。

（はあ……ルクレツィアの膣、気持ちいい……）

「突き上げて♪」

ルクレツィアにおねだりされて、庸は女神のヒップに両手を回して、激しく腰を打ちつけた。ペニスがとろとろの果肉を掻き分け、子宮へ向けて何度も突進をくり返す。おまんこが繰り返しペニスを摩擦して気持ちいい。

「あん♪ そうっ♪ βのオチンチン、いい♪ もっと

♪」

庸は首を曲げて乳房をしゃぶりにかかった。片手で乳房をひきつかんで、無理矢理乳首を咥える。

ルクレツィアが声を上げた。庸は乳房を咥えたまま、再び両手でヒップをつかんで、破壊槌のようにペニスを打ち込んだ。高速でチンポが膣肉を何度もえぐった。律動に合わせてルクレツィアが悲鳴を洩らす。

「またオッパイ吸いながらするんだからぁ♪」

なんて言いながら、ルクレツィアが背中をしならせていく。オッパイを吸われながらチンポで突かれて、ルクレツィアが感じているのだ。

（感じてる……!）

そう思ったら、もっとルクレツィアを感じさせたくなった。

（両方しゃぶりたい……!）

庸は一旦ピストンを止めて両乳をつかんだ。今度は双つの乳首を一気に咥える。

「あぁっ、それいいっ……!」

ルクレツィアの背中がしなった。両手でバストを揺らして、びちゃびちゃと舌で乳首を弾く。重量感たつぷりのオッパイがぶるんぶるんと揺れる。

「あぁっ、それ、それえ……!」

庸はさらに乳房を揺らしまくった。振幅のスピードが上がれば上がるほど、高速で乳首が舌に颯られていく。

ルクレツィアが庸の腕をつかんだ。気持ちよくてじっとしていられなくなってきたのだ。

（感じてる、感じてる……!）

庸は両手でバストを揺らして乳首をしゃぶりながら、激しく腰を振った。何度もペニスが膣の中を突き抜ける。往還するたびに淫液が飛び散り、ルクレツィアが甘い声を上げる。庸も美肉でペニスをこすられて呻き声を上げる。

「もっと激しくしてえ……!」

庸は乳房から両手を離し、再びヒップをつかんだ。双つの重々しいバストを咥えたまま、削岩機のようにオマンコにペニスを突き刺していく。美肉にこすられながら亀頭で

何度も膣肉をえぐり、子宮へ向かって性感を突き立てていく。

「ああっ、それ、それ、それえ、それいいっ……イッちゃう……！」

童顔の女神が激しく首を横に振ってイヤイヤをした。庸に乳首を吸われながらオマンコを突きまくられて、本気でイキそうになっているのだ。

（女神をイカせてやる……！）

庸は舌を動かした。ちゅるちゅると淫乱な音を立てながら両方の乳首を吸る。上半身最大の性感帯を容赦なく責め立てながら、同時にマシンガンのようにペニスを打ち込んで女神のオマンコを犯していく。

「それ、イク、それイクからあ……！」

ルクレツィアが首を横に振ってかわいくイヤイヤをする。胸の性感とオマンコの快感とで、絶頂寸前に追い込まれているのだ。

庸もイキそうだった。ずっと膣内にペニスを摩擦されつづけてきたのだ。チンポが気持ちよくてたまらない。オッパイを吸う快感とオマンコを突く快感とで、爆発したくてたまらなくなっていた。

先にイッちゃう？

まさか。イクのは女の方が先だ。

庸は首を横に振りながらバストを吸引した。左右に引つ張られることで、ルクレツィアの胸の性感が倍加する。さらに乳房を吸うことで、快感はさらに増幅される。気持ちいいおチンポで責められながらオッパイも責められて、ルクレツィアは絶頂へ向かって悲鳴を上げた。その機を待っていたように、庸は最高速で腰を振った。チンポが気持ちよくてとけそうになる。それでも、最高速でオマンコを突いていく。とろとろの美肉を猛烈なスピードでペニスが往還し、オマンコを犯した。あまりの激しさに子宮が揺れる。

「それイク、それ、イクう……!!」

ルクレツィアのイヤイヤが突然止まり、声が消失し、身体が硬直して後ろにそり返り、全身が痙攣した。ビク、ビ

クツと何度も間欠的に身体がふるえる。絶頂寸前で緊張していた表情が弛緩し、仏のような表情に変わる。

ルクレツィアが絶頂に達したのだ。そして絶頂と同時に、〇・八秒のリズムで腔肉がふるえ、ペニスを搾った。快美な戦慄が下半身に爆発した。

（オマンコがめっちゃ締めつける……！）

我慢は無理だった。彼女の絶頂を追いかけるように、庸はルクレツィアのオマンコに射精していた。女神の腔に、どろどろの濁液を大量に注ぎ込んでいく。その精液にまた反応して、ルクレツィアの身体がピクピクと痙攣する。痙攣と腔の収縮に反応して、庸がまた射精する。

（気持ちいい……！）

絶頂の中で、庸は思い切り身体の熱さを覚えた。いきなり身体が発火したみたいに熱くなったのだ。頭から爪先まで、いきなり全身が燃えたような感じだった。

（何だ……!?!）

「ああ、力が行った……」

とルクレツィアがつぶやいた。いきなり妙な圧力が庸の中に押し入り、込み上げた。庸は唸りそうになった。何かの勝手に侵入し、充滿して、勝手に自分の中を胸へ向かって駆け昇る。胸が爆発しそうになった。不思議な圧力は胸から一気に脳天へと駆け抜け、庸はうおっと声を洩らした。

そして、いきなり圧力は脳天から抜けた。視界の中が金色の光一色になった。視界が一瞬、光にジャックされた。その後、急激に光は衰退して視界が戻った。

（何だ……?）

初めての体験だった。神秘的体験と言うべきなのか。トランス？ 庸にはわからない。修行とは縁のない人生を送ってきたのだ。

ルクレツィアは、ハアハアと息をついていた。身体にしっかりと汗が浮かんでいる。

「来たでしょ？」

と庸に問いかけた。

「え？」

「今、βに力、あげたから」

「え!？」

(力って、今来た変な感覚?)

ルクレツィアが微笑んだ。

「βが望んだ力、わかったよ。暗黒騎士になったら、どんな力が欲しいのか」

「いったい何を言ってるんだろう、と庸は思った。力のことはまだ誰にも言っていない。わかるわけが――」。

「オッパイをしゃぶって女エージェントを味方にする力」

庸は絶句した。当てられるはずのない力を、ルクレツィアは当てていた。

「なんで――」

「だから言ったでしょ？ わたし、今日女神なの。異能を授ける女神。女神は力を授けるの。その時に、どんな力が欲しいのか読み取るの」

庸は言葉を失っていた。こんな神秘的な体験をするのは初めてである。

「ベルゼリア様からもらったキー、ちゃんと効いてよかった」

「キー？」

「内緒の種。それを飲むと、力をあげられるの。だから、わたし今日、胸おっきいの」

とルクレツィアが笑う。庸は笑おうとしたが、うまくいかなかった。まだ、頭がついていかない。

「ちゃんと力、あげたよ。βはもう今日から暗黒騎士。もう絶対ボールシフトされない。ずっとわたしたちデモニアの味方」

ルクレツィアの目は喜びに輝いていた。庸がデモニアの一員になったことを、心から喜んでいるのだ。

「みんなのところに戻ろ」

とルクレツィアが促した。

「ああ……」

「でも、その前に……」

ルクレツィアは庸から離れると、滝の上に突き出した岩に両手を突いて、お尻を向けた。

「もう一度♪ 力を授けたご褒美♪」

ルクレツィアはやっぱりエッチな女神だった。庸はヒップをつかんで、後ろから龟头を突き進めた。庸をイカせた膣肉がまたペニスに吸着し、側面から肉棒をこする。あん♪と甘い声を上げて、ルクレツィアがヒップを突き出した。庸は前に屈んで両手を伸ばし、両方のバストを揉みだいた。

「あん、またオッパイ♪」

ルクレツィアがゾクツと身体をふるわせる。「またオッパイ」と言いながら、ルクレツィアもオッパイを揉みしかれるのが好きなのだ。もちろん、庸も好きだった。手に余る爆乳を握り締めながらチンポでオマンコを突くと、手の快感とオマンコの快感とですぐイキそうになってしまう。

「明日になったらもう胸、今日より小さくなっちゃうの？」

「いっぱい揉んだら、ずっとそのままかも♪」

ルクレツィアの言葉に、庸は思い切りバストを握り締めた。ルクレツィアが甘い嬌声を上げる。オマンコがきゅつと窄まって、ペニスを優しく締めつけた。

（やばい、もうイク……）

庸はさらにバストを握り締めた。ぎゅうぎゅうと搾乳するように搾りながら、高速でピストンを打ち込んでいく。推定Jカップの乳球が心地よく指を押し返し、オマンコの美肉が激しくペニスを摩擦する。

（チンポ、とける……！！ 我慢するの、無理い……！！）

イキそうになって、庸は激しくバストをわしづかみにした。欲望をぶつけるようにぎゅうぎゅうとバストを狭搾しながら、狂ったようなスピードで腰を振る。龟头が何度も美肉を掻き分け、子宮へ向かって突進した。突進のたびにオマンコがペニスをこすり、絶頂へとろけさせていく。気持ちよすぎて、もはやチンポの感覚がない。

（もうイク……！！）

「またイク、またイクう……！！」

ルクレツィアが叫び声を上げ、ヒップを突き出して全身

を痙攣させた。庸も女神の淫乳を搾りながら、オマンコに
精液を打ち放っていった。

夜の運河を、ボートはゆつくりと進んでいた。後部の寝室に設けられたキングサイズのベッドには、三人の男女が横たわっている。

真ん中が庸。そして左右にアイゼナハとインフィニアである。庸は惚けた表情を浮かべて、静かに寝息を立てていた。だが、アイゼナハはまだ起きていた。こうして庸のすぐ隣で同じベッドに潜って庸を見ていると、ひしひしと実感と愛しさが込み上げてくる。やっと庸を取り戻せたのね。また庸といっしょにいられるのね。これからもずっと、ずっと……。

庸が身に付けた力のことを思うと、本当に庸らしいなと思う。敵の女エージェントを味方にする力だなんて……。

インフィニアは、人間の奉仕局員や戦闘員を含めて女をチャージする力じゃないかと推測を披露していた。だが、庸は違うものを選んだ。チャージするんじゃ、自分は直接戦闘でみんなの役に立てないと庸は話していた。

庸は、これからは暗黒騎士ヨウと名乗ることになる。アイゼナハと同じ隊ではなくなる。自分の部下でもなくなる。でも、その代わり、永遠に同じデモニアの一員となるのだ。決してボールシフトされることもなく、自分と同じ仲間ですづけることになる――。

庸は、寝る直前まで学校のことを気にしていた。おれ、朝出掛けなきや。教室の掃除をしなきや。

庸には人間の生活がある。学校という場所に通っていて、そこでは一番の下っぱなのだそうだ。非常に不当な、失礼なことのようにアイゼナハは感じる。庸は奉仕局員29号ことクラリッサに全費用を出してもらっていて、毎朝教室の掃除を済ませてクラリッサを出迎えなきやいけないぞうだ。

いいから休みなさいとアイゼナハはインフィニアと二人で論じた。クラリッサには連絡しておいてあげる。だから

ら、明日は学校を休みなさい。

それでも庸は、六時半になったら起こしてと頼んで目を閉じた。起こすつもりはもちろんなかった。庸には休息が必要だ。

「眠れないのか？」

インフィニアが身体を向けていた。

「眠りたくないの。もったいなくて」

とアイゼナハは答えた。

「わたしは逆に眠れん」

とインフィニアは苦笑した。それから、ぐっすり眠る庸に顔を向けた。インフィニアも、庸が戻ってきた実感を確かめているようだ。

「本当に戻ってきたんだな」

そうインフィニアがつぶやいた。

「ええ。戻ってきたのよ。これからは、もうずっといっしょ」

「ああ、ずっといっしょだな」

アイゼナハの同意に、インフィニアも同意する。

しばらく沈黙がつづいて、ふいに庸が苦しげな表情を浮かべた。

（どうしたの？）

心配になる。

「おれ、デモニアに帰る……」

庸の寝言だった。きっと、エージェントに囚われている時の夢を見ているのだ。愛しさと切なさが胸から溢れだしそうになって、アイゼナハはインフィニアと二人で庸の手をつかんだ。

「大丈夫よ。もう戻ってきたのよ」

「おまえはもうデモニアに帰って来たんだ」

アイゼナハとインフィニアが次々に声を掛ける。二人の手の感触と言葉に安心したのか、庸の緊張した表情が弛緩した。もう寝言は出てこなかった。

「いやな夢を見る必要はないのよ。ずっといい夢を見て」

アイゼナハは庸の額に、いっばいの愛情を込めて口づけをした。

ずいぶんと長い間、暗黒の中を彷徨っていた気がする。ずいぶんと長く電源の切れた状態を味わっていたような気がする。

庸が目を覚ますと、なんだか雰囲気ざわついていた。朝特有の静けさはない。だが、ボート内の寝室は暗い。扉が昼光を閉ざしている。そして、アイゼナハの姿もインフィニアの姿もなかった。

(まさか……!)

寝室を飛び出すと、リビングでルクレツィアがオレンジらしいフルーツを食べていた。

「おはよ」

とルクレツィアが明るい声を掛ける。

「今何時？」

「二時」

(なんだ、間に合っ——)

思ったところで、庸は慌てた。

(昼の二時じゃないか! 大遅刻!)

「ベルゼリア様が、今日は学校を休ませてやれって言ってたよ。ゼルシアがメール打ってた。たぶん29号だと思う。学校では、庸の友達なんでしょ？」

ルクレツィアが初めて庸を名前で呼んでいた。少し前までは、戦闘員の名前—— β と呼んでいたはずだ。

「なんでおれの名前——」

「ベルゼリア様が、これから β のことは庸様って呼べて。わたしは様なんかけないけど。つけるのはベルゼリア様だけだから」

とルクレツィアがしゃあしゃあと答える。

「何か食べといった方がいいよ。暗黒騎士と戦闘員に紹介するんだって。奉仕局員への紹介は基地を再建してからするって言ってたけど、その前に、デモニア星人に紹介するって」

そうか、みんなに紹介するのか……と庸は少しだけ緊張

を覚えた。

「アイゼナハは？」

「台所」

とルクレツィアが答える。

（台所？）

なぜキッチンに？と思いつながら台所に入ると、エブロン姿の褐色肌の鬼娘と眼鏡の女性が目に飛び込んできた。白いエブロンの下から、かたや褐色の肌だけが、かたや白い肌だけが露出している。褐色のバストと白いバストは、脇から半分顔を覗かせていた。乳首は見えない。そしてエブロンの下側からは、褐色のお尻と白いお尻が見えていた。まさにさわってくれ、挿れてくれと言わんばかりの格好である。

アイゼナハとインフィニアだった。二人とも、裸エブロンでサンドウィッチをつくっていたのだ。

アイゼナハの白いお尻とインフィニアの褐色のお尻が並んだ姿は壮観だった。家庭的なのにエロい姿にムラツとする。昼からこんな格好をするなんて、きっと二人とも庸とセックスしたいに違いない。庸も、起床早々に欲望を覚えた。

「見ろ、わたしの予想通りだろ。二時に起きると言ったぞ」

とインフィニアが笑う。

「ご飯つくってるの？」

と庸は尋ねた。

「あなたの分。ちよつと待ってて」

とアイゼナハがタマネギの 슬라이スを始めた。包丁で薄く切っていく。それから、サーモンを取り出した。トーストに並べてマヨネーズを掛け、さらにタマネギを載せ、マヨネーズの上にケツパーを並べてまたトーストを載せる。最後に両手で押してラップで包んでから、アイゼナハは冷蔵庫に入れた。

インフィニアがキュウリを包丁で 슬라이スした。すぐに卵サンドの上に載せる。それからまたトーストを載せて、やはりラップで包んで冷蔵庫に入れた。

「冷蔵庫、ついてたんだ」

と庸は驚いた。

「みんなでボートを予約して、思い思いに運河の船旅を過ごすのよ。運河はずっと遠くまでつづいてるの」

とアイゼナハが説明する。やっていることはとても家庭的なのに、ヒップは剥き出し。オッパイは無防備――。

(いい……)

庸は二人の後ろに近づいた。白い剥き出しのヒップと褐色の剥き出しのヒップ。そしてエプロンに覆われた白いオッパイと褐色のオッパイ――。

どちらからさわる？

もちろん――。

庸はアイゼナハの後ろから身体を押しつけた。くすつとアイゼナハが笑う。

「エッチはだめよ。今、包丁を持ってるから」

と優しい声で言う。庸はエプロンの中に手をつっ込んだ。両手に生乳のしっとりした感触が触れる。両手の中で乳房が弾ける。庸は一発で陥没乳首を探し当ててほじくった。庸の人差し指が、アイゼナハの一番の胸の弱点にぐりぐりとめり込む。

「あん、もう、だめよっ」

とアイゼナハが身をくねらせる。庸はさらにバストをほじくった。執拗に指でぐりんぐりとバストを攪拌して、指先を乳首に沈み込ませていく。乳房がたわみながら抵抗するが、乳首は簡単に指先で弾けていく。

「ああん、だめって言うてるのに……」

アイゼナハの上半身がゆっくりと波を描き、下半身がくねる。庸は剥き出しのヒップに腰を押しつけた。トランス越しに勃起したペニスをこすりつける。アイゼナハのヒップがびくつとふるえた。

アイゼナハも入れてほしいのだ。

(おれも入りたい……！)

庸はおねだりするように、ペニスをこすりつけた。こすりつけながら、エプロンの中のGカップ乳の乳首をしつこくほじくる。

られてしまう。

「庸っ、それ、だめえ……!!」

イキそうになって、アイゼナハが首を横に振った。

「おれより先にイッたら、もう入れてやんない」

「意地悪っ……」

首を振ってイヤイヤをするアイゼナハのバストを、さらにほじくりまわした。エッチな指ドリルが乳球にめり込み、オッパイの中心から快感をえぐりだしていく。そうして乳房を快感の豊球に変えながら、チンポドリルでオマンコを突きまくる。パンパン!と乾いた音が連続し、アイゼナハの肘が崩れそうになった。前のめりになって快感に耐えながら、もっと突いてとばかりにヒップを突き出す。

（やっぱりアイゼナハのオマンコ、気持ちいい……!!）

庸は人差し指を陥没乳首に突き刺したまま、オッパイをわしづかみにして猛烈に腰を振った。とろとろの美味が高速でペニスを撫で、締めつける。チンポがとけそうになった。

（やばい、イク……!!）

我慢しようとしたが遅かった。庸は激しくバストを握り搾ったまま、腰をふるわせていた。起きて一番の精液を、アイゼナハのオマンコに注ぎ込む。アイゼナハの身体がビクンビクンと波打ち、庸の精液を子宮へと受け止めていく。膣が蠕動し、さらにペニスを搾り立てて、庸はバストを握り締めたまま、また腰をふるわせた。アイゼナハも、庸の射精に呼応するようにぶるぶるっ、ぶるぶるっとして身体をふるわせた。間欠的に絶頂が襲いかかっているらしい。アイゼナハが荒々しく吐息をついた。

「ほんと、スケベなんだから……」

「裸でエプロン着けてる人の方がスケベ」

と言って、庸はまた双つの乳首をほじくった。アイゼナハがビクツと身体を痙攣させた。高速で肢体が波打つ。陥没乳首を責められるだけでまた絶頂に達してしまったらしい。

「料理人はここにもいるぞ」

とインフィニアがアイゼナハのすぐ隣でアピールした。

アイゼナハといっしょに裸エプロンの格好をしていた理由は、庸にもわかつている。

庸はアイゼナハから離れて、インフィニアの後ろに迫った。

インフィニアはスプーンで卵フイリングをトーストに塗り込んでいた。簡単な料理といっても、エプロン姿のインフィニアは新鮮である。いつも黒いライダーズーツに身を包んで見せている武闘派のイメージとは違う姿に、興奮する。庸は後ろから身体を密着させた。くすつとインフィニアが笑う。庸はエプロンの中に手をつ込んでバストを揉みしだいた。むっちりとした張りのある褐色のふくらみが手の中で充満し、心地よい反発力で指に反抗してくる。

「あん、こゝら♪」

とうれしそうにインフィニアが身体をふるわせる。さらに胸をさわりやすいように両腕を上げて、庸の首の後ろに回してきた。ツンとバストが突き出す。お返しとばかりに双球をこねまわす。インフィニアが甘い声とともに胸を突き出す。庸は一発で乳首を探し当てて、指をずぶずぶとめり込ませた。インフィニアの身体がピクンと跳ねる。

「怒るぞ♪」

と優しい声でインフィニアが言う。怒る気が全然ないの
は一目瞭然だ。

「こうしたらもつと怒る？」



庸はさらに乳首をコリコリと指でつまんだ。敏感な突起を優しく潰して、胸一番の性感帯から快感を引き出していく。

「こゝら♪」

インフィニアの顎がわずかに上がる。気持ちがいいのだ。

（インフィニアの中でも爆発したい……！）

激しく欲情して、庸は射精したばかりのペニスをインフィニアのオマンコに突き入れた。アイゼナハとは違って、やわらかい膣肉がぎゅっと密着して早くもペニスを搾りに来た。根元付近の締めまりもいい。運動能力の高いインフィニアらしいオマンコだ。

「気持ちいい……」

少しイキそうになって庸が感想を洩らすと、

「すぐイッていいぞ」

とインフィニアが囁いてきた。

「じゃあ、イッちゃう」

庸は両手でオッパイをつかみ直して、いきなり腰を振りはじめた。突然の高速ピストンに、インフィニアが悲鳴を上げる。

「馬鹿あ……おまえのチンポ、気持ちいい……」

だが、庸も呻いていた。ペニスが激しく膣を往還するたびに、ぬるぬるの膣肉が激しくペニスをこすり、搾り立てるのだ。

もうやばかった。ピストンにつれて快感の粒子がちりちりとペニスに充満してくる。腰を振るたびにオマンコがペニスをしごいて、射精へと駆り立てていく。

「んあっ……やばい……」

呻きながら、庸はオッパイを強く握り締めた。手の中で、Hカップの褐色バストがはちきれそうになって、逆に庸の両手に快感が炸裂する。オッパイの快感とオマンコの快感のダブル快感に、腰が砕けそうになる。気持ちよくてチンポが爆発しそうだ。

「休んじやだめだぞ♪」

肉褌がさわさわと蠢いてペニスを撫でた。肉褌が亀頭に

触れて、優しく颯る。快美な戦慄がほとぼしり、

「んあっ……!!」

庸は激しく呻いた。

「ほくら、イッちまえ♪」

インフィニアがヒップをくねらせた。右から左から膣壁がペニスに吸着し、甘美に肉棒を摩擦した。イキそうなところでヒップに颯られて、さらにイキそうになる。

「それ、だめえ……」

「これか？」

とさらにインフィニアがヒップをクネクネさせる。

（もうだめえ……!!）

精液が輸精管を駆け昇った。快感に耐えながら庸は思い切り指先を乳首にあてがい、めり込ませた。イキそうになつてインフィニアが悲鳴を上げた。オマンコが窄まり、庸も声なき悲鳴を洩らした。それでも乳首をぐりぐりとサデステイックに颯りながら、最後の力を振り絞って狂つたように高速ピストンを叩き込む。

「くああっ、馬鹿あつ、おまえ、強いっ……!!」

インフィニアが首を横に振つて、激しくイヤイヤをした。イヤイヤをしながら、膣でペニスを締めつける。気持ちよすぎてペニスの感覚が消えていく。庸は乳首をほじくり、バストを揉みまわしながら、感覚が遠のいたペニスで何度も突いた。突いている最中にさらに感覚が消える。腰が快美感で崩れそうになった。それでも、オッパイを握り締めてオマンコを突きまくる。インフィニアが甲高い悲鳴を上げ、庸のチンポがとけた。

（んああっ、もうイクう……!!）

ついに射精が襲いかかった。庸は思い切り腰を痙攣させ、褐色の女戦士のオマンコに精液を打ち放った。射精しながら、それでも高速ピストンをオマンコに打ち込んでいく。インフィニアが、あああつと声を上げ、突然褐色の肢体を激しく痙攣させた。庸に胸を揉まれたまま、エプロンを着けたまま、ぶるっ、ぶるっと大きく身体をふるわせる。インフィニアも、絶頂に達したのだ。

ほとんど腰が崩れかけて、庸はオッパイにしがみつ

た。さらに腰がふるえて、精液が噴射する。気持ちよくて立ってられない。インフィニアも、キッチン台に手を突いてヒップをふるわせた。ゾクゾクと絶頂の痙攣が身体を腰から胸へと上がり、また胸から腰へと往復する。

「ああ……やっぱりおまえ、気持ちいい……」

とインフィニアが呻いた。庸はインフィニアの爆乳をつかんだまま、激しく息をついた。射精の快感が気持ちよくて、身体が消えてしまいそうだった。

（やっぱり、二人とも気持ちいい……）

3

アイゼナハとインフィニアがつくってくれたサンドウィッチは美味しかった。冷蔵庫に三十分放り込んだおかげで、パンの生地もしっとりしていた。

アイゼナハが淹れてくれたココアを飲んで、アイゼナハが用意してくれたてかてかの青いガウンを着て、庸はアイゼナハとインフィニア、そしてルクレティアとともに船を下りた。だだっ広い通りを歩く。この通りを歩いて、射撃場に入って西部劇ごっこをしたよなあ……と昔のことを思い出す。

庸の戦闘コスチュームは、これから採寸してつくって、来週には届くということだった。それまではボクサーが対戦前に羽織るようなガウンを着ることになる。

庸が連れていかれたのは、デモニア星人の体育館だった。低いフロアー——アリーナ——に戦闘員がずらりと整列していた。皆、デモニア星人である。そして奥の高いステージには、数人の暗黒騎士が並んでいた。紫色のロングヘアのゾシアの姿も、水色のミディアムヘアのゼルシアの姿もある。そして暗黒騎士の真ん中には、ベルゼリア——途端に庸は緊張を覚えた。

「新しい暗黒騎士が来たぞ！ 庸だ！」

庸の姿に、ベルゼリアが叫んだ。戦闘員たちが一斉に顔を向け、拍手を始めた。割れんばかりの大拍手である。こんな拍手を受けるのは、庸にとっては初めてだ。小学生の

頃から思い出しても、こんなに注目を浴びた経験はない。

拍手の中、庸は先頭のアイゼナハと後続のインフィニアに挟まれてステージへと歩き、袖の階段から上がった。ベルゼリアがステージ真ん中で笑顔で出迎える。

「皆の者、よく覚えておくがよい！　これからおまえたちとともに戦い、おまえたちが仕えることになる暗黒騎士、庸だ！」

ベルゼリアがあからさまに声量を上げて叫び、拍手もいつそうボリュームを増した。庸は、ステージの上からフロアーのデモニア星人たちを見た。皆、笑顔で手を叩いている。

（あ、圧倒される……）

しばらく拍手が鳴り響くと、ベルゼリアは静粛にするように促した。それから、演説を始めた。

「皆も知っているように、庸は地球人だ！　だが、心はデモニア星人と同じだ！　覚えておろう、庸がどれだけアイゼナハとインフィニアを勇気づけたかを！　庸は地球に存在する全基地の乳揉み係の中でも、間違いなく最高、最強の乳揉み係だ！　わたしは基地内の全女性暗黒騎士は、庸を乳揉み係にすべきだと考えている！」

ベルゼリアが一旦言葉を切り、拍手が鳴り響いた。正直、持ち上げられすぎてむず痒い。みんなの前でこんなに褒められたことなんて、人生で一度もない。

ベルゼリアが再び口を開いた。

「庸のすばらしさはそれだけではない！　まだ戦闘員でもなかった頃、庸はエージェントを送り込んだスパイドッグに気づき、撃破した！　戦闘員になってからは、敵エージェント、ピンクポリスを生け捕りにした！　一人のエージェントを、この地球から葬り去ったのだ！　庸が作戦隊長になってからは、一度も敗北したことがない！　エージェントはまったく太刀打ちできなくなった！　我らは無敵となったのだ！　あまりの強さに、卑怯にもエージェントは庸を誘拐し、ボールシフトするという暴挙に出た！　だが、我々は庸を奪い返した！　そして二度と奪われぬように、庸を暗黒騎士に叙任したのだ！　庸の叙任に疑いが

ある者はおるまい！」

さらに拍手が鳴り響く。ベルゼリアの言葉に同意して、盛んにうなずきながら熱心に拍手を送る。庸にはやっぱりむず痒い。

「皆は幸せ者だ！ 我々は、庸という最強の乳揉み係にして非常に優秀な戦闘員を、暗黒騎士に迎え入れられたのだ！ 今日より、我ら第〇八一基地に敗北はないと、わたしは宣言しよう！ 皆の者、心から喜んで庸に仕えるがよい！ 喜んで庸と戦うがよい！」

さらに拍手が鳴り響いた。体育館自体がまるで巨大な反響装置になったみたいだった。拍手の音が、思い切り反響している。

「庸、前に出て手を振ってあげて」

アイゼナハに促されて、庸は動転した。

「手、振るの？」

「だって、あなたと戦う仲間なのよ」

そう言われて、庸はようやく前に進み出た。だが、どうも足許の感覚がない。手と足の動かし方すらわからない。どこもなく前に進み出て、庸は自分を見つめる視線に戦いた。圧力を覚える。

「手を振ってあげて」

アイゼナハに再度促されて、庸は手を振った。うおおつと歓声が上がった。体育館が巨大なスピーカーに変わったみたいに唸る。

ヨウウ！ ヨウウ！

と誰かが叫び出し、すぐに大合唱になった。

ヨウウ、ヨウウ、ヨウウ、ヨウウ！

戦闘員たちが声をそろえて庸の名前を呼ぶ。これから自分たちが仕えることになる庸に対して、みんなが歓呼の声を上げているのだ。

ヨウウ！ ヨウウ！ ヨウウ！ ヨウウ！ ヨウウ！

戦闘員の連呼が、胸の奥に、身体の内芯に響く。心だけでなく、肉体にも響くような叫び声だ。庸は、身体の内から高揚を掻き立てられた。連続する叫びに、心が共振させられてふるえていく。強烈な圧力とともに興奮が込み上げ

で、

「みんないっしょに戦おうっ！」

庸は叫んだ。さらに歓声が爆発した。

ヨウウ！ ヨウウ！ ヨウウ！ ヨウウ！

連呼は止まなかった。戦闘員たちの叫び声を全身に浴びながら、庸は今までにないほどの歓喜と興奮を覚えていた。

あとがき

本当にお待たせしました！『揉ませてよオレの正義』の第六巻です！手に取っていただいたお客様には、ひたすら感謝感謝です！どんどんお客様が神様になっていく……！

原稿は二〇二〇年半ばには書き上げていました。新型コロナウイルスで東京中が緊急事態宣言で人出が激減するゴールデンウィークの間に集中して、一気に書き上げたのです。『巨乳ファンタジー4』の作業もあったので、その最中の仕事でした。

ただ、それからがね……。スムーズに進めば、読者の方にストレスを与えることはなかったんだけどね……。すぐに編集さんが連絡を取ってイラスト作業が始まったのですが、どうしてここまで時間が掛かってしまうのだ？読者の方を待たせないために、自分はいったいどれくらい前に書き上げればいいのか？プロとして猛省していただきたいと思います。期日通りに仕事を仕上げていただきたいです。

というわけで小言は終了。小言を一番言いたいののは、間違いない読者の方だからね。みんな、お待たせしてごめんね。

さて、今回六巻はついに動きます。あの人が帰ってきました。あの人はあの人です。あの人が帰ってきたことで、動き出します。

いつも正義の物語を書く時、舞台となる場所の図面を書くんですけど、今回も庸がいる部屋の図面を書きました。大事な場所だからね。男性主人公がいる場所の図面を書いて、部屋にどんなものがあるか、マンションや家屋にどんな部屋があるのかという図面を書く、書き手の中で「ここにこれがある……」という確信の下、ふわふわせずに物語を書くことができるんです。図面、大事です。庸が作戦隊長となって指揮を執って戦った話を書いている時は、執筆前に基地内の図面を書きました。ここがD5、D4、D3エリアで、ここに池があつて、エージェントがど

ここから入ってきて、デモニア側がどう撃退するのか。それを書いてました。書かないと、戦闘ものはチープ魔神に撃退されるのです。

というわけで、どんな動きになるのかはお楽しみに。ちなみに第七巻の原稿はすでにあげています。第七巻もお楽しみに！

最後に編集のMさんとイラストの牡丹さんと素敵な校正さんにお礼を申し上げて、いつもの締めで終わりたいと思います。

じくじく・ポイン！

二〇二一年五月二十一日、ようやくケータイからスマホに変更しました（笑）

ぶちばら文庫 Creative

揉ませてよオレの正義6

2021年6月28日 E P U B版発行

■著 者 鏡裕之

■イラスト 牡丹

発行者 久保田裕

発行所 株式会社パラダイム

〒166-0004

東京都杉並区阿佐谷南1-36-4 三幸ビル4A

TEL 03-5306-6921

©HIROYUKI KAGAMI ©BOTAN

この本は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。